

第一節 植物

植生と植物相

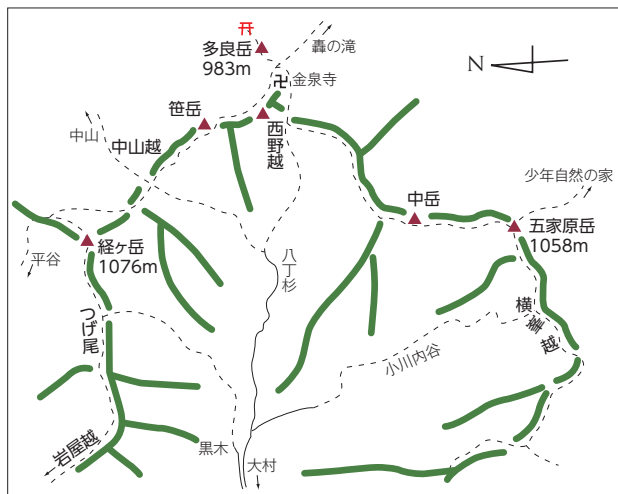


図3-1 多良山系の山の概略図 (林正康「長崎県の山歩き」より)

1. 多良山系の植生

県立自然公園となっている多良山系は日本で最も西に位置する一〇〇〇メートル級の山岳で、小面積ではあるがブナ林やミズナラ林が見られ、多くの冷温樹林帯の西限となっており、日本の植生学上重要な地域である。

一方で名勝地としての知名度は雲仙岳ほど高くないが、山が非常に古いことから険しい岩峰や溪谷、滝なども数多く見られ、地形的にも複雑で変化に富んでいる。そのため九州西部ではまれな深山性あるいは冷温帯性の植物が出現し、植物の種類は雲仙岳よりむしろ多く一〇〇〇種以上を数える貴重な地域となっている。

さて、多良岳全山の中で大村市の占める面積は二五割にたらずで、最高峰の経ヶ岳（一〇七六メートル）の山頂で隣県の佐賀県と境し、南の五家原岳（二〇五八メートル）の頂上で諫早市に境している。更に多良岳（九八三メートル）は佐賀県藤津郡太良町の領分であり、県営山小屋のあ

る金泉寺は諫早市に属している。

### 冷温帯樹林帯—夏緑樹林(落葉広葉樹林)

標高が高くなるにつれ、夏季に緑葉をつけ、低温の冬季には落葉する夏緑樹林と一年中緑色の葉をつける照葉樹林の混交林は、県下では海拔九五〇〜一〇〇〇<sup>メートル</sup>にかけてシイ、カシ、タブノキなどの照葉樹林域からナナカマド、カエデ類の夏緑林域に移行する。多良山系の経ヶ岳、五家原岳、多良岳は夏緑林域に入り、高木層にはアカシデ、アカガシ、アズキナシなどが目立ち、亜高木層にはシラキ、リョウブ、シロモジ、タンナサワフタギなどが、低木層にはコガクウツギ、ヤマアジサイ、ハイノキなどが見られ、草本層にはツクシシアオイ、ツクシガシワ、モミジガサ、シシガシラ、サツマイナモリなどが多い。

### 暖帯樹林帯—照葉樹林(常緑広葉樹林)

標高七〇〇<sup>メートル</sup>前後までの低地から山地中腹にかけてタブノキ、スタジイ、アカガシ、シキミ、ハイノキなどの照葉(常緑広葉)樹が見られるが、一方で、海拔六〇〇〜一〇〇〇<sup>メートル</sup>の山地には針葉樹のモミ林が広く分布しており、高木のモミ林の下にはイスノキ、アカガシ、サザンカ、ヤブニツケイ、シキミなどの常緑樹が多く、低木層にはヒサカキが多く自生している。

経ヶ岳や五家原岳、多良岳の山頂一帯になるとコハウチワカエデ、ナナカマド、クマシデ、ミズギ、ミズナラなど冷温帯の夏緑樹林が主体となる。なかでも経ヶ岳山頂の尾根筋やタワラギ山(一〇四〇<sup>メートル</sup> 佐賀県)の山頂一帯には冷温帯の代表的な夏緑樹のブナ(樺)が見られ、本州のものに比べると小さいが、多良山系がブナ分布の西限地として注目される。

また県下では多良山系特産種のマンサクが早春に黄色いリボン状の花を開き、真つ先に春の訪れを告げる。

中腹以上の尾根筋では傾斜五〇〜七〇度の岩場にツクシシヤクナゲが生育し、五月にみごとな大型のピンク色の花を咲かせる。特に諫早側の小松尾公園一帯のツクシシヤクナゲ群落は貴重で、ツガ、スタジイ、ケヤキの原木やヒメシヤラ、カクギノキ、イタヤカエデなど落葉樹も生育しており貴重な自然林が残されている。林床にはオオキツネノカミソリが群生し、真夏の七月下旬から八月上旬にかけて朱赤色の花を一斉に咲かせる。

標高五〇〇<sup>メートル</sup>以下の低地は、その多くがスギ、ヒノキの植林地や耕作地などになり、自然林は溪谷などの急傾斜地や

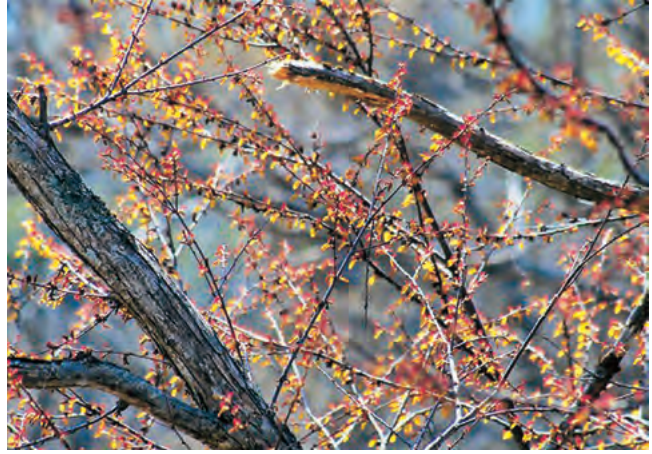


写真3-1 カツラ・桂(カツラ科)の雄花 葉が出る前に花をつける

航海の途中に熱帯地方の気候に負けて、枯らしてしまっただけからである。天然記念物として国指定になっているのは、福岡・大分県にまたがる犬ヶ岳(一三二二m)でツクシシヤクナゲのトンネルとブナの原生林が有名で、そのため登山者も多い。

「五家原岳ツクシシヤクナゲ群落」は、昭和三十三年(一九五七)に県指定天然記念物となったが、往時は全山の至る所に見られ、太良権現や金泉寺に参拝した帰りに枝葉を折って、自宅の神棚に「多良岳シバ」と称して供えたという。

社叢林などに残存しているのみである。多良山系の山麓には溪谷が比較的多く、その周辺部は大部分スギの植林地となっているが、黒木の八丁谷にはウラジロガシが多く、また、黒木の谷上流部ウナギテ沢には発達したシオジ林があり、八丁谷には雲仙にはないカツラの自生が見られる。なお、サワグルミの個体は多良山系に知られているが、林としては見られない。

## ■2. 金泉寺・多良岳山頂、五家原岳、経ヶ岳付近の群落及び希少な植物

### 1 ツクシシヤクナゲ(筑紫石楠花)群落

「シヤクナゲ」(ツツジ科)は、日本特産の名花として江戸時代の末に出島に来たシーボルトが『日本植物誌』に原色図を記載して、ヨーロッパに紹介している。

図は、私が江戸に滞在したとき(一八二六)に薩摩藩主からいただいた生きた植物をもとに作成したものである。残念ながら、私はこれを生きたままヨーロッパに持ち帰ることができなかった。

五家原岳の指定地は頂上近くの三五度ほどの急傾斜の地域に最も多く見られ、シラキ、コナラ、ミズナラ、ツリバナ、ソヨゴ、ヤマシグレなどと混生している。大きいものは根回りが四〇センチ以上、高さが五メートルを越し、一株で三平方メートルになるものもあり、五月上旬に登れば広範囲に群生したツクシシャクナゲの美しい花を愛でることができるといえる。

このシャクナゲは、花びらが七枚、雄しべが一四本である。林下には、ツクシコウモリ、クサヤツデ、ツルニンジン、ヤマジオウ、ジンバイソウなどが季節を変えて可憐な花を咲かせる。

明治四十一年（一九〇八）に多良岳を訪れた歌人の吉井勇は、美しいツクシシャクナゲの花に出会って、

しやくなげの大群落の中に来ぬ

うつし世のこといかで思はん

と、吟（うた）っている。

## 2 マンサク（満作）群落

まんさくの 花の盛りや 春の雪 龍岡 普

マンサク科のマンサクは、リボン状の変った花を開く落葉樹で、木の高さは成長しても三〜四メートルほどで高木にはならない。日本の特産種、春に先がけて最も早く開花



写真3・2 五家原岳のツクシシャクナゲ（ツツジ科）



する樹木で外国には産しない。独特の黄色い花がよく目立つことから、まず咲く花という意味で「マンサク」の名がついた。また、葉のついていない枝いっぱいには黄金色の花をつけるので、豊年満作を祝う意味での「マンサク」だという説もある。

この植物は冷温帯の北日本ではさほど珍しくないが、九州では一〇〇〇以前後の山の夏緑樹林内にだけ見られるもの、不思議なことに雲仙には全く出現しない。ところが諫早湾をはさんだ多良山系には比較的多く、特に経ヶ岳一帯に立派なまとまった群落があることで多良山系は分布の西限に当たる。

このマンサクに、「ハマメリス ジャポニカ」の学名をつけて世界に紹介したのは、幕末、長崎の出島に滞在していたシーボルトであった。

### 3 多良岳センダイソウ群落

日本特産のユキノシタ科の植物で、ユキノシタよりも大きく、標高七〇〇以上以上の断崖の水がしたたる場所に好んで生える。地理的には紀伊半島、四国の石鎚山、宮崎県の尾鈴山などにまれに生育する多年草で、その主要な分布域は外帯である★ソハヤキ地域であって、多良山系はそれらの分布域から離れている。これは学術的にも特殊性があり、貴重なものといえる。

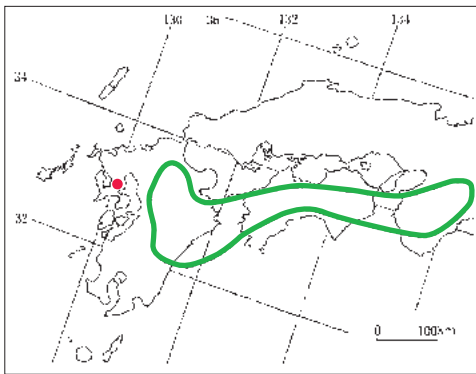


図3-3 センダイソウの分布域

(長崎県生物学会『多良岳の生物』より)

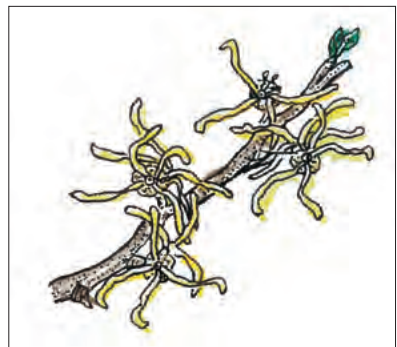


図3-2 マンサク(マンサク科)の黄色い花



写真3-3 センダイソウ(ユキノシタ科) 花期: 10~11月

★〈ソハヤキ〉とは、

「ソ」は、九州の古名である熊襲くまその襲そ

「ハヤ」は、速水の瀬戸(豊予海峡)の速

「キ」は、紀伊半島の紀を意味している

ソハヤキの植物は、日本の中でも紀伊半島から四国、九州東部にかけての地域だけに見られる。

晩秋に白い花を咲かせるセンダイソウの群落が多良山系には二カ所ある。その一つは黒木から金泉寺への登山道に沿う断崖で、常に水滴がしたたる地域に自生している。ここは明治の末頃から多良岳の植物研究に先鞭をつけた地元大村出身の千葉常三郎が発見したもので、昭和二十四年(一九四九)に県指定天然記念物の指定を受けた。第二の産地は、昭和十年秋に外山三郎が、金泉寺から経ヶ岳への途中標高九五〇m付近の絶壁で見つけたもので群落としてはこちらが広大である。二カ所ともソバナ、ヤマホトトギス、ツクシシヨウジヨウバカマ、ジンジソウ、ダイモンジソウなどの高地性植物と混じってセンダイソウ群落が見られる。

4 オオキツネノカミノリ(大狐刺刀)群落

植物学者の牧野富太郎が昭和十三年(一九三八)の夏に長



図3-4 オオキツネノカミノリ(ヒガンバナ科)

崎県博物研究者の指導のため、高来町湯江（金泉寺）大村・黒木コースを歩いたが、その時現地で採集した標本をもとに新種のオオキツネノカミソリ（ヒガンバナ科）として発表した。ここ多良山系で採集、確認されたことから、オオキツネノカミソリは多良山系を正基準標本産地（タイプロカリティ）とする植物になっている。ほかにもカンザシギボウシ（ユリ科）、マルバキブシ（キブシ科）、フグレシハイスマレ（スマレ科）、テリハアカシヨウマ（ユキノシタ科）などの植物も含まれる。

キツネノカミソリとの違いは、花卉が少し反り返り、雄しべが花卉より長く突き出る。雲仙や北九州の山、熊本県の五家荘あたりにも自生しているが、多良山系では夏になると山中至る所に朱色の花を咲かせ林床を飾る。そのため、花の時期には県内外から「高嶺の花」を觀賞しようと多くの登山者でにぎわう。

多良山系ほどオオキツネノカミソリが豊富に見られる山はほかにない。

## 5 ベニドウダン群落

雲仙には、全域に広くシロドウダンが自生していて国の天然記念物に指定されているが、多良山系にはシロドウダンは少なく紅色の花をつけるベニドウダンが多く自生する。多良岳山頂付近と北斜面に自生するツツジ科の落葉低木樹で、五月頃紅色で釣り鐘状の小さい花をつけた花序が垂れ下がり、秋には葉が赤く紅葉する。山頂付近にはベニドウダンのほかヤマボウシ、ナナカマド、リヨウブ、シラキなど秋に葉を落とす夏緑樹もあり、林下にはキバナアキギリ、ツクシガシワ、シロヨメナ、カンザシギボウシなど高山性の草花を見ることができるといえる。

## 6 ヒメシヤラ（姫沙羅）群落

標高九〇〇メートル付近の金泉寺から多良岳への登山ルートのすぐ脇にツバキ科のヒメシヤラがかなりの本数で群落をなしている。幹周りが一〜二メートルと大木になったものも多く見受けがある。



写真3-4 ベニドウダン（ツツジ科） 花期：5～6月



写真3-5 ヒメシヤラ(ツバキ科)の木肌と落花した花 花期:6~7月

ヒメシヤラに交じって大木のイヌシデ(カバノキ科)や幹周りが二三メートルを超すアカガシ(ブナ科)の巨木などの自生もあつてみことな自然林となっている。また、林下にはツクシアオイ、ツクシガシワ、ヤマアジサイ、フタリシズカなどが目につく。

ヒメシヤラの木肌はサルスベリよりも濃い赤褐色で、樹皮が薄紙のように剥げ落ちてつるつるしている。六~七月頃白い花を咲かせ、落花した花でヒメシヤラに気づかされたりもする。雲仙岳に見られるヒコサンヒメシヤラ(名前は福岡県の英彦山にちなんでつけられた)は、花が大きく、樹皮の色が灰黒色であることで区別できる。

更に、多くの日本の植物を採集し知名人でもあった駐日英国領事のグレートレックスが、長崎駐在時代の昭和十年(一九三五)頃から、多良山系に登山して新種を発見したものにヒトツボクロモドキ、テリハアカシヨウマ、カンザシギボウシなどがある。

## 7 ヒトツボクロモドキ(ラン科)

五家原岳の山林内で昭和十年(一九三五)に発見されたこのランは、ここで発見されるまでは世界中でヒマラヤに



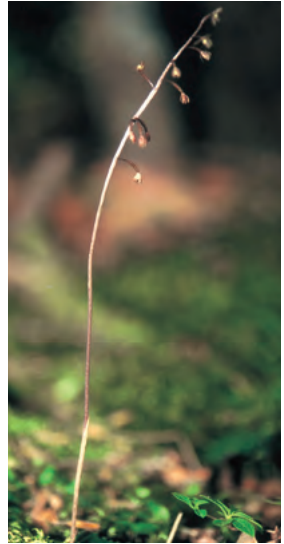


写真3-6 ヒトツボクロモドキ(ラン科) 花期:6月

一例だけで、実に二例目の発見となった。ヒトツボクロと同じように球根から一枚の葉と一本の花茎を出す、唇弁にまったく距がないのがこのランの特徴である。

しかし、その後にこのランを見たとの報告例がなく「幻のラン」とも言われていたが、五〇年後の昭和六十年六月に桃下大(当時長崎県立諫早高等学校)によって、同じ五家原岳から金泉寺への登山ルート

林内で発見され話題を呼んだ。多良岳特産種のヒトツボクロモドキは、柄のある葉の長さは二〇センチメートル。高さが二〇センチメートルほどのため実際人目にはつきにくい地味な植物である。

## 8 絶滅危惧種—三種類の寄生植物

### ツチトリモチ(ツチトリモチ科)

県内では、多良山系と西彼杵半島「県民の森」の二カ所に自生が確認され、まれに見られるキイレツチトリモチよりも珍しく、それだけ貴重といえる。根茎を磨りつぶして鳥もちをつくるのでこの名がついた。雌雄異株だが、まだ雄株は発見されていない。クロキやハイノキなどの根に寄生し、秋に鮮紅色の卵状の花穂をつける。

絶滅危惧Ⅱ類(VU)『レッドデータブック2011』

### キヨスミワツボ(ハマワツボ科)

山地の木陰に生える寄生植物で、カシ類やアジサイ類の根に寄生する。



写真3-7 ツチトリモチ(ツチトリモチ科) 花期:10~11月

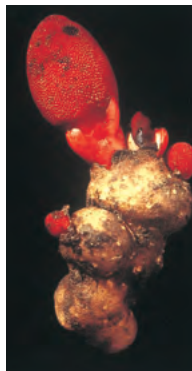






写真3-8 キヨスマウツボ (ハマウツボ科) 花期：5～7月

茎は群がって生え、先端に五～一〇個の花がかたまつて咲く。県内には多良山系のほか雲仙岳と平戸(安満岳)にあるが、極めてまれである。

絶滅危惧Ⅱ類(VU)『レッドデータブック2001』

### ヤマウツボ(ゴマノハグサ科)

落葉樹林内のやや湿り気のある場所に生える寄生植物。葉緑素を持たないため全体が白色で、五～七月頃、上部に白い多数の花を開く。県内では多良山系のみに自生するが、高来町側の小松尾公園で



写真3-9 ヤマウツボ (ゴマノハグサ科) 花期：5～7月

二〇〇個以上の大群落を確認した年もあった。

絶滅危惧ⅠB類(EN)『レッドデータブック2001』

### ■3. 黒木周辺一帯の群落及び希少な植物

#### 1 シマバライチゴ(島原苺)群落

明治三十七年(一九〇四)に小学校教師であった大島清が島原市眉山の麓の杉谷で発見したものを、植物学者の牧野富太郎に送った結果、日本で最初の記録ということでシマバライチゴ(バラ科)の名前が与えられた。昭和十二年(一九三七)頃、大村市黒木で英国領事グレートレックスが採集し、多良山系の山麓にも自生地があることが分かった。県外では有明海を隔てた熊本県の球磨川付近で見ついている。



写真3-10 シマバライチゴ(バラ科)の果実(上)と花(下)  
9月頃、白い花を多数開き、果実は11~12月暗紅色に熟す。

もともと東南アジアから台湾に分布する南方系の植物であるが、琉球列島には出現せず一足飛びに本県と熊本県に分布している。このイチゴは、冬に赤い実をつけるフイチゴに近いものであるが、つる性の細い茎は三~五メートルにも伸び、非常に強靱で鋭い棘で付近の植物に絡みついてよじ登り、太陽を独り占めする。九月に白い花が咲き、冬に酸味が強い果実を多いものでは一〇〇個近くも房状につけて垂れ下がる。

島原の眉山の産地が「島原のシマバライチゴ自生地」として昭和三十五年に県の天然記念物に指定されている。鋭い棘を持つため一方では嫌われものにもなっている。

## 2 黒木町八丁谷のカツラ(桂)

カツラは北日本系のカツラ科の落葉高木で谷沿いの

湿り気のある場所に多く生える。雌雄異株で、外国には自生がなく日本特産の木である。学名はシールボルトによってつけられている。長崎県では多良山系の山中のみに自生していて、雲仙山系には産しない。八丁谷には自生したカツラが点在するが、大木までにはなっていない。一方、諫早市の富川上流域には幹周りが約八メートル、樹高一〇メートル以上のカツラの巨樹(雌株)があり、県指定天然記念物となっている。秋には丸い形の葉が一斉に黄色に色づき遠くからでもカツラの所在を知ることができる。

## 4. 郡岳(標高八二六メートル)とその周辺の植物

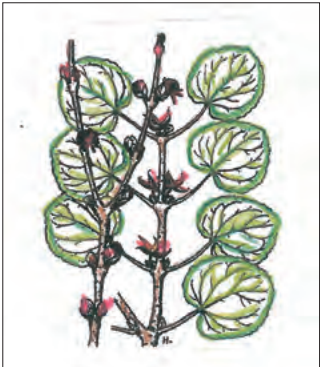


図3-5 果実をつけたカツラ・桂(カツラ科)



写真3-11 郡岳八合目の坊岩から野岳湖、大村湾を望む

野岳湖の湖面に美しい影を映す郡岳への登山ルートには西登山口と南登山口があり、西登山口ルートが道のりは長い。

両ルートともヒノキ植林からの登りとなり、林内は明るくハエドクソウ、オカトラノオ、コ克蘭、ジャノヒゲなどの林床植物が自生して花を咲かせる。途中からは自然林となって照葉樹のアカガシ、アラカシ、イチイガシ、スタジイなどのシイ、カシ類に加え林下にアオキ、ヤマツツジ、クロキ、ハイノキ、サザンカなどが出現する。草本類にはシユラン、ヤブコウジ、ナルコユリ、ツクシアオイ、ナベワリ、キリシマテンナンショウなど、更にコシダ、ウラジロ、オオカグマ、シシガシラなどのシダ植物も見られる。

圧巻は、八合目の坊岩からの展望で、眼下の見事な樹海の中に野岳湖、綿打池などの湖が点在し、大村湾や西彼杵半島の雄大な景色が広がる。坊岩には崖地に生えるイワガサがあり、二〇年ほど前には同じ切り立った崖地に可憐な花を咲かせたウチヨウランを見たこともあった。ほかにはネジキ、カマツカ、ミツバツツジなどが、山手にはアカガシ、サルナシ、アズキナシ、ヤブニッケイなどがしっかりと根を下ろし、風が強いため坊岩一帯は背丈が低い樹木が多い。

郡岳山頂は、一面のススキ草原周辺にヤマボウシ、ヤマツツジ、コツクバネウツギ、ウリハダカエテなど約二〇種類の樹木があるが、高木となったものはない。

江戸時代に編さんされた藤野 保編『大村郷村記』（第二巻 第十二福重村）によれば郡岳は古くは「太郎岳」と呼ばれ、多羅山大権現が鎮座した最初の場所である。

南登山口からさほど遠くないところに、一年中涸れることなく清流が湧き出ている「大谷水神」がある。水神様を取りまく森にはスギ（幹周り四メートル）、ウラジロガシ（幹周り二・六メートル）、イチイガシ（幹周り二・六メートル）の巨木、大木やタブノキ、エノキなどが繁茂し、湧き水が流れ出す水辺には珍しい大型のナチシダが群生している。

## ■5. 烏甲岳（標高七六九メートル）と南川内川一帯の植物

烏甲岳も多良岳諸峰と同様信仰の山として昔から地元の人々に親しまれてきた。山の頂がニワトリの鶏冠（こゝろかぶ）のように見えるところからこのように呼ばれ、頂上には、インド原始仏教の保護神「摩利支天」が祀られ、その信仰により病や苦難を救い、利益を施すと伝えられている。

烏甲岳の山頂一帯はアカガシ、ハイノキ、ネジキ、リョウブ、ミヤマシキミなどに混じってツクシシヤクナゲ群落が現れる。

東側の摩利支天宮の祠の周囲にはツガ（榎）の原生林が見られ、アカガシ、アズキナシ、タカノツメ、ソヨゴなどの自然林下にはイチヤクソウ、キッコウハグマ、ツルリンドウ、ヤマシグレ、ヤブコウジなどが生育する。

県内では、モミ林よりツガ林が極めてまれで多良山系と雲仙にわずかに自生している。マツ科のツガは楽器や船舶材、パルプなどに利用されるが、モミとの違いは葉の形にあり、モミは葉先が二列となつて尖るが、ツガは丸く、裏面に白い線が二個あることで区別できる。

烏甲岳から大花山へのルートは、ヒノキ植林地の中に自然林が残り、サザンカ（山茶花）が多いのが特徴。野生のサザンカは世界的にも珍しく、冬場に咲く白い花はなか



写真3-12 烏甲岳に多く見られるツガ・榎（マツ科）



なか風情がある。登山口に近い標高五〇〇メートルの場所には約八〇〇〇平方メートルの敷地内に、ジオトープや太陽光発電パネルなどを設置した「とりかぶと生活科学研究所」(菅洋一代表)がある。その周辺にスズムシバナ(キツネノマゴ科)群落があつて、夏に紫色の可憐な花をつける。

郡川の支流、南川内川には昭和五十九年(一九八四)に完成した「しゃくなげの里河川公園」があり、アメリカカフウ、イロハカエデ、ソメイヨシノ、ヤマブキ、シヤクナゲといった樹種が多数植栽され、遊歩道も完備され憩いの場となっている。自然石が続く川の流れに沿って多数のセキシヨウ(石莖)がしっかりと根をおろし、一部にツルヨシもあるが、土砂がなく植物には厳しい環境となっている。両岸にはエゴノキ、アオキ、アカメガシワ、ネムノキ、ウツギなどの樹木が川面に影を落としている。

## ■6. 大村湾の海岸植生(白島も含む)

藩政時代はいまの東彼杵町、川棚町はもちろん対岸の西彼杵半島も大村藩に属していたことで、南北約二・六キロメートル、東西約一・一キロメートル、面積約三二二〇平方キロメートルの大村湾(海岸線の総延長は約三六〇キロメートル)は最奥部の津水湾(諫早領)を除く全域が大村藩領であつた。

今日では、南は真崎・今村川合流地点で諫早市と境し、北の境界線は松原海水浴場付近で東彼杵町と境するため海岸線の距離はわずか二・二キロメートル程度に過ぎなくなつた。

ところで、大村湾は昭和四十一年(一九六六)に「大村湾県立公園」として指定されたが、閉鎖性内湾のため海水の流れがあまりなく水質悪化が起つてきている。

海岸に生える植物についても、高度成長時代の大規模埋め立て、河川改修工事、コンクリート護岸工事等による植生への影響が各地に見られる。



写真3-13 スズムシバナ(キツネノマゴ科) 花期: 9月~10月





写真3-14 ハマボウ(アオイ科) 準絶滅危惧種(NT) 花期:7~8月

海岸環境指標種にアオイ科のハマボウがある。*Hibiscus Hamabo Sieb* (ハイビスカス ハマボウ シーボルト)とそのまま日本名を学名につけてヨーロッパに紹介したのも、またシーボルトであった。日本では最も北に分布する野生のハイビスカスの仲間で、樹木でありながら河口付近や海岸の塩湿地に群生し、満潮時には根元が潮水に浸かる場所に生育する。このような特徴をもつハマボウが多く見られる海岸は昔ながらの生態系が残る場所であるため、指標種となっている。大村湾全域を調査した結果では、一番多くハマボウの自生が見られたのは大村公園の玖島崎一帯であった。

## 1 大村公園(大村藩お船蔵跡・竜神島・玖島崎一帯)

昭和十四年(一九三九)に公園として指定された大村公園は、玖島城跡を整備して造られたもので、国の天然記念樹に指定されている「大村神社のオオムラザクラ」やハナシヨウブなどが咲く頃は訪れる観光客で大変にぎわう。

総面積が約一七〇〇畝の大村公園内の大村藩お船蔵跡から玖島崎にかけてが、大村湾全域で最大のハマボウ群生地となっている。更に橋の架かる竜神島も島を囲むようにハマボウが多数群生する。更に竜神島の砂泥地には準絶滅危惧種(NI)のハマサジと絶滅危惧IB類(ET)のドロイ(イグサ科)が混生しており貴重な自然環境が残されている。ドロイは北方系の植物で、県内では対馬、松浦市、平戸島、福江島、佐世保市九十九島に知られているが、生育地は少ない。また、砂泥地にはハマツナ、ツルナなども見られ塩生植物のドロイ同様満潮時には全草が海水中に浸かってしまう。



写真3-15 ドロイ(イグサ科) 絶滅危惧IB類(ET) 花期:7~8月

玖島崎は、昭和四十九年（一九七四）「玖島崎樹叢」として県指定天然記念物に指定された。それはこの樹叢全体が、この地方を代表する暖帯林であると同時に大村湾を臨む美しい風致林で、かつ昔の大村城跡のためである。

この樹叢を構成する樹木には、クスノキ、スタジイ、バクチノキ、ナナミノキ、シロダモ、ヒゼンマユミなどの常緑広葉樹が主で、これにムクノキ、エノキ、コバノチョウセンエノキ、クマノミズキなど数種の落葉樹が混じる。また、大村公園内のエノキにはヤドリギが、一方のヤブツバキ、シロダモの樹上には多数のオオバドリギが寄生する。特に、ヒゼンマユミは明治三十九年（一九〇六）一月に千葉常三郎が諫早の城山公園で見出し、大正二年（一九一三）牧野富太郎が学会に発表した貴重種であり、コバノチョウセンエノキは、これまた大陸系の珍しい種類である。樹下には、フデリンドウ、ホウチャクソウ、ノシラン、ハナミヨウガなどのほか大型シダ植物のシロヤマシダも多い。

大村湾に突き出た玖島崎の先端には、クロキ、クロバイ、アカマツ、モツコク、アコウ、トベラなどに混じってツクシアカツツジの別名をもつオンツツジが、四月下旬から五月にかけて美しい花を咲かせる。南日本の固有種、落葉する三葉をもつミツバツツジで、野生のツツジでは大木となるが、玖島崎のみまとまって群落をなしている。また、先端部には海岸草本群落、ハマウド群落とツルナ群落が発達している。

なお、昭和三十八年（一九六三）完成の人工池「桜田の堀」一帯にもまとまったハマボウ群落が定着している。

## 2 大村市寿古町 郡川河口域一帯の海岸

郡川が大村湾に流れ込む左岸側には、砂礫が堆積した広大な三角州があつて多数のハマボウのほか塩生植物のハマサジ、シオクグ、ウラギク（絶滅危惧Ⅱ類（VU））、ホソバノハマアカザなどが群生する貴重な場所となつている。ハマボウが群生する場所にはテリハノイバラ群落のほかセンダン、エノキ、ネムノキ、ナンキンハゼなどの樹木が



写真3-16 オンツツジ（ツツジ科） 花期：4～5月

侵入している。砂礫浜に沿った波打ち際にはハマナデシコ、ツルナ、ハマヒルガオ、ハマエンドウなどが帯状に連なり、その背後に大村湾ではあまり出現しないハマゴウ（クマツヅラ科）群落がある。準絶滅危惧種（NT）のハマサジ（イソマツ科）は、砂州の内側に大群落を形成しており、大村湾最大の自生地となっている。

ここには、また湿地内のヨシ群落に混じって珍しいアキノミチヤナギ（タデ科）群落も見られる。

### 3 大村市久原前舟津の寺島（大村湾県立公園）

久原一丁目の西海岸にあり、平成二十二年（二〇一〇）のNHK大河ドラマ「龍馬伝」のロケ地ともなった寺島は、領主大村氏の始祖藤原直澄が初めて上陸した場所という伝承があり市指定史跡ともなっている。市杵嶋神社が祀られていて島全体が松林で囲まれている。松のほかにヤマモモが多くトベラ、シャリンバイ、ヤマツツジが目立つが、島全体が石垣とコンクリート護岸となっていて海浜植物のハマエンドウ、ハマナデシコ、ハマヒルガオ、ハマウドなどはわずかな範囲にしろとして生息する。

### 4 大村市日泊郷海岸のヘツカニガキ（辺塚苦木）

南方系のこの樹はアカネ科の落葉高木で、台湾や琉球列島から北上し、九州と四国に分布するが、本州には見られない。九州でも福岡、佐賀県にはなく、長崎県が九州西岸における分布の北限である。長崎県では、諫早市飯盛町川下で見つかったヘツカニガキが県指定天然記念物（昭和五十三年）となっているが、北限地にあつて、かつ珍しい樹種として指定されたのだろうか。

県内には飯盛町のほか長崎市深堀、浦上水源地付近でも見つかっているが、それ



写真3-18 クロマツ林に覆われた寺島



写真3-17 ハマサジ（イソマツ科）



写真3-19 ヘツカニガキ辺塚苦木(アカネ科) 花(右)、花期:6~7月

らの場所より更に北に位置する大村湾の日泊郷海岸にかなりまとまったヘツカニガキがある。七月頃に枝先から球形の花序を出して、淡黄色の花を多数つける。名前は、この樹が発見された鹿児島県大隅半島辺塚<sup>へつか</sup>の産地にちなんでつけられた。枝葉をかじると苦味がある。

### 5 大村市松原海水浴場及び鹿ノ島

いまは松原海水浴場と結ばれる弁天様を祀る鹿ノ島は、昔は潮が引けば陸続きとなる島であった。鹿ノ島は景勝地としても知られ、明治時代以降は料亭なども建ち、避暑を求める客でにぎわった歴史をもつが、島の南側にはアコウが自生するほかクロマツ林を主体にシイ、カシ類が目立ち、トベラ、シャリンバイも混在する。南方系のアコウは、大村湾各地に散在するが巨木になったものはない。

### 6 大村湾に浮かぶ無人島の白島

大村市の海岸から約七〇〇<sup>メートル</sup>の沖合い、長崎空港のすぐ南側に位置し標高七七<sup>メートル</sup>、全周一・五<sup>キロメートル</sup>の無人島で、白を伏せたような形から、名がついたという。

島全体は自然豊かな照葉樹林に覆われスタジイをはじめハマビワ、トベラ、タブノキ、ヤブツケイ、ハリギリ、ハマヒサカキなど約五〇種におよぶ。中腹には巨木、大木となったスタジイ、クスノキがあり、長崎空港に面した海岸にはハリギリの大木が枝を大きく伸ばしている。

白島にはまた、珍しい亜熱帯性つる植物のハカマカズラ(マメ科)絶滅危惧種Ⅱ類(VU)が海岸線の樹木に巻きつき、波打ち際の海中にはウミヒルモ(トチカガミ科)絶滅危惧種ⅠB類(EN)が見られ、無人島ならではの素晴らしい自然が保たれている。





写真3-22 ヒメレンゲ (ベンケイソウ科) 花期：4～6月



写真3-20 周囲1.5キロの白島 (無人島)



写真3-21 南方系のハカマカズラ (マメ科)

## 7. 河川 (郡川・鈴田川)・溜池 (野岳湖等)・

### 滝溪谷の植生

#### 1 郡川の植生

経ヶ岳 (二〇七六メートル) に端を発し昭和三十七年 (一九六二) に完成した萱瀬ダムを経て大村湾に注ぐ延長一五・九キロメートルの郡川は、長崎県内では第四位の長さである。最上流域の川沿いにはコクサギ、ウリノキ、ハイノキ、シラキなどの樹木と飛沫を浴びる岩陰にはヒメレンゲ、ジンジソウ、オオチャルメルソウやオオギカズラ、ツクシシヨウジヨウバカマなどがひっそりと花を開く。梅雨の頃には美しい花をつけたサイハイランも出現する。

中流域の荒瀬橋、高速道路橋が架かる付近には、川全体をツルヨシが覆い尽くす中にダンチク、アレチハナガサがあり、水辺にミゾバ、ジュズダマ、クサヨシが見られる程度で植物の種類は極めて少ない。

下流域のJ R 大村線鉄橋、福重橋付近も、河川敷の大半をツルヨシ群落が占めるレチハナガサ、オオブタクサ、タチスズメノヒエなどの帰化植物に混じってマモコノシリヌグイ、カラムシ、クズ、カナムグラなどが根付いている。

#### 2 鈴田川の植生

多良山系にその源を発し、途中針尾川、小川内川などの支川を合わせたのち大



村湾に注ぐ延長約五・七<sup>キロメートル</sup>の二級河川で、鈴田川上流には大多武溜池がある。この溜池は周囲をスギ・ヒノキの人工林とスダジイ、タブノキ、アオモジ、ネムノキ、アラカシなど多数の自然林に囲まれ二四万七〇〇〇<sup>ト</sup>の有効貯水量を備えている。

堤長が一五八<sup>メートル</sup>の大多武溜池から流れ出した水は「ほたるの里」の小川内町から下流域の鈴田小学校の真横を流れ、大村湾へと注いでいる。鈴田小学校及び鈴田地区グラウンド一带は河川公園となっていて、鈴田川へ下りる石段や遊歩道、飛び石など子どもたちが水に親しめる環境づくりがなされている。河川敷にはジユスタマ群落、マコモ群落、カラムシ群落の中にセイバンモロコシ、オオオナモミ、アレチハナガサ、タチスズメノヒエなどの帰化植物が目立ち、マルバルコウ、カナムグラ、ノブドウ、ニガガシユウなどのつる植物が絡みついている。

河口域一带では三鈴大橋の陰平町側はコンクリート護岸で固められたわずかの隙間に多数のハマボウ（準絶滅危惧種）がしっかりと根を下ろしている。

### 3 野岳湖の植生

昭和二十六年（一九五二）に多良岳県立公園となった郡岳山麓に周囲約四<sup>キロメートル</sup>の正式には「野岳大堤」と呼ばれる人工湖の野岳湖（標高二六三<sup>メートル</sup>）がある。野岳湖は今から約三五〇年前の寛文元年（一六六一）、捕鯨で財をなしたと言われる深沢儀太夫が私財を投じ、約二年をかけて完成した灌漑用の溜池で、貯水量一四〇万<sup>ト</sup>、現在の利用耕作面積は約一万<sup>坪</sup>といわれる。

堰堤上の主な植物は草本類で占められカラムシ、ノアザミ、ヨモギ、メドハギなどの双子葉植物とススキ、チガヤ、メカルカヤ、トダシバといった単子葉植物が目立つが、堰堤石組みには準絶滅危惧種（NT）のミゾコウジュ（シソ科）や絶滅危惧Ⅱ



写真3-23 コンクリート護岸に根を張るハマボウ



写真3-24 平成13年12月完成した橋長125mの野岳大橋

類(VU)のコイヌガラシ(アブラナ科)なども自生している。野岳湖を取りまく樹木には植栽されたヒノキ林に混じって高木のタブノキ、スダジイ、アラカシ、アカマツなどが、亜高木にはヤブツバキ、ネズミモチ、クロキなど、また低木にボロボロノキ、サザンカ、ハクサンボクなどがあり、林床にはシダ植物のオオカグマ、ヒトツバ、コシダ、ウラジロが繁茂する。また野岳湖の奥部一帯の水際にはジヤヤナギ林が広がる。野岳湖の魅力は、最近松枯れでめつきり少なくなったアカマツ林が健在であることである。この貴重な景観はこれからも残し大事にしていきたい。

#### 4 横山溜池の植生

諫早市と大村市の境界域にある築二〇年以上の溜池で、東大村地区水源涵養林に囲まれた溜池の水は下流域の平、中里地区(受益面積一三六〇)へ灌漑されている。横山溜池周囲はシイ、カシ類の照葉樹林のほかヒノキ植林地が大半を占め、溜池内にはミソソバ、シロバナサクラタデ、ミスタマソウ、シロネ、カサスゲ、ジュズダマなどが繁茂する。



写真3-25 横山頭溜池 湖面にはヒシが群生している。

## 5 中山下溜池の植生

多良山麓すそ野の畑地台地と岬状に突き出した台地の谷間に延宝八年（一六八〇）頃に築造された「中山下溜池」（総貯水量二万五〇〇〇立方メートル）は、内田川水系を水源とし下流域の水田地帯（受益面積一〇鈔）へ灌漑を行っている。溜池周囲の山林はヒノキが植林

され、シイ、カシ、タブノキ、ヤブニッケイなどの照葉樹林が狭い範囲に残り、水源涵養保安林の役割を果たしている。堰堤にはノアザミ、シロツメクサ、キツネアザミ、カナビキン

ウのほかワラビが大群落をなし、湖面には浮葉植物のヒシ（アカバナ科）群落と水際にはコシロネ、オギノツメ、ヒメアシボソや絶滅危惧Ⅱ類のコイヌガラシが自生する。

## 6 裏見の滝

重井田町を流れる拂川はらいがわに大村市で最大落差約三〇メートルの裏見の滝がある。その名のとおり、裏側に回って裏から見ることができると珍らしい滝として人気スポットとなってきた。また、駐車場から滝下へ降りる遊歩道沿いには日本種を含む世界中のシヤクナゲが四五種類約五四〇〇本が植え込まれ、四月中旬から五月中旬頃まで華麗な



写真3-26 中山下溜池



写真3-28 山田の滝

花を咲かせる。そのため観光名所となっていて訪れる観光客も多い。断崖絶壁の屏風岩にはオオイタビカズラ、テイカカズラ、フウトウカズラ、アオツラフジなどのつる植物が覆い尽くし下部には大型シダ植物のコモチシダが垂れ下がっている。滝壺付近の樹木にはイスノキが多く、アラカシ、クスドイゲ、ヤブツバキが自生するが、西洋シヤクナゲのほか植樹されたソメイヨシノ、イロハカエデなどが見られる。神社付近にはシダ植物のオオイワヒトデ群落もあり、湿気を好むシダ植物の宝庫となっている。昔は「御手水の滝」と呼ばれ、ここで身を清めて郡岳へ登ったそうである。

## 7 山田の滝

観光客でにぎわいをみせる裏見の滝に対し、大上戸川上流にある山田の滝（上諏訪町）は、周囲を高さ二〇メートルほどの断崖と川床のたくさんの奇岩と巨石、生い茂る照葉樹林に

囲まれ静寂な渓谷美の世界を醸し出している。滝周辺の岩肌には刻まれた古い碑文があり、平成二十三年（二〇一一）に郷土史家の上野盛夫らが解説し、冊子『山田の滝周辺にある題目淵の碑文』（大村の歴史シリーズ①）が発刊された。

四段になって流れ下る落差約一三メートルの山田の滝周囲の主な樹木には、高木のスタ



写真3-27 裏見の滝 遠景(左)、近景(右)



ジイ、アラカシ、タラヨウ、ナナミノキ、シロダモなど、ミミズバイ、イズセンリヨウ、ウツギ、オオバジズネノキなどの低木、サツマイナモリ、ハナミョウガ、ヤブランなどの草本類、ヒトツバ、オオイワヒトデ、タチシノブ、イワガネゼンマイなどシダ類も多く、自然度が極めて高い場所である。碑文の「七難即滅」「南無妙法蓮華経」「山神 水神」等から、ここは生命を育む水が湧き出る霊地そして修行の地であったことが分かる。

## ◆ 藩政時代からの造林(人工林)、天然林

郡川が流れ下る萱瀬地区に整備された「榎茶屋河川公園」がある。河川公園案内板には次のように紹介されている。

この付近の「榎茶屋」という地名は昔茶屋があったことから、黒木の山には江戸時代からスギの植林が行われてきた。特に江戸時代の初期に千葉ト枕により黒木八丁谷にスギの植林が行われ、二〜三〇年間の間にみことな大木に育った。しかし、明治時代になって海軍の佐世保鎮守府に多くの材木を送るために盛んに伐採が行われ、材木を運ぶため黒木から大村湾に面した今津までの道が設けられ、牛が引く荷車に切り出した材を積んで運んでいた。道が悪く運び出しに大変苦労したなかで、この付近に茶屋が設けられ材木を運ぶ人たちが休憩をとった。

また、江戸時代前期、四代藩主大村純長すみながが遊興の地として訪れ、茶会を開いたのが地名の由来とも伝えられている。

### 1 「アスナロ(別名ヒバ)」植物群落係保護林

場所は、大村市北東部の郡川砂防公園から林道を上った標高四〇〇メートルの黒木町萱瀬山国有林内に面積〇・三ヘクタールのアスナロ群落が広がっている。現地立つ案内板には次のように紹介されている。

この林は、九州で唯一の高齢のアスナロ人工林で、藩政時代に東北地方から種子を取りよせ苗をつくり、植えたといわれています。どうして遠隔のこの地に植栽されたものかとても興味深いものがあります。成長状況は、自然条件の異なる青森県下の同齢のアスナロ林以上の成長をしております。成長状況は、自然条件の異なる青森県下の同齢のアスナロ林以上の成長をしております。

樹齢約一六〇年、胸高直径三〇〜六八センチメートル 樹高一七〜二六メートル 平成六年三月 熊本営林局長崎営林署



現地には大木となった約四〇本のアスナロに加え、イヌマキの大木約一〇本とイイギリの大木も混生している。樹下にはアオキ、イズセンリヨウ、ミヤマシキミ、ハナイカタなどが生い茂り、これらにカギカズラ、コウモリカズラ、キシヨラン、マタタビなどのつる植物が絡みついている。シダ植物にはナガサキシダ、リョウメンシダ、ヤマヤブソテツ、ヌリワラビなどが見られる。

ヒノキ科のアスナロは、日本特産で本州北・中部の冷温帯に生育し、九州では標高の高い所に点在する。樹皮は黒褐色で縦に裂けてはがれる性質があり、県内には自生するアスナロはない。

## 2 「萱瀬スギ」植物群落保護林

場所は、標高四〇〇メートルの大村市中岳町萱瀬山国有林で、三・七三鈔の面積に巨大なスギが約四五〇本以上林立したみことな杉林で林内は意外に明るい。

ここは、県下で唯一「森の巨人たち一〇〇選」（林野庁）に選ばれ、巨木を見ようと訪れる人たちが多くなった。ここにも設置された案内板に萱瀬スギが次のように紹介されている。

大村藩は林政に力を注ぎ、この一帯は藩直轄地として造林が盛んに行われてきた。このスギ林は江戸時代に植栽され、東方三ヶ所にあるアスナロ（別名ヒビ）保護林と共にわずかに現存する旧藩木で、長崎県下で最も古い人工林である。国有林に編入された当時三〇鈔もあつた旧藩木林は、戦中、戦後の木材需要によってほとんど伐採されている。この貴重なスギ林を後生に残し郷土の林業振興、歴史的な遺産として大切に保存したい。



写真3-29 九州では珍しいアスナロ（ヒノキ科）林

推定樹齡二四〇年 幹周り四・九〇メートル 樹高四七メートル

平成六年三月 熊本営林局長崎営林署

事実、江戸時代の初期に植え込まれたものは一度伐採され、いま見るスギはその後に再び植えられたものという。最大のスギには「大名杉」の名前がつけられ、樹下にはアスナロ林同様アオキ、イズセンリヨウ、ウリノキのほかサカキ、ウラジロガシ、クロキなどがあり、草本類には群生したイワガネ、サツマイナモリにナベワリ、サイゴクトキワヤブハギ、ハナミヨウガなどがあり、シダ植物も豊富でナガサキシダ、ジユウモンジシダ、ヌカボシクリハラン、ホンバカナワラビ、オオキジノオシダなどが見られる。

### 3 狸ノ尾の「イチイガシ天然林」(国指定天然記念物)

JR大村駅に近い街の中を大村湾へと注ぐ大上戸川がある。その上流域に狸ノ尾溜池があり、この溜池に隣接してイチイガシを主とした広さ二ヘクタールの貴重な天然林がある。この天然林は標高二三〇メートルほどのなだらかな丘陵地にあり、大上戸川及び狸ノ尾溜池の水源涵養林として、旧藩時代は大村藩の直轄林であったが、明治以後は国有林となり、更に昭和三十年に大村市の市有地となっている。

イチイガシの天然林は全国的にも珍しく、九州では大分県の宇佐神宮のイチイガシ林を上回る規模であり、三重県の伊勢神宮に次ぐ貴重なものとして昭和五十六年(一九八二)に国指定天然記念物に指定された。

林内はイチイガシとツブラジイ(別名コジイ)を主体とした高木層とその下部にヤマビワ、クロバイ、シイモチ、サカキな



写真3-30 森の巨人たち100選「萱瀬スギ」

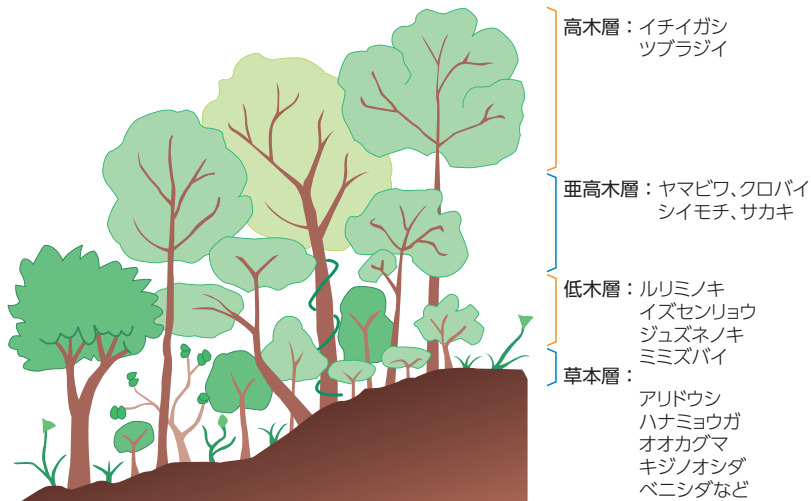


図3-6 階層構造



写真3-31 イチイガシ(ブナ科)の巨木

ど、低木層にはルリミノキ、イズセンリョウ、ジュズネノキ、ヤマビワ、ミミズバイなどが、林床にはアリドウシ、ハナミヨウガ、キジノオシダ、ベニシダが見られる。これらの中でヤマビワとルリミノキは珍しい植物である。

イチイガシの森は、大村地方の昔ながらの自然な森の姿をいまに伝えている貴重な場所となっている。



図3-7 イチイガシ(ブナ科)

### 三 大村市の木と花

#### ■1. 大村市の木ーイチイガシ(ブナ科)

平成元年(一九八九)六月一日決定

昭和五十六年(一九八一)一月に雄ヶ原町狸ノ尾溜池の奥に広がる水源涵養林が「大村のイチイガシ天然林」として国指定天然記念物となったことを受け、イチイガシが大村市の木となった。

イチイガシは樹高三〇メートルに達し、常緑広葉樹の王といった風格がある。カシ類の中では全国的にも分布が少ない種で関東地方南部から四国、九州、台湾、中国まで分布する。

木の幹は独特の剥げかたをして樹皮に波状の紋様がでできる。葉はカシの仲間では小さく、日本産の常緑カシの中で、葉の裏側に毛を密生し、裏全体が黄褐色に見えるのが、イチイガシだけの特徴といえる。

#### ■2. 大村市の花ーオオムラザクラ(バラ科)

昭和四十七年(一九七二)四月八日決定

昭和十六年(一九四二)、大村の女子師範学校の教官であった外山三郎が、大村神社の里桜(八重桜)の中から発見しオオムラザクラの和名と学名をつけて発表した。昭和二十五年に県指定、昭和四十二年に「大村神社のオオムラザクラ」の名で昇格して国指定の天然記念物となったことから大村市の花となっている。

オオムラザクラの第一の特徴は花卉の数が非常に多いこと。花びらが少ないものでも六〇枚、多いものでは二〇〇枚にもなる。第二の特徴は一つの花が二段咲



図3-8 オオムラザクラ(バラ科)

(大鑑 緑作図『長崎県植物誌』より)



きであること。二段咲きとは、八重桜を二重にした恰好で咲き、下の花を外花、上の花を内花と呼び、初めに外花が咲き、続いて内花が咲いて一つの花となり、花の直径は四センチにもなる。オオシマザクラ系の一つだといわれる。

#### 四 大村市の巨樹・巨木及び黒木ヶ原岳の巨大モミ

大村市の観光名所にもなっている大村公園は、「玖島崎樹叢」として県指定天然記念物（昭和四十九年指定）となっているが、ここにはクスノキ、スタジイ、アラカシ、タブノキなどの巨樹、巨木が多く、幹周りが二メートルを超すものだけで総数一〇〇本に及んでいる。最大のクスノキは幹周りが六・三メートル、ムクノキ四・七メートル、スタジイ五・七メートル、アラカシ五・一メートルで、スタジイ、アラカシは、極大に近い巨樹となっている。ここにはまた、幹周りが一メートルになった珍しいヒゼンマユミも数本自生している。ヒゼンマユミは明治三十九年（一九〇六）一月に大村出身の千葉常三郎が諫早の城山公園で発見し、大正二年（一九一三）に牧野富太郎が学会に発表したニシキギ科の常緑樹で「諫早市の木」となっている。

大村公園から順次大村市内全域に今も息づく巨樹、巨木、貴重木を見ていきたい。

#### 1 大村城跡のマキ（県指定天然記念物 昭和四十二年指定）

大村公園の一隅に立派なマキ（別名イヌマキ）の並木がある。幹周りが約三メートルから四メートル、樹高およそ二二メートルのマキが三本整然と並んで高々と伸びている。おそらく今から四〇〇年ほど前、慶長の頃築城と共に植えられたものと思われる。マキは、排水のよい崖のふちや傾斜地を好んで生育する性質があり、ここは適地に当たるため大変姿の美しい巨木になっている。文化財指定の時には四本あったが、そのうちの一本が台風のため平成十一年（一九九九）に枯れてしまい、現在は三本になっている。

最大の本は、幹周りが四・三八メートル、樹高二二メートル

#### 2 長崎県立城南高校のハルニレ（ニレ科）

昭和十六年（一九四二）大村市竹松実業学校として開校、昭和二十六年（一九五二）長崎県立大村農業高等学校として



写真3-32 大村城跡のマキ(マキ科) 県指定天然記念物



写真3-34 大エノキ(ニレ科) スクール・ツリー  
となっている。



写真3-33 ハルニレ(ニレ科)



写真3-35 緒方家のカシワ・柏(ブナ科)

独立した。その後昭和三十年(一九五六)に大村園芸高等学校へ校名変更があり、更に平成十年(一九九八)に改称されて大村城南高等学校となった。玄関前に北国の山地に多く見られるものの県内には自生しないハルニレが植え込まれている。卒業生の話では、かつての長崎女子師範学校時代から既にあつたとのことである。

幹周り 三・五メートル 樹高 一五・〇メートル

校内には、大木となった珍しいオーストラリア原産の★ユーカリノキ(フトモモ科)―幹周り二・三メートル、樹高二〇メートルもある。

★世界一の高さになるユーカリノキが荒瀬町の「西教寺」にも植栽されていた。

幹周りが三・七メートル、樹高が四〇メートル以上、樹齢一〇〇年余りの日本一大きいユーカリノキということで昭和五十六年(一九八一)に県指定天然記念物に指定されたが、シロアリの被害を受け樹勢が衰えて枯死したため平成十三年(二〇〇二)に指定が解除された。実に惜しい巨木であった。

### 3 大村市立萱瀬小学校の大エノキ(ニレ科)

創立が明治六年(一八七三)九月の萱瀬小学校の校庭にどっしりとそびえ立つエノキの巨樹は、地上三メートル付近で幹が二股に分かれ、すべり台として子どもたちに活用されている。

幹周り 四・六メートル 樹高 一六・〇メートル

### 4 玖島(上小路)、緒方家のカシワ(ブナ科)

玖島二丁目にある江戸時代から続く緒方家の庭に、古く京都から移植したというカシワが二本植え込まれている。共に上部が枯死状態で枝も短く刈られ、樹勢の



写真3-37 黒木ヶ原岳の巨大モミ(マツ科)



写真3-36 ムクロジ(ムクロジ科)

回復が図られている。

最大の一本は、幹周り一・九三メートル、樹高(目測)七メートル。長い歴史をもつ緒方家には、かつて「太夫梅」と呼ばれる貴重な紅梅もあったそうである。

## 5 久原城跡、原家のムクロジ(ムクロジ科)

正暦五年(九九四)に入部した藤原直澄が大村姓を名のり居城とし、第一五代大村純治まで約五〇〇年間続いたという伝承がある久原城跡の一郭にムクロジの巨木がある。ムクロジの実が灯明の煤でも、汚れでもよく洗い落とすところから石けんとして洗濯や洗髪に用いられて、武家屋敷に植え込まれてきた歴史がある。現地のムクロジは、大きな羽状複葉と実を道路に落とし、油を持つことからスリップ事故を引き起こすと上部が数年前に切り落とされ、樹形はいびつながらも樹勢は良好である。

幹周り 三・三二メートル 樹高 一〇・〇メートル

## 6 多良山系黒木ヶ原岳の巨大モミ(マツ科)

このモミは、黒木ヶ原岳(六五六メートル)の山中、尾根から下りた東斜面の標高五四〇メートル付近に生えており、太い幹にはコケがびっしりと張り付いている。推定樹齢は





写真3-38 ハリモミ(マツ科)

約三五〇年。山中(国有林)に育つ自生のモミで、これほどの大きさとなったものは珍しい。営林署がこのモミ鑑賞のため新たな登山ルートを設けたことで黒木集落から約四〇分で現地に到達できるようになった。

幹周り 五・七八<sup>ト</sup> 樹高 四一・〇<sup>ト</sup>

## 五 神社・仏閣の森―鎮守の森―

### 1 萱瀬の氷川神社のハリモミ(マツ科)

氷川神社の境内にハリモミ(針樅)四本がある。別名バラモミとも呼ばれるこの樹は、葉の先が鋭く尖り触れ

ると痛い。日本特産種で分布域は本州、四国、九州(高隈山まで)、外国には産しない。

最大の一本は、幹周り二・九〇<sup>ト</sup> 樹高(目測)二五<sup>ト</sup>

なお、神社の裏側にタブノキの巨木、ムクノキの大木もある。

## 2 黒木の黒木観音堂の森

巨大な岩肌に囲まれた別名岩屋観音堂とも呼ばれるこの鎮守の森は多くの樹木に覆われていて、昭和五十九年(一九八四)に黒木小学校から「わが町大樹」に推薦されたスギのほかイチイガシ、ウラジロガシ、モミなどの巨木、大木が林立している。

最大のスギ 幹周り二・五五<sup>ト</sup> 樹高(目測)三二<sup>ト</sup>

イチイガシ 幹周り三・一六<sup>ト</sup> 樹高(目測)二五<sup>ト</sup>

ウラジロガシ 幹周り一・九七<sup>ト</sup> 樹高(目測)二四<sup>ト</sup>



写真3-40 野田神社の神木のツブラジイ(ブナ科)



写真3-39 富松神社のスギ(神木)

### 3 三城風致地区(長崎県忠霊塔・富松神社)

忠霊塔から富松神社が一体となってクスノキ、シロダモ、タブノキ、シイ、カシ、ヤマモモなどの常緑広葉樹や針葉樹のスギ、ヒノキが鬱蒼と茂る森が帯状に続くことで風致地区指定となっている。富松神社のクスノキは幹周りが5メートル以上もあり、しめ縄がついたスギ(神木)の樹高は二五メートルに達し、また、巨木、大木となったスダジイも多い。なお富松神社(久田松和則宮司)では、異空間で奏でる「社の森の演奏会」が定期的に催されている。

### 4 木場二丁目の野田神社

ツブラジイ、スダジイの椎やアラカシなどの檜のほかクロキ、ヒサカキ、クロガネモチ更に孟宗竹が生える野田神社には神木となったツブラジイの巨木がある。そのうちの一本は特に見事で樹勢もよい。

ツブラジイ(ブナ科) 幹周り四・三五メートル 樹高一四メートル

### 5 池田二丁目の熊野神社

高速道路の大村インターチェンジにほど近い高台に建つ熊野神社には推定樹齢三五〇年の「夫婦マキ」が神木としてしめ縄が張られている。幹周りは共に二・二メートルほどだが、二本のマキが並んだ樹形は美しい。境内には、クスノキ、アラカシ、ナナミノキ等の常緑樹のほかヒノキ、スギ類の針



写真3-41 樹齢350年の夫婦マキ(神木)

葉樹も植え込まれている。

## 6 古町一丁目の本経寺のソテツ

市指定天然記念物

昭和四十九年（一九七四）十二月指定の本堂前に植えられた左右のソテツは、姿が大変素晴らしく堂々としており、樹勢も良い。ソテツは神社仏閣によく植え込まれているが、昔は一風変わった格好の植物として珍重されてきた。左右のソテツからは共に一本以上の支幹が地上を這い、また真すぐ伸びたものは幹周り二・二三メートル、樹高八・五メートルとなり、県指定天然記念物にも匹敵するほどのソテツである。また、本経寺には、樹形が素晴らしい幹周り一・九四メートルの見事なモッコク（ツバキ科）もある。

## 7 宮小路二丁目の昊天宮の社叢

市指定天然記念物（昭和四十九年十二月二十四日）

大村市内で最も古い神社と言われる昊天宮には多数のしめ縄が張られた神木があり、その代表的神木はクスノキで社叢の全域を占めている。常緑樹にはクスノキのほか幹周り二・三〇メートルのナギやアラカシ、イヌマキが多い。落葉樹には幹周り四・二四メートルのムクノキ（ニレ科）があるが、市指定時にあったクロガネモチは今はない。

クスノキ（クスノキ科） 最大幹周り五・二三メートル 樹高二六メートル

## 8 松原本町の松原八幡神社の社叢

市指定天然記念物（昭和四十九年十二月二十四日）

旧長崎街道の「松原宿」のすぐ近くに鎮座する松原八幡神社は、鎌倉時代の末には既にあつたという古い古い神社である。



写真3-43 昊天宮の鳥居とクスノキ



写真3-42 本経寺の大ソテツ（ソテツ科）

社殿背後に堂々とそびえ立つクスノキは昭和五十九年（一九八四）、地元の松原小学校から「ふるさとの大樹コンクール」に選ばれ木製の標識が設置されている。幹周り八・七〇㍓、樹高二五㍓の巨樹ながら根元は車道を通すため石垣で削り取られ窮屈な状態となつてしまつている。

クスノキ以外にもクノキやエノキの太木、更にアラカシ、イチイガシ、ヤマモガシ、イヌマキ、ナギ、マツなどが鎮守の森を構成している。

松原八幡神社の中嶋秀人宮司の話では「第二次世界大戦の時、神社にあつた巨大なマツ五本が樟脳を採るために伐採された」そうである。松原の地名からもかつてはマツが多かつたところであろう。

## ◆六◆ 大村市内の国道・県道・市道の街路樹

道路のオアシスともなつている街路樹（並木）の歴史は大変古く、奈良時代から始まり、中世、近世になると旅人のため一里塚として街路樹が植え込まれ、江戸時代になると参勤交代が続いたことで、道路沿線の景色に配慮したマツ街道、スギ街道が主要な東海道、中山道等に整備された。

特に九州ではクスノキ（樟脳の原料）、ハゼノキ（蠟の原料）など利用価値の高い樹木が植えられた。明治以降は、ヨーロッパの影響を受けて、街路樹による都市の緑化と景観に力が注がれるようになり、ハナミズキ、アメリカフウ、プラタナス、ナンキンハゼといった外来種が多く植えられるようになった。また、今では景観ばかりでなく、防災、防音、防暑など機能的にも重要視されてきている。



写真3-44 中嶋秀人宮司とクスノキの巨樹



大村市を貫く主要道の国道三四号線は近年の拡幅工事に伴い江戸時代から続く桜並木が撤去され、新しい街路樹の整備が始まりつつある。一方、高速道路の大村インターチェンジから長崎空港を結ぶ国道、県道約五キロメートルには整然と並んでナンキンハゼ、ケヤキ、イチヨウが多数植え込まれている。また、古賀島町、黒丸町、寿古町を経由し国道三四号につながる市道にもイチヨウ、ケヤキ、ホルトノキ、カンツバキの見事な街路樹が約五キロメートルにわたって続く。更に、全線開通した池田新町から三城町、独立行政法人国立病院機構長崎医療センターへの新しい市道にはマテバシイ、イチヨウ、クロガネモチ、サクラ、ハナミズキ等が樹種を換えて一直線に延々と植栽されている。

大村市内の街路樹で最も利用されている樹木はイチヨウで、大村駅から向陽高校方面への市道にもイチヨウ並木が続く。次に多いのがナンキンハゼで、大村市の街路樹ランキングの上位三種は、イチヨウ、ナンキンハゼ、サクラである。

特に江戸中期に中国から渡来したナンキンハゼは、秋の紅葉が美しく、「長崎市の木」となっており、爆心地公園一帯のナンキンハゼ並木（通称セントポール通り）は平成六年（一九九四）、新日本街路樹百景に選定されている。

## 七 はびこる帰化植物―帰化率から

二十一世紀を迎えた今日、外来種の帰化植物抜きで日本の植物相を語る事ができなくなった。さて帰化植物とは「よその国から入ってきて、野生状態になった植物」を言うが、より具体的な定義は、帰化植物は人間の力で運ばれてきた植



写真3-45 富の原町付近のケヤキ街路樹



写真3-46 長崎空港線のナンキンハゼ街路樹

物を指す。我が国への帰化植物の侵入は、古くは中国大陆との交流の開始とともに始まったが、江戸時代まではその数は極めてわずかなものであった。

これが明治維新の開国を契機として、外来雑草の渡来が増大し、明治時代には約一〇〇種、それが大正時代には約一五〇種、そして第二次世界大戦直後には四〇〇種を数えるに至った。更に世界的な農産物市場の広範な自由化に伴って、輸入家畜飼料等に混入した雑草種子から帰化植物の急激な侵入が起こり昭和二十五年（一九五〇）には約五〇〇種、昭和五十年には約七〇〇種、平成十年（一九九八）には約一二〇〇種が報告されてきた。帰化植物は現在一三〇〇種を数え、年間三〇種くらいのペースで新しいものが確認されているという（清水矩宏・広田伸七・森田弘彦著『日本帰化植物写真図鑑』より）。

日本の植物は種子植物とシダ植物を合わせて約四〇〇〇種（琉球列島を除く）ほどから、その三分の一弱が帰化植物となる。

増え続ける秘密は、帰化植物たちの生存戦略にある。

1. 一年生草本が多くて多年生植物は少なく、木本はまれである。生活環が短い。
2. 環境が悪くても花や種子をつけ、環境の変化によく耐え、芽を出した後の成長が極めて早い。
3. おびただしい量の種子をつくるものが多く、一生を通して種子をつくる期間が長い。
4. 日なたを好み、また窒素分が多い富栄養の土壌によく生育する。
5. 種子の発芽の際、特別な条件を必要としないものが多く、種子の寿命が長い。

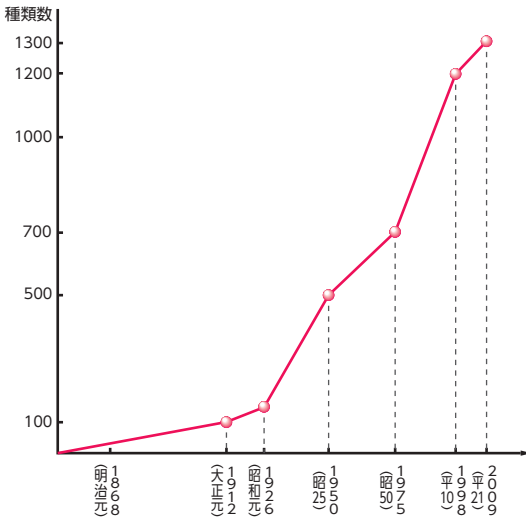


図3-9 帰化植物の増加状態の推移（浅井1986に加筆）

以上のような特徴を持つからこそ、帰化植物は新しい土地でバイオニアとして急速に増えることができるのである。例えば、北アメリカ原産のセイタカアワダチソウ（キク科）は一株で四万個の種子をつけ、それがタンポポのような綿毛で風に舞って瞬く間に日本中に拡がっていった。種子だけでなく地下茎の両方で増え、在来の植物とは比べものにならない旺盛な繁殖力を持つている。

大村市全域にも数多くの種類の帰化植物が侵入しており、特に集中している場所として長崎空港及び自衛隊空港周辺の広大な空き地、郡川、鈴田川などの河川敷、放棄された畑地、新興住宅地などがあげられる。大村市を七地区に分け、それぞれの環境ごとに調べた結果は表3-1のとおりである。

ただし、帰化率は帰化植物の種類数／生えている植物の全種類数×100(%)で示す。

その結果、長崎空港の広大な空き地は多くの帰化植物に占領され、順次海水浴場、河川敷、草原などで多く、里山、山地では低いことが分かった。特に五家原岳尾根筋など人間の影響が少ない安定した環境は、既に在来種によつて占められ帰化植物の侵入する余地が少ないのに対し、空港空き地、海水浴場などは、人間の活動によつて従来の植生が破壊され、不安定な環境となつて帰化植物の侵入を容易にしていることがはっきりと裏付けされる。

最も帰化率が高い長崎空港空き地には春は赤、黄色、白色のヒメジョオン、セイヨウヒキヨモギ、マンテマ、ヘラオオバコ、コメツブツメクサなどで埋め尽くされる。

帰化植物を含む外国からの動植物の増加が、我が国の生態系に未だ知り得ていない様々なバイオハザード（生物災害）をもたらす恐れが顕著となり、生物多様性の保全が強く叫ばれるようになった。その結果、日本の在来種を守るための「外来生物法―特定外来生物による生態系への被害の防止に関する法律」が施行され、平成十八年（二〇〇六）四月から

表3-1 大村市における七地区の帰化率

調査した各地域	帰化率 (%)
長崎空港の空き地	60.8
松原海水浴場一帯	31.8
河川敷（鈴田川中流域）	28.3
草原（琴平スカイパーク展望台）	20.2
ため池（野岳湖）	12.3
里山（鉢巻山）	2.9
山地（五家原岳からの尾根筋一帯）	0.0



写真3-48 セイヨウヒキヨモギ(ゴマノハグサ科)  
ヨーロッパ原産



写真3-47 ヘラオオバコ群落(オオバコ科)  
ヨーロッパ原産



写真3-50 ボタンウキ草(サトイモ科)  
南アフリカ原産



写真3-49 害草に指定された水草-ホテイアオイ  
(ミズアオイ科) 熱帯アメリカ原産

輸入や、種を蒔いたり、植えたりすることが全面的に禁止されるようになった。違反したら、個人の場合懲役三年以下もしくは三〇〇万円以下の罰金、法人の場合一億円以下の罰金と非常に重い罰則も設けられた。そのため長年、道路法面の緑化に利用されてきたオオキンケイギク、イタチハギ、シナダレスズメギヤ、オニウシノケグサ、ハリエンジュなどが使用不可となり、必然的に国土緑化の見直しが起こっている。

平成二十一年(二〇〇九)五月に、生物多様性条約事務局(カナダ)から生態系や農業など様々な影響を引き起こす海外からの動植物の侵入駆除に投じられている費用が、世界全体で年間一兆四〇〇〇億ドル(約一三三兆円)に上るとする報告書が発表された。

大村市内の河川、溜池の一部に見られる熱帯アメリカ産のホテイアオイ(ミズアオイ科)などの水生植物は、発展途上国の水道



やかんが施設の取水を妨げ、関連の損害は年間一億ドルにもなっているという。

大村市史での植物調査時に、諫早市と境を接する今村川周辺にこれまで見たこともなかった珍しい南アメリカ原産のナンバンアカバナアズキ(マメ科)を確認した。日本では沖縄での報告例があるが、長崎県では新産の可能性が高い。また、東大川河口の土手にも北アメリカ原産のアメリカウンランモドキ(ゴマノハグサ科)を確認したが、平成十二年(二〇〇〇)に佐世保市での記録があり、大村は二例目となる。実際に、これまで見たことがない植物に出会ったら、帰化植物と疑って間違いない。

## 八 大村藩時代の「長崎街道」を歩く

長崎街道は、江戸初期の寛永年間(一六二四～四四)に整備された小倉から長崎に至る全長五七里(約二二・八キロメートル)の街道である。長崎に入ってきた西洋文化は、この街道から山陽道を経て大阪・京都へ、そして東海道を経て江戸にもたらされた。海外からの情報や物資と同時に日本の伝統的品々も海外へと出ていくなど、日本と海外を結ぶ重要な街道でもあった。

大村藩に限ると、標高二〇二メートルの俵坂は佐賀藩と大村藩の境に位置し、今も佐賀県と長崎県の県境となっている。長崎街道はこの俵坂番所跡(明治四年廃止)から今の東彼杵町を通過し、大村市街地を抜けた日野(鈴田)峠にある国境石(現在も大村市と諫早市の境)までの約三〇キロメートル(七里半)の道のりであった。

興味深いのは、大村市の長崎街道筋には松原、竹松、植松、並松、松山、岩松など「松」のついた地名が多いことである。これは古い時代から松が多くあったことを物語っている。事実、往還(街道の意)の松は江戸時代の初期から江戸幕府が諸大名に命じて植えさせたもので、オランダ商館医のシーボルトの江戸参府時の図にも松並木が描かれている。

大村藩の藩政日記の『九葉実録』第一冊には寛文元年(一六六一)閏八月十八日に「官道の松枝ヲ伐ルモノアリ 令シテ



写真3-51 ナンバンアカバナアズキ 南蛮赤花小豆  
(マメ科) 南アメリカ原産

二三尺ノ松ヲ植ヘシム、「官道（左右横）一歩ヲ隔テ 高サ尺以上ノ松一株ヲ植フ」の記述がある。

松の特徴は、痩せ地でも育ちやすく、根を比較的しつかりと下ろすことから海岸線の砂地に防潮・防風林として最適な樹木で、大村湾に沿った長崎街道には打つてつけであったろう。しかし、近年松が急速に減った原因は、自然現象では松食い虫などの病虫害、風水害など、人為的には建築、薪炭などの用材としての乱伐、道路の変更や道路の拡張による伐採、大村では戦時中軍用機の飛行に邪魔するとして、多数の名松老木が伐採された歴史がある。

さて、長崎街道の俵坂峠を越えると眼下に棚田が広がり、更に「大楠」と呼ばれる二の瀬集落へ坂道を下る。巨大なクスノキがあったことに由来する地名で、そばには東彼杵町立大楠小学校が建っている。シーボルトの『江戸参府



写真3-53 長崎街道大村宿

紀行』には、「彼杵のクスノキ」を測ったら幹周りが

一六・八八四<sup>レ</sup>、内部は空洞になっていて豊八<sup>レ</sup>豊分、一五人がその中に立つことができたとのこと。シーボルト一行が見たクスノキは国道改修の際、明治二十年代に伐られて二の瀬村に売り渡されたという。その後植え込まれた二世のクスノキも今は幹周り三・七九<sup>レ</sup>の巨木となっている。

彼杵川を渡ると彼杵宿跡に着く。「彼杵宿」は平戸街道への分岐点でもあった。彼杵からは美しい大村湾を見ながら長崎街道二五宿の一つ



写真3-52 旧大楠跡に立つ案内板（東彼杵町二の瀬）



写真3-54 長崎街道「日野（鈴田）峠」松並復元植樹 2010.3.11

「松原宿」へと向かう。今も松原鎌で有名な松原宿は、幸いにして昔の町並みが残されていることから松原宿活性化の街興しが起きている。ここにはまたクスノキの巨樹がそびえる天然記念物にも指定された「八幡神社」がある。

松原川、更に郡川を渡ると竹松の鎮守の森に覆われた「昊天宮」を経て松並から「大村宿本陣跡」に到着する。シーボルトは大村宿で藩の役人から、大村湾特産の真珠貝を昼食に出されたという。

大村宿を過ぎると野田神社の脇を通過し鈴田川を渡って大里の大神宮から日野（鈴田）峠までの長い上り坂を登りきって佐賀藩の諫早領となる。

ところで、諫早市破籠井町から大村市の国境石に至る長さ約一・五キロメートル、標高差一二〇メートルの長崎街道が「大村街道」の名称で、諫早市指定史跡（昭和五十二年二月指定）となり、平成八年（一九九六）には両市にまたがる一帯が、文化庁の「日本歴史の道百選」に選定された。それは江戸時代の街道がそのまま残る貴重な場所だからである。街道にはシイ、カシ、コナラ、クロキ、ボロボロノキ、ハクサンボクなど三〇種以上の樹木が枝を伸ばし、緑陰をなす。

#### ■平成の長崎街道千本松並木復元

長崎県は、森林・林業を取り巻く厳しい社会情勢を踏まえ、かけがえのない森林を社会全体で支える新たな取り組みとして森林保全を目的とする「ながさき森林環境税」を平成十九年（二〇〇七）四月から導入し



写真3-55 鈴田小6年生の卒業記念植樹 2010.3.14

た。この森林環境税を財源にして幅広く県民が参画できる「県民参加の森づくり」が始まり、長崎街道松並復元会が立ち上げられた。東彼杵町、大村市、諫早市を貫く長崎街道の間伐、沿道への松の植樹、下草刈り作業に地元の住民、小中学生を巻き込んで街道に松並木を甦らせる約三年間の活動により全域への植え込み作業が終了した。

江戸時代の古地図を開くと長崎街道に限らず東海道、中山道などにも木陰をつくり日除けや風除けとして、人の往来や時代を見つめていた松並木の存在が記してある。松は予想以上に成長が早く、平成の松並木の中を健康やロマンあるいは癒しを求めて歩く人たちが、今後間違いなく増えてくるだろう。

## 九 大村藩時代の山野の土産、売出物と現代の農作物、果物類ほか

藤野 保編『大村郷村記』第一巻～第六巻に「大村藩領内における山野土産、売出物」についての詳しい記載がある。例えば、大村の山野土産には萱、蕨、石蓐、揚梅、李など二五種類が、また売出物には薪、梨子、薯蕷、木綿など一九種類が書かれ、竹松村、福重村、鈴田村、三浦村など各村についてもそれぞれの産物が列記されている。面白いのは松原村の売出物は今も受け継がれている刃物類の鎌、包丁、鉈、鋏に加え烏賊、蛸、海老、鯖、鰯など海産物と楮、櫛、茶など多岐にわたっている。

有蘭正一郎（愛知大学教授）が「米はなくても芋・いわし！江戸時代の大村人の食生活」と題した講演会の中で、大村藩では琉球芋と呼んでいたさつま芋は、平戸の英国商館長リチャード・コックスにより薩摩よりも早い元和元年（一六一五）に平



戸に輸入、栽培されたという記録が残っている。大村湾で大量に捕れた鰯も食べられたことで、享保の大飢饉（一七三二）の際は、大村では一人の餓死者も出なかったとのこと。江戸時代は米だけでなく雑穀、琉球芋の生産と大村湾で豊富に捕れた魚介類が大村人の命の糧になっていた。

二十一世紀となった平成の今の農産物は、郡川流域に沿った広大な扇状地が耕地（田畑）となって開け、米の収穫量は毎年二〇〇〇ト以上にのぼる。また丘陵地帯では果樹栽培が盛んで、特にミカンは三五〇〇ト（平成十八年）と他のナシ、ビワなどを圧倒し、茶も生産されている。主な野菜の作付面積、収穫量ではニンジンが一番多く、キャベツ、カボチャ、イチゴが続く。中山間地帯ではミカン、ナシ、ブドウ、アスパラガス、カーネーション、葉タバコなど多品目が栽培され、全国に知られるブランドに成長している。大村市グリーン・ツーリズム推進協議会では、「農家に泊まるう（農家民宿）！」や家族、仲間たちでのイチゴ狩り、ブドウ狩り、ナシ狩り、ブルーベリー狩り体験などをインターネットで呼びかけ、料理には地元食材を使い、野菜、果物の収穫を通して郷土「大村」をアピールしている。また、観光農園では観光客相手にハウスで栽培したコーヒーマの収穫も行っている。

## ◇ 長崎県の植物に関係した人々

日本列島の最西端に位置し、北には対馬、南には男女群島と多くの離島と本土側の半島部から構成される長崎県は、九州の広がりには匹敵する。そのため明治以降、多くの植物研究者が長崎県を訪れ、また地元県内にも植物採集と新種の発見に情熱を持った人々がいた。明治、大正時代に多良山系、雲仙等で見つかり新種として発表された植物も多い。



写真3-56 黒丸町の葉タバコ畑

(名前は五十音順、敬称略)

◇ 伊藤秀三(一九三二～)

長崎大学名誉教授。昭和四十五年(一九七〇)に外山三郎の後任として長崎大学教養部教授となり、のち長崎大学環境科学部教授。ガラパゴス諸島研究の第一人者であると同時に、長崎県内の無人島の調査や長崎県の植生概観、多良山系の植生などの執筆、また、全国巨樹・巨木会長として県内の巨樹・巨木の調査等にも尽力した。大村市狸ノ尾の水源涵養林となっているイチイガシの天然林に最初に気づいて、詳しい調査を行い昭和五十六年(一九八一)「大村のイチイガシ天然林」として国指定天然記念物にした。

◇ 上野二巳

大村市日泊郷出身で、大村を舞台に植物採集と研究に没頭し、『長崎県生物学会誌』に発表した。まれな植物のシヤクジヨウソウ、ジュンサイなど大村市での新産地を発表。南方系のヘツカニガキ(辺塚苦木)を日泊郷の海岸で、北方系のハンノキを諫早市境界の真崎山林(日本での最南限地)で見つけた。また、湿地に生えるサギソウ、タコノアシなどの保護にも力を注いだ。

◇ 梅田倫平(一九九七～一九七九)

昭和二十三年(一九四八)四月新制大村高等学校の初代校長に就任する。天然記念物調査委員、県理科協会会長を歴任。五島黄島でノアサガオとモクレイシ、北松浦郡下島のハカマズラなど新産地を見いだす。植物学よりむしろ動物学が得意であった。

◇ 長田武正(一九二二～二〇〇二)

東京師範卒。福岡高校から昭和四十二年(一九六七)に山梨県立短大教授に、定年後は太宰府で晩年を過ごす。『日本帰化植物図鑑』(一九七二)、『原色日本植物図鑑』(一九七六)を出版。長崎県で見つかったトゲミノキツネノボタン、ヤブチヨロギ、ツルドクダミ、フラサバソウなどが記載された。イネ科植物にも力を注ぎ自筆の図(線画)で描かれた「日本イネ科植物図譜」(一九八九)を完成させた。また、長田武正・貴美子共著の『検索入門野草図鑑』全八巻(一九八五)は、知りたい

植物を容易に引き出せる画期的な図鑑である。

#### ◇ グレートレックス

英国人で日本植物学会員、長崎駐在の領事館員。植物観察眼が非常に鋭く、昭和十年（一九三五）を中心に、その後約一〇年間にわたり長崎やその近郊、雲仙や多良山系で採集した標本を東京大学に送る。数種の新種を発見したが、その一つが五家原岳山林内の「ヒトツボクロモドキ」であった。

#### ◇ 千葉常三郎（一八六七〜一九四四）

大村出身。明治二十五年（一八九二）長崎師範卒、最後は西大村小学校長。大村、諫早、多良山系をはじめ県全域にわたり広く植物採集を行う。明治三十九年（一九〇六）に千葉常三郎自身が諫早で発見し、大正二年に牧野富太郎が命名したヒゼンマユミは、発見されて一〇〇年目を迎えた貴重な木として平成十八年に「諫早市の木」に指定されている。西彼半島ではカネコシダ、サワギキョウなどの珍種も発見した。

#### ◇ 外山三郎（一九〇二〜一九八六）

長崎県立瓊浦中学校、長崎女子師範学校（大村市）、戦後は長崎大学と長崎県で一貫して教育と植物研究に務める。特に多良岳への登山は一〇〇回を超え、長崎県での新種三二種類を発見する。昭和十六年（一九四一）、和名と学名をつけて発表したものに大村市の花「オオムラザクラ（大村桜）」と「クシマザクラ（玖島桜）」がある。また、新種発見の第一号がクシマザクラ（玖島桜）であった。加えて天然記念物の発見、調査、指定と自然保護にも情熱を注ぎ、国・県指定の植物天然記念物九四件（平成十三年現在）のそのほとんどに関わる。昭和五十五年（一九八〇）に長崎県下全ての植物を集大成した『長崎県植物誌』を送り出した。

#### ◇ 牧野富太郎（一八六二〜一九五七）

高知県出身。小学校中退でありながら理学博士の学位を得る。「日本の植物学の父」と言われ、多数の新種を発見し命名も行った世界的植物分類学者。その研究成果は五〇万点もの標本や観察記録、そして『牧野日本植物図鑑』に代表され

る多数の著作物がある。

多良岳にも外山三郎たちと登り、その時採集した新種にオオキツネノカミソリと名付けて発表した。

(宮崎正隆)

## 第二節 動物

### 一 哺乳類

大村市は大村湾に面した海岸線の平地から水田地帯、畑地から里山、多良山系までを含む変化に富んだ地形である。そのため、県本土に分布する哺乳類はすべて生息している。その中には、国の天然記念物にも指定されているヤマネをはじめ、長崎県では貴重なムササビ、カワネズミも含まれる。里山付近にはキツネやタヌキも多い。調査不足のため森林性のコウモリ類が欠落しているが、今後の調査では確実に発見される可能性が高い。表3-2は、大村市と県内各地の哺乳類を比較したものである。

#### ■ 1. 食虫目シヤウモク(モグラ目)

ネズミという名前がついている種が多いが、ネズミの仲間ではない。尖った鼻先が特徴のモグラの仲間で、一見してネズミとは識別できる。コウベモグラ以外は馴染みがないかもしれないが、市内各地に広く分布している。

#### カワネズミ(トガリネズミ科・写真3-57)

多良山系の溪流沿いに広く分布するが、個体数はあまり多くなく、『長崎県レッドデータブック2011』では絶滅危惧ⅠB類に指定されている。黒木付近で確認した。カワネズミは別名「銀ねずみ」とも呼ばれ、溪流釣りを楽しむ人には水中を泳ぎ回り小魚を捕らえる銀色



写真3-57 カワネズミ



表3-2 大村市に生息する哺乳類

種名	大村市	長崎県本土	壱岐	対馬	五島
カワネズミ	●	○			
コジネズミ				○	
ニホンジネズミ	●	○			○
ジャコウネズミ		△(絶滅)			△(絶滅)
ヒミズ	●	○		○	○
コウベモグラ	●	○		○	○
キクガシラコウモリ	●	○	○	○	○
コキクガシラコウモリ	●	○	○	○	○
クロアカコウモリ				○	
モモジロコウモリ	?	○	○	○	○
イエコウモリ	●	○	○	○	○
オオアブラコウモリ				○	
ヤマコウモリ	●	○	○	○	○
ユビナガコウモリ	?	○	○	○	○
コテングコウモリ				○	
クチバテングコウモリ				○	
ニホンザル	●	○			
キツネ	●	○			
タヌキ	●	○	○		
アライグマ	▲	△			
テン	●	○			
ツシマテン				○	
イタチ	●	○	○		○
チョウセンイタチ	▲	△		○	△
アナグマ	●	○			
ツシマヤマネコ				○	
イノシシ	●	○	△	△	○
ニホンジカ	●	○	△	○	○
クリハラリス		?	△		△
ムササビ	●	○			
スミスネズミ	●	○			
ハタネズミ	●	○			
カヤネズミ	●	○		○	○
アカネズミ	●	○	○	○	○
ヒメネズミ	●	○		○	○
ドブネズミ	●	○	○	○	○
クマネズミ	●	○	○	○	○
ハツカネズミ	●	○	○	○	○
ヤマネ	●	○			
ニホンノウサギ	●	○			○

▲△は移入種

のネズミということで意外と知られている。成体を目撃することはまれであるが、糞や食痕（しよくこん）などで生息を確認することができる。

### ニホンジネズミ（トガリネズミ科・写真3-58）

体長五センチ程度程度の小型のネズミという感じだが、鼻先が尖っていることからモグラの仲間と分かる。河川敷や農地、人家周辺の空き地に多い。臭いが強烈なためか捕食されることは少なく、捕獲されても死体は放置されることが多い。子連れの個体では、子どもは親の尾の基部をくわえ、他の子は子の尾の基部を次々にくわえて移動するというキャラン行動がよく知られている。

### ヒミズ（モグラ科・写真3-59）

体長九センチ程度程度の小型のモグラ。体色は黒っぽく、尖った鼻先とまばらな毛の生えた棒状のしっぽをもつ。モグラの仲間だが穴掘りはあまり得意ではなく、落葉や腐植土中で半地中生活を行い、ミミズなどを補食している。山林や農耕地に多い。

### コウベモグラ（モグラ科・写真3-60）

いわゆるモグラであり、体長は一五センチ程度になり大型で体色は黒褐色である。ミミズが主食のため肥沃な土地に多い。実物を見ることは少なくても、坑道やモグラ塚などの痕跡は多く観察できる。海岸部の水田から農耕地・山林まで広く分布している。



写真3-58 ニホンジネズミ



写真3-59 ヒミズ



写真3-60 コウベモグラ

## ■ 2. 翼手目(コウモリ目)

コウモリの仲間は長崎県本土では六種が確認されている。大半が洞窟性であり、森林性のコウモリはヤマコウモリの一種だけである。大村市内では、洞窟性コウモリも二種しか確認されておらず、未確認のモモジロコウモリとユビナガコウモリも生息している可能性が高いが、今回は調査不足のため省いた。更に、自然林の残る多良山系には数種類の森林性コウモリも生息している可能性が高いが、現在まで調査されていないのが現状である。

**キクガシラコウモリ(キクガシラコウモリ科・写真3-61)**

体色は黒褐色で、体長が7センチメートルにもなるかなり大型のコウモリである。菊の花弁のような広がった鼻が名前の由来で洞窟が主な生息場所だが古い家屋で発見されることもある。イエコウモリ以外では最も見かけることの多いコウモリなので、洞窟があったらライトを持って入り観察するとよい。『長崎県レッドデータブック2011』では準絶滅危惧種に指定されている。

### コキクガシラコウモリ(キクガシラコウモリ科・写真3-62)

体色は黒褐色で、キクガシラコウモリに似ているが、サイズが半分ほどなので見分けることは簡単。洞窟でコウモリを見たら、広がった鼻先を確認し、大型ならキクガシラコウモリ、小さかったらコキクガシラコウモリと思つてよい。昼間は洞窟内で休み、夕方から活動し小さな昆虫を捕食する。冬季は洞窟内で冬眠する。『長崎県レッドデータブック2011』では準絶滅危惧種に指定されている。

### イエコウモリ(ヒナコウモリ科・写真3-63)

人家をすみかとして利用する唯一のコウモリで、屋根裏や戸袋でコウモリを見かけたら本種と思つてよい。体色は黒く、小型



写真3-62 コキクガシラコウモリ



写真3-63 イエコウモリ



写真3-61 キクガシラコウモリ

で夕方人家周辺や河川・水田の上空を飛びながら、蚊などを捕食している。夏場の夕方にはツバメも同様に飛んでいるが、イエコウモリの方がひらひらと飛ぶ感じである。

### ■ 3. 霊長目（霊長目）（サル目）

大村市に定住しているニホンザルはいないが、ときどき、一匹の「離れザル」が目撃されることもある。

### ニホンザル（オナガザル科・写真3-64）

大村市だけでなく長崎県に定住しているニホンザルはいない。たまたま移動中の一匹の個体が目撃され、マスコミで騒がれることになる。ニホンザルは本来群れで生活し、移動する。長崎県ではニホンザルの群れは確認されていないが、県境を越えて侵入してくることもあるかもしれない。しかし、群れ単位の侵入はまれであり、長崎県で発見されるニホンザルは、群れから離れた単独の雄である「離れザル」になる。

### ■ 4. 食肉目（食肉目）（ネコ目）

食肉目には、キツネやタヌキ、イタチなど身近な動物が多い。移入種として特定外来種にも指定されているアライグマも県北から分布域を拡大しており、大村市も含む多良山系で確認されている。

### キツネ（イヌ科・写真3-65）

中型犬くらいのもので、犬によく似ているが、赤褐色の背面と真っ白の腹、長くふさふさとしたしっぽやとがった耳で識別できる。意外と人里付近に生息しているが、用心深く人目を避けて生活しているので、直接目撃することはない。大村市での確認は、雑木林や田畑の広がる地帯で、特徴的な糞によるものである。『長崎県レッドデータブック2011』では準絶滅危惧種に指定されている。



写真3-64 ニホンザル



タヌキ（イヌ科・写真3-66）

最も身近で最も目にすることの多い野生動物。しかし、近年、疥癬かたせきにより毛が抜けて死ぬ個体が多く、個体数は減少している。タヌキは共同生活をしているため、一匹でも疥癬にかかると伝染してしまう。大村市でも数多くの毛の抜けた死体が目撃されているが、全域に広く生息している。

テン（イタチ科・写真3-67）

イタチによく似ているが、やや大きく体色の黄色が鮮やかな感じである。昔は毛皮用に狩猟されていたが、今は捕獲されることもなく、山地帯から里山付近まで個体数が多い。木登りが得意で、ネズミや小鳥など捕食する。肉食中心であるが、秋には柿やイヌビワなどの果実もよく食べる。

イタチ（イタチ科・写真3-68）

全身焦げ茶色から茶色で住宅街から耕作地、山林まで広く分布している。肉食で小魚や小動物を捕食する。もとも

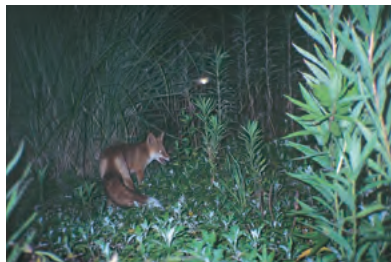


写真3-65 キツネ



写真3-66 タヌキ



写真3-67 テン

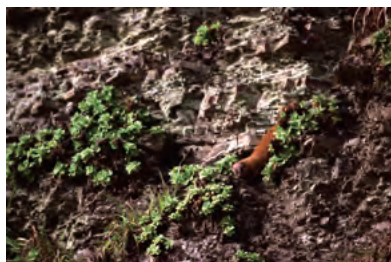


写真3-68 イタチ

と日本に分布する種であるが、近年、大陸から移入されたチョウセンイタチが分布を拡大しており、平地からは減少している。両種の識別は難しく、目撃だけではどちらか分からないが、町中で目撃した場合はチョウセンイタチと考えた方がよいだろう。『長崎県レッドデータブック2011』では準絶滅危惧種に指定されている。

### チョウセンイタチ（イタチ科・写真3-69）

イタチよりはやや大型で、明るい茶色の体色であることが多い。チョウセンイタチは大陸系のイタチで、日本では長崎県対馬だけに分布していた種である。ネズミ等の駆除のため大陸から移入されたこともある。全国的にも長崎県でも分布域が拡大しており、大村市においても町中や人家周辺のイタチは駆逐され本種になってきている。

### アナグマ（イタチ科・写真3-70）

スマートなタヌキをずんぐりむっくりとさせたような容姿である。タヌキの顔を多少細長くして、目の回りに黒い縁取りをし、中央の白い線をきわだたせた感じだが、一見ただけでは識別は難しい。前肢にするどい大きな爪があり、土を掘って巣穴として利用する。狩猟対象となり、その肉は大変おいしい。現在では狩猟されることも少なくなり、大村市だけでなく県本土各地で増加している。



写真3-69 チョウセンイタチ

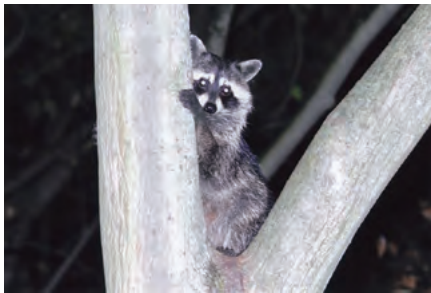


写真3-71 アライグマ

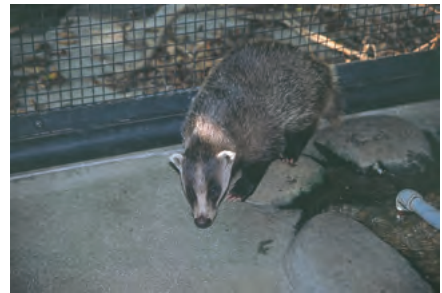


写真3-70 アナグマ

## アライグマ(アライグマ科・写真3-71)

一見するとタヌキに似ているが、尾の黒い輪模様が特徴的。夜行性で水場を好むが、幅広い環境に適応し、住宅街でも生息可能である。木にも登り、小動物から果実・野菜など何でも捕食する雑食性の傾向が強いため、農業に与える被害が続出している。特定外来種に指定され、県北地域では積極的に駆除されているが、ますます増加している。現在の大村市の個体数は少ないが、今後増加していく可能性が高い。

## ■5. 偶蹄目(ウシ目)

日本に分布している偶蹄目は三種類で、そのうちの二種類が大村市に生息している。長崎県全域で農林業に被害を与えている代表の二種であり、大村市においても今後の被害の増加が懸念される。

## イノシシ(イノシシ科・写真3-72)

多良山系に広く分布し田畑に大きな被害を与えている。以前は個体数も少なく、被害は目立たなかったが、近年の傍若無人ぶりは目に余るようになってきた。雑食性で土中の植物や動物を掘り起こしながら食べる。

## ニホンジカ(シカ科・写真3-73)

多良山系にも僅かに分布しているが、今のところあまり目立たない。長崎県の他地域(五島列島・対馬・長崎半島など)では大きな被害も出ており、今後大村市でも被害の出る恐れがある。



写真3-73 ニホンジカ



写真3-72 イノシシ

## ■6. 齧歯目(ネズミ目)

長崎県に生息する齧歯目は、リス科、ネズミ科、ヤマネ科の三科に分けられる。大村市には三科とも生息しており、自然豊かな大村市を特徴づける哺乳類相となっている。特に、リス科のムササビ、ヤマネ科のニホンヤマネは特筆すべき種であり、保護していかねばならない。

### ムササビ(リス科)

大村市黒木付近に生息しているが、近年は確認されることが少なくなった。「そばおしき」と呼ばれ、昭和の時代までは集落付近にも生息していたらしい。広大な多良山系にはまだ分布しているはずだが、確認することは難しい。夜行性で昼間は樹洞の中で休息し、夕方日没と同時に巣穴から抜け出し、採食のため飛び立ち、移動していく。『長崎県レッドデータブック2011』では絶滅危惧ⅠA類という最高ランクに指定されている。

### スミスネズミ(ネズミ科)

山地性のネズミでしっぽが短い。長崎県の生息するネズミの中では非常に珍しく、多良山系、雲仙山系、国見山系、西彼杵半島山間部で僅かに確認されているだけである。『長崎県レッドデータブック2011』では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。

### カヤネズミ(ネズミ科・写真3-74-1・2)

ネズミの仲間では世界最小。体長が六センチ程度で体色は茶褐色。ススキなどのカヤ類の葉をそのまま利用し、鳥の巣のような丸い巣を作り、その中で繁殖する。水田の稲を利用することもあるので農家の人にはなじみかもしれない。広範囲に巣は見られるが、個体数はあまり多くないようである。『長崎県レッドデータブック2011』では準絶滅危惧種に指定されている。

### アカネズミ(ネズミ科・写真3-75)

しっぽの長い茶褐色の中型のネズミ。野にすむネズミの代表で、河川敷から人家周辺の草原や森林まで広い環境に適応している。大村市内でも最も個体数の多い野ネズミで、雑木林や山林はもちろんのこと、市街地の神社・仏閣の小さな林にも分布している。秋になるとドングリを集めて巣穴に貯蔵する。



ヒメネズミ(ネズミ科・写真3-76)

しっぽの長い黒褐色のやや小型のネズミ。樹上性の傾向が強く、木にも巧みに登る。森の中に小鳥用の巣箱を設置すると枯れ葉を集めて繁殖用を利用する。五月頃だけはヤマガラやシジュウカラが利用するが、それ以外はほとんどヒメネズミが使用している。

ドブネズミ(ネズミ科・写真3-77)

日本最大の家ネズミで、体長が二五センチを越すこともある。下水溝や台所、湿ったゴミ捨て場が主な生息域である。もともと日本に生息していた種ではなく、ずっと昔外国から船に乗って侵入してきた種である。大村市だけでなく、日本中、世界中に広く分布する世界共通種である。

クマネズミ(ネズミ科・写真3-78)

体長二〇センチにもなる大型の家ネズミ。黒褐色の体色で人家に多い。垂直な壁を登ったり電線を上手に渡ったり都会のビルに適応したネズミである。天井裏を走り回るネズミはたぶん本種ということになる。

ハツカネズミ(ネズミ科・写真3-79)

家にすむネズミの中では最も小さく、体長七センチ程度。人家にも多いが、河川敷や草原など広範囲に適應している。実験用に品種改良されたものが真っ白のハツカネズミで、マウスと呼ばれている。

ヤマネ(ヤマネ科・写真3-80)

茶褐色の体色で中央に黒く太い線がある。小さなネズミ程度の大きさで、ふさふさとした長い毛を持つ。国の天然記念物(一九七五年)にも指定されており、森の妖精ともいわれる。小さなリスと表現されることもあるが、夜行性で樹上性であるため、目にはほとんどない。冬季に冬眠することでも有名である。樹洞に丸くなって冬眠するため、以前は木を切った際、冬眠中の個体が発見されることがあったらしい。『長崎県レッドデータブック2011』では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。



写真3-77 ドブネズミ

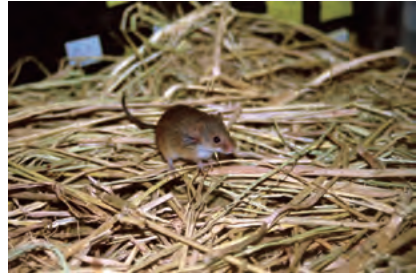


写真3-74-1 カヤネズミ



写真3-78 クマネズミ



写真3-74-2 カヤネズミの巣



写真3-79 ハツカネズミ



写真3-75 アカネズミ



写真3-80 ヤマネ



写真3-76 ヒメネズミ

■ 7. 兎目(ウサギ目)

ニホンノウサギ(ウサギ科・写真3-81-1・2)

夜行性のため昼間に見かけることはないが、里山には多い。普通に飼っているウサギはアナウサギという名前で、ニホンノウサギとは別種である。アナウサギは品種改良によりペット化されているが、ニホンノウサギはペットとしては飼育されていない。日本の固有種で体色は目立たない茶褐色となっている。

■ 8. 鯨目(クジラ目)

スナメリ(ネズミイルカ科・写真3-82)

大村湾にも生息する小型の鯨類。大村湾のシンボルとして現在は保護活動も盛んになっている。長崎県内では有明海や橘湾にも生息するが、大村湾の個体群は小型でずんぐりとした大村湾型体型となり、現在推定三〇〇頭といわれている。『長崎県レッドデータブック2011』では絶滅危惧I B類に指定されている。

(松尾公則)



写真3-81-1 ニホンノウサギ



写真3-81-2 ニホンノウサギの糞



写真3-82 スナメリ

## 鳥類(留鳥・渡り鳥・旅鳥)

### 1. 大村の野鳥

長崎県は日本の西端にあり、アジア大陸の東端に隣接しており、さまざまな鳥が地球規模で渡る。あるものは北から南に、あるものは東から西に旅立つ。繁殖のため、餌の確保のため理由は様々だがルートの上にある長崎県の中央にある大村市は渡り鳥の十字路ともいえる。

日本では約五五〇種類。長崎県では三五〇種、大村市では二三〇余种が確認されており県全体の約四割となっている。大村市だけに生息する野鳥というものはないが、緑豊かな多良山系に囲まれ、また大村湾を擁しているので、どこでも山野の鳥や水辺の鳥を目にすることができる。

### 2. 季節的变化

鳥はいつも同じところで見られるようだが注意してみるとそれぞれ暮らしがあつて変化に富み、大別すると留鳥と渡り鳥に区分される。留鳥とは地域に留まつて繁殖するため年間を通じて見ることができ、一方の渡り鳥は文字どおり一カ所に留まることなく繁殖地との間を往復する鳥たちをいう。渡り鳥は季節ごとに移動を繰り返して、春頃に渡つてきて繁殖をするものを夏鳥、秋頃に渡つてきて越冬するものを冬鳥という。アカハラダカのように春と秋の渡りの途中で、その土地(地域)を通過する渡り鳥は旅鳥と呼ばれる。

### 3. 生息環境

野鳥は羽を持つて自由に動いているが、おおむね生活している場所は決まっている。カモメやウミネコ、カモやサギの仲間はいくつか、キジバト、シジュウカラ、ウグイスなどは山野に、キジバトなどは草原に、スズメなどのように人家の近くを好んで生息する種類もある。それは生息場所を棲み分けることで種類間での無駄な争いをせずにすむということが考えられる。野鳥に限らずさまざまな種類が暮らしていくには多様な環境が必要である。

例えば、山野の鳥では人工林よりも自然林のほうが生息環境に適しており、人工林は植生が単調なためそこに生息する



表3-3 大村市で確認された鳥類

番号	目	科	種名	番号	目	科	種名
1	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	71			オオアカゲラ
2			ハジロカイツブリ	72			コゲラ
3	ペリカン	ウ	カワウ	73	スズメ	ヤイロチョウ	ヤイロチョウ
4			ウミウ	74		ヒバリ	ヒバリ
5	コウノトリ	サギ	サンカノゴイ	75		ツバメ	ツバメ
6			ミンゴイ	76			コシアカツバメ
7			ゴイサギ	77			イワツバメ
8			ササゴイ	78		セキレイ	キセキレイ
9			アマサギ	79			ハクセキレイ
10			ダイサギ	80			セグロセキレイ
11			コサギ	81			ピンズイ
12			アオサギ	82			タヒバリ
13	ガンカモ	ガンカモ	オシドリ	83		ヒヨドリ	ヒヨドリ
14			マガモ	84		モズ	モズ
15			カルガモ	85		レンジャク	キレンジャク
16			コガモ	86			ヒレンジャク
17			トモエガモ	87		ミンサザイ	ミンサザイ
18			ヨシガモ	88		イワヒバリ	イワヒバリ
19			オカヨシガモ	89			カヤクグリ
20			ヒドリガモ	90		ツグミ	コマドリ
21			オナガガモ	91			コルリ
22			ハシビロガモ	92			ルリビタキ
23			ホシハジロ	93			ジョウビタキ
24			アカハジロ	94			ビタキ
25			キンクロハジロ	95			イソヒヨドリ
26			スズガモ	96			シロハラ
27			ウミアイサ	97			ツグミ
28			コウライアイサ	98		ウグイス	ヤブサメ
29	ワシタカ	ワシタカ	ミサゴ	99			ウグイス
30			ハチクマ	100			キマユムシクイ
31			トビ	101			センダイムシクイ
32			オオタカ	102			キクイタダキ
33			アカハラダカ	103			セッカ
34			ツミ	104		ヒタキ	キビタキ
35			ハイタカ	105			オオルリ
36			ノスリ	106			ノビタキ
37			サシバ	107			サメビタキ
38		ハヤブサ	ハヤブサ	108			エノビタキ
39			チゴハヤブサ	109			コサメビタキ
40			チョウゲンボウ	110		カササギヒタキ	サンコウチョウ
41	キジ	キジ	ヤマドリ	111		エナガ	エナガ
42			キジ	112		シジュウカラ	ヤマガラ
43	ツル	ツル	ナベツル	113			シジュウカラ
44			マナヅル	114		メジロ	メジロ
45		クイナ	クイナ	115		ホオシロ	ホオシロ
46			ヒクイナ	116			カシラダカ
47			バン	117			ミヤマホオジロ
48			オオバン	118			アオジ
49	チドリ	タマシギ	タマシギ	119			クロジ
50		シギ	クサシギ	120		アトリ	アトリ
51			イソシギ	121			カワラヒワ
52			タシギ	122			マヒワ
53	カモメ	カモメ	ユリカモメ	123			ハギマシロ
54			セグロカモメ	124			ベニマシロ
55			ウミネコ	125			ウツ
56	ハト	ハト	キジバト	126			コイカル
57	カッコウ	カッコウ	ジュウイチ	127			イカル
58			カッコウ	128			シメ
59			ツツドリ	129		ハタオリドリ	スズメ
60			ホトギス	130		ムクドリ	ムクドリ
61	フクロウ	フクロウ	アオバズク	131			コムクドリ
62			フクロウ	132		カラス	カケス
63	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	133			カササギ
64	アマツバメ	アマツバメ	ハリオアマツバメ	134			ミヤマガラス
65			ヒメアマツバメ	135			ハシブトガラス
66			アマツバメ	136			ハシボソガラス
67	ブッポウソウ	カワセミ	ヤマセミ	137	外来種		ソウシチョウ
68			アカショウビン				
69			カワセミ				
70	キツツキ	キツツキ	アオゲラ				

野鳥の種類も限られている。それに比べ、自然林にはさまざまな種類の植物があり、餌となる木の实や昆虫などの種類も必然的に多様化するため野鳥の種類も多くなる。

野鳥を識別する際、このような生息環境を念頭におき、姿、色、大きさ、飛び方、鳴き声などが鳥の種類を決める際の手がかりとなる。

#### ■ 4. 姿や大きさ、色、飛び方、歩き方、鳴き声

野鳥の姿を見分けるときは、まず大きさに注目する。全長とは、くちばしから尾まで（人間の身長のようなもの）。大きさはカラス、ハト、スズメなど誰もが知っている比較になるような鳥を基準にして、カラスよりも小さくスズメよりも大きいなどと、その鳥の識別目当にする。次は鳥の色だが、黒一色や純白ほかカラフルな色を持つ鳥は分かりやすい。しかし、シギ類になると色が地味で特徴が少ないことから他の種類との区別がむずかしい。くちばしの色や羽の模様など、フィールドマークという特徴を憶えておくこと識別の重要な手がかりとなる。また、飛び方にもいくつかあり、ヒヨドリやセキレイは波状に、トビは弧を描き、あるいはカササギは直線的に飛ぶ。そのほか歩き方も参考になる。スズメはピョンピョンとホッピングするが、カラスは人間と同じように二足歩行も可能だ。鳴き声も重要な識別ポイントで、ウグイスは早春にいい声でさえずるし、カラスもメジロも一度聞いたら聞き分けは容易だ。また、一定の鳴き声しか発しないと思っていた野鳥でもいくつかの声のパターン変化に気づかされる。つまり野鳥への関心さえ持てばそこから既にバードウォッチングが始まっている。

#### ■ 5. 大村の主な探鳥地

野鳥の姿やしぐさは面白く心を和ませる。大村市内の各地域に様々な野鳥が生息しているが、鳥は人を警戒することが多く、一定の距離を保ちながら営みを続けている。行動をよく観察するには、八倍くらいの倍率のある双眼鏡が適当で、野鳥に近づくことなく生態が垣間見られる。

## 1 大村公園

国道三四号線沿いにあつて大村湾にも接し、城址や大村神社などがあり樹木が自然のままに残り、山野の鳥や海辺の鳥が楽しめる。海岸沿いにはウミネコ(写真3-83)やセグロカモメが飛び交い、神社側の森にはフクロウ(写真3-84)がいる。また、国道側の公園にはシジュウカラ、ヤマガラなどがおり、上空にはトビが旋回する。

## 2 多良岳

標高一〇七六メートルの経ヶ岳がそびえ深い山を作っている。黒木溪谷から登っていくと二時間ほどで頂上に至る。上空では猛禽のオオタカなどが旋回し小鳥類を狙っている。秋には朝鮮半島から南下してくるアカハラダカ(写真3-85)という小型のタカが大群で渦状に回転しながら去っていくのが見られる。また、同じ時期に西から東の五島灘の方面へハチクマというトビくらいの大きさの猛禽が多数通過する。

## 3 野岳湖

灌漑用のため池で、歩くと一周四〇分ほど。大村インターよりマイカーで約一五分、山に囲まれ山野の鳥はか、ガンカモ科の水鳥が多く見られる。以前は、冬季に



写真3-85 アカハラダカ



写真3-83 ウミネコ



写真3-86 カルガモ

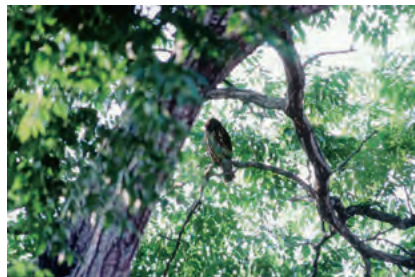


写真3-84 フクロウ

オシドリがたくさん来ていたが、中央部につり橋が完成し人の往来が始まると飛来数が激減した。水辺にはマガモやカルガモ(写真3-86)などがある。時おり、珍鳥が飛来、コウライアイサという日本では稀にしか確認されていないガンカモ科の水鳥が現れたこともある。

#### 4 池田湖

大村インターに隣接し、周回道路があり池全体を見渡せウオーキングが可能。野鳥の写真入り解説板が設置してある。冬になるとマガモやホシハジロなどガンカモ科の水鳥が飛来する。バン(写真3-87)がアシ原の中から出たり入ったり、近年、オオバンが増えている。秋には渡りの途中のサンカノゴイが見られる。

#### 5 郡川河口

黒木溪谷に源を発した二級河川で、流れ込む大村湾流域は汽水域となつて、冬には多数のマガモ、ホシハジロほか水鳥が飛来し越冬する。国道をつなぐ郡橋付近ではカイツブリ、コガモ(写真3-88)、キセキレイやハクセキレイ(写真3-89)がいる。上流の土手には桜並木があり花の蜜を求めて春にはヒヨドリやメジロが群れる。

#### 6 鈴田川河口



写真3-89 ハクセキレイ

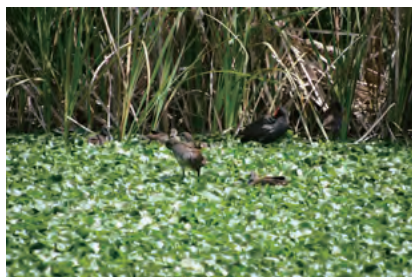


写真3-87 バン



写真3-90 コサギ

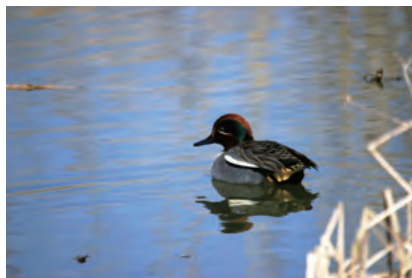
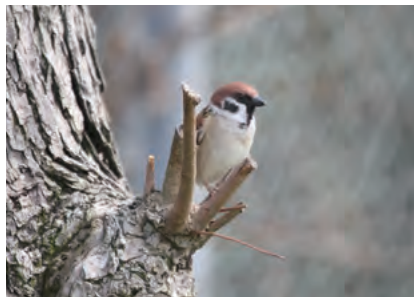
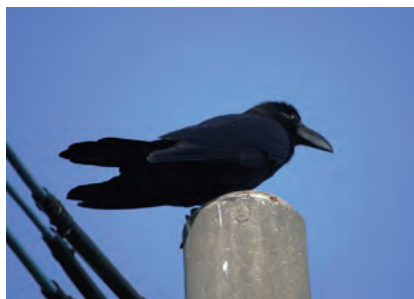


写真3-88 コガモ





**写真3-93 スズメ 全長15cm** 身近な野鳥で人里に住んで家の瓦のすき間などに巣をつくり繁殖していたが、最近、家の気密性が高くなり人家の周りに少なくなっている。



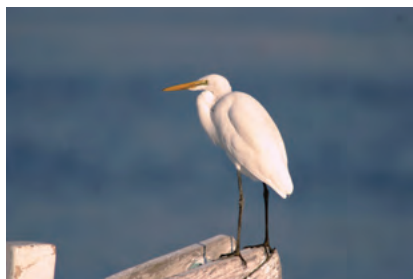
**写真3-94 ハシブトガラス 全長57cm** 全身真っ黒でガーガーと濁った声で鳴く。他の鳥の声をまね、電線をくわえてぶら下がったり、農作物を失敬したり、また、雑食性でヘビや交通事故死の動物をついばんだり、好奇心旺盛である。



**写真3-95 シジュウカラ 全長15cm** のどから腹にかけて黒い縞模様がある。巣箱を一番利用するのはこの鳥で、また、岩の割れ目、郵便ポスト、伏せた植木鉢などにも巣作りをする。

## 6. 留鳥——一年中見られる鳥

大村市鈴田と久原を流れる二級河川で大村湾南東部へ注いでいる。秋から冬にはたくさんさんのホシシジロや、マガモ、カルガモの水鳥が集まる。また、水量の多くない時期の河川敷では、やぶ化した所にキジやコチドリ、コサギ(写真3-90)やダイサギ(写真3-91)、カワセミほか、周辺の畑地にはツグミも来る。上空には時おりミサゴ(写真3-92)が現れる。アオサギはナベツルほどの大きさで留鳥であるが、春の渡りの時期、北帰行のツルとの見誤りに要注意。



**写真3-91 ダイサギ**



**写真3-92 ミサゴ**



**写真3-99 トビ** 全長65cm 鋭い爪とくちばしで、魚を主食に海岸沿いで流れ着いた小動物などついばむ。ピーヒョロローと弧を描いて飛び、時には海岸などで数百羽の群れにすることもある。



**写真3-96 キジバト** 全長33cm 30年ほど前までは人家付近にはあまりいなかったが、最近は公園などにも進出している。野鳥はほとんど春に繁殖するが、キジバトは年中繁殖する。



**写真3-100 アオサギ** 全長100cm 単独で川の浅瀬等でじっと動かず、獲物の魚を狙うのを見かける。繁殖時、足がピンクの婚姻色に変わるものもある。集団で早春から繁殖し、ツルと大きさが似るが、アオサギは首を曲げて飛び。



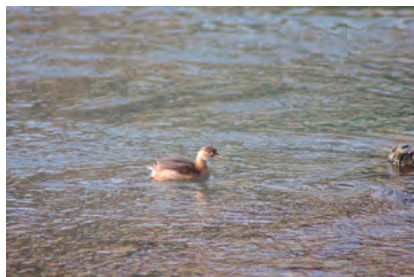
**写真3-97 カワセミ** 全長17cm 池や川辺の周辺に住み、主食の小魚を水面に飛び込んで捕える。池の土手の露出している部分にくちばしで巣穴を作る。水上を直線的に飛び。スズメよりやや大きく、青色の羽はとても美しい。



**写真3-101 キジ** 全長80cm 赤い顔で長い尾を持ち単独で動く。地面を駆けるのが敏捷、時おりオスは開けた草原でケーンと甲高く鳴く。一夫多妻で子育ては雌のみで行い、孵化後ヒナはすぐに歩け、親について移動する。



**写真3-98 ヒヨドリ** 全長27cm 灰褐色の地味な鳥だが、声がキーキーと騒々しく庭のイサ台にも来るが、よく他の鳥を追い払う行動をする。最近は、庭先やベランダでも繁殖する。時おり100羽以上の集団を目にする。



**写真3-105 カイツブリ** 全長25cm 単独や数羽で行動、ふっと水中へ潜って違う場所にぼっかり浮かぶ行動を繰り返す。夏と冬では羽色が違い夏は首回りが赤褐色をしている。



**写真3-102 カササギ** 全長45cm 白と金属光沢のある黒緑色のツートンカラーで尾が長い。人家近くの樹木や電柱に、小枝を球状に集め巣を作る、直線的に飛んでカシャカシャと鳴く。



**写真3-106 ムグドリ** 全長24cm 長崎県で普通に見られるようになったのは10年ほど前から。東京や大阪では普通にいたが長崎では局所的に大村で見られている。二足歩行でのこの歩きオレンジ色のくちばしと脚が目立つ。



**写真3-103 ホオジロ** 全長16cm 畑と林縁の間を行き来し、1年中同じところにいる。スズメを思わせる色だが、さえずるときは天に向かって鳴く。声がよくカゴで飼われていたが、今は飼養禁止である。



**写真3-104 メジロ** 全長12cm 目の周囲が白く名前の由来になっている。秋から冬に見かけることが多く、ツバキの花の蜜を求め数羽から数十羽の群れを作り、ツーツーといい声で鳴き交わす。

7. 夏鳥—春から夏に見られる鳥



写真3-107 ツバメ 全長17cm 毎年、春に来て家の軒下に巣を作り2度ほど子育てをする。地面や水面すれすれのところを飛び、急反転や急上昇を難なくこなす。9月ごろになるとどこからともなく葦原に、多数が集まり東南アジアまでの長旅の準備をする。

8. 冬鳥—秋から冬に見られる鳥



写真3-110 オシドリ 全長45cm 秋頃シベリアなど北方から南下する。オスは三角形をしたイチョウ羽が特徴です。日陰の池を好み、人の気配を察知するとクワックワツと警戒して、すぐに飛び去る。

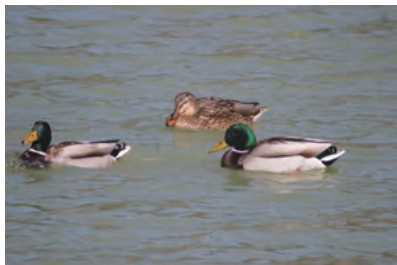


写真3-111 マガモ 全長60cm 頭から首にかけて青緑の光沢で白い首輪の模様と尾羽のカーブが目立つ。池田湖では人がいたずらをしないためにかなり近距離から見る事が可能。



写真3-108 アオバズク 全長30cm 新緑の5月ごろ南方より渡ってきてセンダン等の樹洞に営巣、毎年同じ場所で繁殖するものもあり、フクロウのように夜活動をして、ガや甲虫などの羽や足などの食痕を巣の周りで見かける。



写真3-109 ヤイロチョウ 全長18cm 初夏に南方からやってきて多良山系にすみ、ホホヘン、ホホヘンの特徴ある鳴き声をする。餌は地中のミミズなど、羽は赤、黄色、青など色彩も派手。





**写真3-115 アカハラダカ 全長30cm** 秋に朝鮮半島から大群で南下し長崎、熊本、鹿児島から東南アジアを目指します。ハトぐらいの大きさで胸から腹まで赤褐色、飛翔時は翼の先端が黒く見え、トンボやチョウを捕食する。

■ 9. 旅鳥―春と秋の渡りの途中で、その土地(地方)を通過する渡り鳥



**写真3-112 モズ 全長20cm** 秋9月頃から里山に現れる。鋭く曲がったくちばしで、昆虫のほか小鳥類も捕食する。「百舌鳥」の漢字どおり、メジロや、ホオジロ、オオルリの声を鳴きまねる。また、捕った獲物を、有刺鉄線等とがったものに刺す習性がある。



**写真3-113 ジョウビタキ 全長15cm** 秋頃中国大陸方面からやってくる。日本に飛来した当初は、群れでの行動がみられるが、時間が経過するにつれそれぞれ自分の縄張りを持ち、それぞれの箇所に落ち着くようになる。



**写真3-114 ツグミ 全長25cm** 秋に集団で渡ってきた後、分散する。餌を捕るときぴょんぴょんとホッピングしたり、ツーツと足早に動き胸をそらす。翌春、中国大陸へ渡る前にはポピリョン、ポピリョンと美しくさえずる。

### 三 爬虫類

長崎県に生息する陸生爬虫類は、二目七科二二種一亜種である。大村市は大村湾沿いの水田地帯や里山の広がる山麓、多良山系等の山地帯まで多様な環境に恵まれた地域となっている。多種多様な爬虫類が生息しており、県本土に分布するほとんどの爬虫類が生息している。生息種類数は、二目七科一五種である。表3-4は大村市と県内各地の爬虫類の分布を比較したものである。

#### ■ 1. 亀目

長崎県に生息する淡水性のカメは四種で大村市にはその四種とも分布しているが、ニホンイシガメは現在ほとんど確認されていないし、クサガメも減少傾向に

表3-4 大村市に生息する爬虫類

	大村市	長崎県本土	壱岐	対馬	五島
アカウミガメ		○	○	○	○
クサガメ	●	○	○	○	○
ニホンイシガメ	●	○	○	○	○
ミシシッピアカミミガメ	▲	△	△	?	△
ニホンスッポン	●	○	○		○
ニホンヤモリ	●	○	○	○	○
ミナミヤモリ					○
ニシヤモリ		○			○
ヤクヤモリ		○			
ニホントカゲ	●	○	○		○
ツシマスベトカゲ				○	
アムールカナヘビ				○	
ニホンカナヘビ	●	○	○		○
タカチホヘビ	●	○			
シマヘビ	●	○	○		○
ジムグリ	●	○	○		○
アオダイショウ	●	○	○	○	○
アカマダラ				○	
シロマダラ	●	○	○		○
ヒバカリ	●	○	○		○
ダンジョヒバカリ					○
ヤマカガシ	●	○	○		○
ニホンマムシ	●	○	○		○
ツシママムシ				○	

▲△は移入種

ある。一方、移入種であるミシシッピアカミミガメは大きく増加しており、スッポンも分布域を広げている。

### クサガメ(ヌマガメ科・写真3-116)

水田や浅い水路に多いカメで、泳ぎはさほど得意ではない。体色は茶褐色で首の部分に草色の模様がある。捕らえられたり、危険を感じると臭腺から独特の匂い物質を出す。この匂いは一度嗅いだら忘れられないくらい強烈で、名前の由来ともいわれている。昔は、「こうず」へ「くうず」と呼ばれていた。以前は、カメといえばクサガメであったが、最近では、ベツトシヨップや夜店で売られているミドリガメ(ミシシッピアカミミガメ)が主流となり、各家庭でも、自然界でも王座のいすを譲りつつある。

### ニホンイシガメ(ヌマガメ科・写真3-117)

記録はあるが、現在はほとんど確認されていない。大村市だけではなく、県内全域で減少しており、五島列島福江島を除いてはほとんど確認されない。時々、河川やため池で確認されるが、ほとんどが放棄された個体と思われる。クサガメに似ているが、黄褐色の明るい色や甲羅の後ろがギザギザであることから識別できるが、混同されることも多い。『長崎県レッドデータブック2011』では絶滅危惧IB類に指定されている。

### ミシシッピアカミミガメ(ヌマガメ科・写真3-118)

「ミドリガメ」という名前でベツトシヨップや夜店で販売されているアメリカ原産のカメ。子どものうちには緑色でほほに赤い斑点がある。飼育するとどんどん大きくなり、多少凶暴になる。大型になると飼育に困り野外に放棄されることが多く、今や大村市に限らず自然界で



写真3-116 クサガメ



写真3-117 ニホンイシガメ

も増加する一方である。特に、都市部にある池や河川はほとんどが本種に入れ替わっている。

## ニホンスッポン(スッポン科・写真3-119)

スッポン鍋に使用されるカメ。大村市でも、以前はあまり多くなかったが、近年郡川などの河川で増加している。養殖個体や飼育個体の放棄が主な原因であるが、郡川でも石の上で甲羅干しをしている姿を目撃することがある。スッポンは臆病なため、こちらが気づく前にも水中に潜ってしまうことが多く、注意しないと確認は難しい。

## ■2. 有鱗目ウロコメ

### 1. トカゲ類

長崎県には八種のトカゲの仲間が分布している。その中で大村市に生息するのは三種類。分布しない五種のうち、二種は対馬だけに生息する種であり、残り三種は五島灘周辺に分布する海岸性のヤモリ類である。

## ニホンヤモリ(ヤモリ科・写真3-120)

夜行性で人家の窓や壁にくっつき、虫を食べている。昔は山間部や黒木地域では見られなかったが、近年至る所で目撃されるようになった。爬虫類としては珍しく生息域が拡大している。四肢の指先には細かい先端がカギ状の毛が生えており、一見なめらかなガラス面でも止まったり動いたりすることができる。初夏に壁の隙間などに二個の卵を産

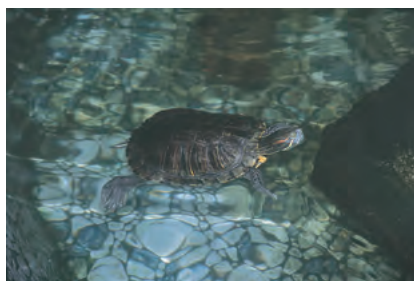


写真3-118 ミシシippiaカミミガメ



写真3-119 ニホンスッポン



写真3-120 ニホンヤモリ



み、夏頃には四〜五センチの生まれたばかりの幼体が目撃されるようになる。

## ニホントカゲ(トカゲ科・写真3-121)

市街地から山間部、山地帯まで広く分布している。日当たりのよい乾燥した道路や広場、がれ地など生息域は広く、市内で最も普通の爬虫類である。しっぽが青い個体は幼体であり、成長すると青みが消えていくが、雌の個体では残ることもある。初夏の繁殖期になると雄は赤っぽい婚姻色が出てくる。



写真3-121 ニホントカゲ

## ニホンカナヘビ(カナヘビ科・写真3-122)

トカゲと混同されることもあるカナヘビは、もちろんヘビではなくカナヘビ科の一種で対馬には近縁のアムールカナヘビが生息している。しっぽが長く、細長いスマートな体型で褐色の鱗はがさついた感じ。トカゲのように滑らかで脂ぎった感じではないので一目瞭然であるが、なぜかトカゲと混同される。山歩きをしているとき何かがガサガサと音を立てて動いていたら、まず本種と違って間違いない。



写真3-122 ニホンカナヘビ

## 2. ヘビ類

長崎県には一〇種一亜種のヘビの仲間が分布している。そのうち、大村市に分布するのは八種。これは長崎県本土や九州本島と同じであり、ヘビの仲間は意外に少ない。大村市に分布しない二種一亜種のうち、二種は対馬だけに生息する種であり、残り一亜種は男女群島男島だけに生息する固有亜種のダンジョヒバカリである。

## タチホヘビ(ナミヘビ科・写真3-124)

体色は黄土色で、背中の中央に一本の黒い筋がある。鱗は美しく、金属光沢があり、虹色に光って見える。非常に美

しく、手にとっても噛みつかないおとなしいヘビである。夜行性であるためほとんど目には見えない。多良山系の河川沿いに多いと思われ、ひっそりとミミズを捕食している。『長崎県レッドデータブック2011』では準絶滅危惧種に指定している。

**シマヘビ(ナミヘビ科・写真3-125-1・2)**

シマヘビには体色が薄い茶色で四本の縦縞がある個体(写真3-125-1)と真つ黒い個体(写真3-125-2)がある。別種と思われるが、両方とも同一種であり、どのような両親の組み合わせでも、両タイプが生まれる。真つ黒いヘビは「からすぐちなわ」と呼ばれていたが、今ではほとんど使われない。雑食性で適応力の強いヘビでいろんな場所で目撃される。市街地ではほとんど見られないが、河川敷や水田・畑地、山間部まで広く分布している。

**ジムグリ(ナミヘビ科・写真3-126)**

茶褐色で黒い斑紋が散在している。腹面は赤と黒のまだら模様が見られる。他のヘビ類と異なり頭部が小さくなっており、地面にもぐりネズミを捕食したり、木に登って小鳥を襲ったりしている。昼間も行動しているが、目にするこの少ないヘビである。幼体は赤色が強く、赤地に黒の紋様が非常に派手で、県内のヘビ類では最も目立っている。

**アオダイショウ(ナミヘビ科・写真3-127)**

「ねずみとり」とか「ねずみとりぐちなわ」と呼ばれていたが、今ではほとんど使われていない。二トビ近くにもなる日本最大の大型のヘビだが、壁や石垣や木を登るのが得意で、人家や人家周辺でネズミや小鳥を捕食する。しかし、人家周辺ではほとんど見られなくなり、山間部や畑地でしか目撃されなくなった。

**シロマダラ(ナミヘビ科・写真3-128)**

赤みがかった白地に一列の黒褐色のまだらが名前のとおり並んでいる。夜行性で昼間はほとんど動かないため珍しがられているが、結構個体数は多く、夜間の交通事故による轢死体を見ることがある。他の爬虫類を食べる「爬虫類食の爬虫類」として有名で非常に攻撃的であり、すぐに噛みついてくるが毒はないので心配する必要はない。

## ヒバカリ(ナミヘビ科・写真3-129)

体長三〇センチメートル程度の小型のヘビで、大村市に生息するヘビの中では最も小さい。性格もおとなしく触つても噛みつくことはない。普段は水場や湿った場所に多く、ミミズやオタマジャクシ・小魚などを補食している。夜行性のため、昼間見かけることはないが、町中の神社や林のある公園など、身近な場所にも生息している。

## ヤマカガシ(ナミヘビ科・写真3-130)

黄褐色の地肌に黒と橙の斑紋が入る水田に多いヘビ。カエル食でカエルの多い水田や山中に多数生息する。毒ヘビの一種で死亡例もある。ただし、毒牙は口の奥の方にありちよつと噛まれたくらいでは毒は入らないので、そんなに心配する必要はない。しかし、噛まれた後、おう吐感や激痛がはしったり、歯茎などからの出血があったら毒が入っているので、病院へ行った方がよい。大村の病院には血清は常備されていないので緊急に取り寄せる必要がある。

## ニホンマムシ(クサリヘビ科・写真3-123)

有名な毒ヘビ。長崎県内でも噛まれる人は多いが、血清等の常備により、病院へ行けば死ぬことはない。毒を持つということで極端に恐れられているが、臆病なヘビでマムシ側から攻撃してくることはない。咬まれる場合は、急に体を触った場合であり、びっくりしたときの防御のためである。咬まれた時はチクツとした感じで、二、三十分後に烈しい痛みがくるので注意が必要である。夏場は、山際の湿った場所に多く、春や秋は日当たりのよい場所に多い。方言名は「ひらくち」であり、大村市に限らず県内一円共通の名前となっている。

(松尾公則)

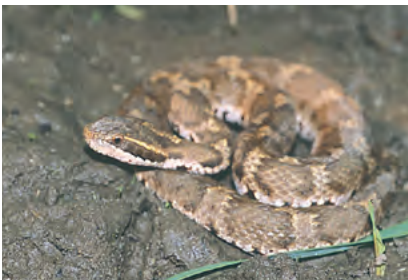


写真3-123 ニホンマムシ



写真3-127 アオダイショウ



写真3-124 タカチホヘビ



写真3-128 シロマダラ

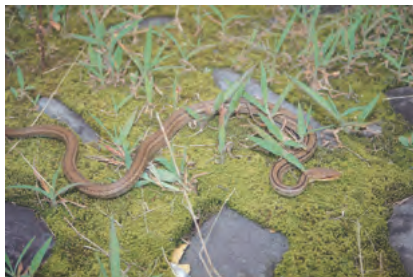


写真3-125-1 シマヘビ



写真3-129 ヒバカリ



写真3-125-2 シマヘビ



写真3-130 ヤマカガシ



写真3-126 ジムグリ

#### 四 両生類

大村市は大村湾沿いの水田地帯から山麓、多良岳山頂まで多岐にわたった環境となっている。大村市の中央から北部にかけては郡川が流れ、その両側の水田地帯や溪流域には長崎県本土に分布する多くの両生類が生息している。表3-5は大村市に分布する両生類を県内各地と比較したものである。

##### ■ 1. 有尾目

一 生尾を持ち続ける仲間で、サンシヨウオ類とイモリ類に分ける。長崎県には四種の有尾類が分布するが、大村市に生息する種は三種類。残り一種は対馬の固有種であるツシマサンシヨウオなので、県本土に生息する種はすべて分布することになる。

##### カスミサンシヨウオ(サンシヨウオ科・写真3-131)

県内各地に広く分布するが、減少傾向が強いために『長崎県レッドデータブック2011』では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。山麓の森林と水田が主な生息域。成体は森林内で生活し、初春に産卵のため水田や水路、小さな池等が集まる。雄は二〜四月にかけて水中に滞在し、順次産卵に訪れる雌を待ち、

表3-5 大村市に生息する両生類

種名	大村市	長崎県本	壱岐	対馬	五島
カスミサンシヨウオ	●	○	○		○
ツシマサンシヨウオ				○	
ブチサンシヨウオ	●	○			
アカハライモリ	●	○	○		○
ニホンヒキガエル	●	○	○		○
ニホンアマガエル	●	○	○	○	○
ニホンアカガエル	●	○	○		
ツシマアカガエル				○	
タゴガエル	●	○			○
ヤマアカガエル		○			
チョウセンヤマアカガエル				○	
トノサマガエル	●	○		△	
ツチガエル	●	○	○		○
ウシガエル	▲	△	△		△
ヌマガエル	●	○	△	△	△
シュレーゲルアオガエル	●	○	○		○
カジガエル	●	○			○

▲△は移入種



一匹の雌に数頭の雄が群がる状態で産卵する。人家の庭の池に産卵に訪れることもある。大村市でも減少している。

### ブチサンショウウオ(サンショウウオ科・写真3-132)

多良山系の高地帯に広く生息し、初春源流域の石の下に集まり産卵を行う。産卵はかなり高地で行われるが、幼生は中流域でも観察できる。幼生は、溪流内の小さなよどみで素早く泳ぎ回るので、体長二〜三センチの小さなイモリのよいうな生物を目撃したら本種と誤ってよい。体表面には小さなまだら模様が見られる。多良山系一帯に広く分布するが、個体数は少なく、『長崎県レッドデータブック2011』では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。

### アカハライモリ(イモリ科・写真3-133)

背面は黒く、腹面に赤いまだら模様が混じる。一年を通じて水のある場所ならどこにでもいるが、近年、水田の乾田化や水路の三面張りで見られなくなった地域も多い。大村市内は個体数が多い。初夏に水中の水草に一個ずつ産卵し、幼生としてしばらく過ごしした後、変態して陸上生活に入る。体中にフグ毒に似た毒を持っており、食すると中毒を起こしてしまうこともある。『長崎県レッドデータブック2011』では準絶滅危惧種に指定されている。



写真3-131 カスミサンショウウオ



写真3-132 ブチサンショウウオ



写真3-133 アカハライモリ

## ■ 2. 無尾目

幼生には尾があるが、変態し成体になると尾がなくなる仲間。長崎県に分布する二三種の無尾類のうち、大村市には一〇種が生息している。大村市に生息しない三種のうち二種は対馬だけに生息するツシマアカガエルとチョウセンヤマアカガエルである。もう一種は国見山系に分布するヤマアカガエルであり、大村市では発見されていない。

### ニホンヒキガエル(ヒキガエル科・写真3—134)

「しょうげどんく」と呼ばれていた日本最大のカエルである。こげ茶色のこつこつした皮膚を持つ本種は、人家やその周辺に多数生息していたが、現在では山中でしか見られなくなった。冬季、山麓の池や側溝に産卵する。細長いひも状の卵塊は一匹分で七〜八個にもなり、中には数千個の卵が入っている。大村市内の山麓の溜池には多く生息しており、春先に見つ黒いオタマジャクシが群れをなして泳いでいる。『長崎県レッドデータブック2011』では準絶滅危惧種に指定されている。

### ニホンアマガエル(アマガエル科・写真3—135)

春から初夏にかけて、雨が降りそうになると「グワツグワツグワツ」と大きな声で鳴いている。緑色の体色で茶色の斑紋が混じることもある。窓際や自動販売機の明かりの周辺で餌である小さな虫を待っている姿を目撃した方も多いだらう。体色変化が激しく、緑色からこげ茶色まで周りの背景によつて自由に変化させる。市内全域に広く分布する。

### ニホンアカガエル(アカガエル科・写真3—136)

冬季に草の生えていない水田や側溝、あまり深くない池等に産卵する。卵は冬の太陽の光を十分に吸収するため真っ黒であり、そのため、数百個の卵を含む卵塊は発見しやすい。大村市では山間部の水田ならどこでも見られたが、近年、冬季に水田に水を溜めないため、産卵場がなくなり、かなり減少している。機械化に伴い田植えの時期だけに水田に水を入れるという農業形態になったため、最も被害を被ったカエルである。『長崎県レッドデータブック2011』では準絶滅危惧種に指定されている。

タゴガエル(アカガエル科・写真3-137)

山中にすむ小型のカエルである。山中を歩いているとき赤茶色っぽいカエルを見たら本種と考えてよい。二〜四月頃、溪流上流域の伏流水で産卵する。この頃になると地下から「グーグー」という鳴き声が聞こえるが、成体を目撃することは少ない。大村市を含む多良山系一帯に広く分布している。

トノサマガエル(アカガエル科・写真3-138)

長崎県では、最も減少しているカエルで、『長崎県レッドデータブック2011』では最も高いランク(絶滅危惧ⅠA類)に位置づけられている。しかし、大村市では黒木、南川内等の比較的高地の水田にある程度は分布している。初夏水田に産卵し、水田で幼生時代を過ごし、変態後も水田付近に生息し、水田の畦等で冬眠する。水田を代表する大型のカエルであるが、農業形態の変化により稲作に必要な時期だけしか水を張らないため、平野部や圃場<sup>ほじょう</sup>整備の終わった地域では全く見られなくなった。



写真3-134 ニホンヒキガエル



写真3-135 ニホンアマガエル

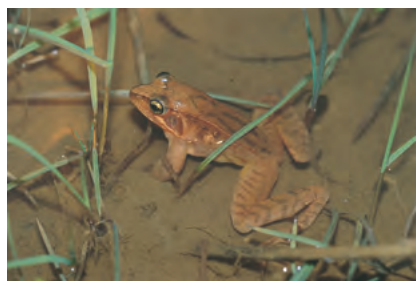


写真3-136 ニホンアカガエル

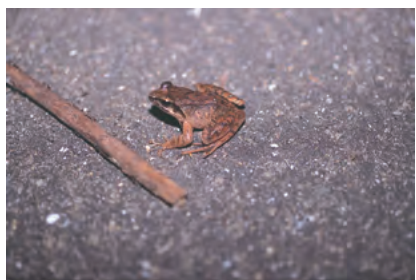


写真3-137 タゴガエル



写真3-138 トノサマガエル



写真3-139 ツチガエル



写真3-140 ウシガエル



写真3-141 ヌマガエル

### ツチガエル(アカガエル科・写真3-139)

小型で茶色。背中 of 皮膚はざらざらしており、腹面も茶色っぽい。いわゆるイボガエルで、さわると手にイボができるといわれている。いくらさわってもイボができることはないが、非常にくさい匂いを出すので、さわるとは勧めない。初夏に「ギーギー」と低い声で鳴いている。水場からはほとんど離れず、市内の水路から水田、郡川上流のカジカガエルがすむ清流まで広く分布している。

### ウシガエル(アカガエル科・写真3-140)

大型のカエルで、アメリカからの移入種である。背面が紋様のある深緑で水深の深い河川や池が生息域になっている。日本在来ではニホンヒキガエルが最大だが、本種の方がそれ以上に大きくなる。別名「食用ガエル」で、太ももの肉は焼くと鶏肉に似て大変おいしい。戦後一時期、日本中で捕獲されアメリカに輸出されていたが、現在は農薬等の問題で輸出されていない。ウシガエルという名前は、「モーモー」と牛の鳴き声に似ていることからつけられている。近くの池で鳴かれると、地響きのような大きな声のため、睡眠不足になると苦情が出る人が多いが、近年多少減少傾向にある。



ヌマガエル(アカガエル科・写真3-141)

小型で茶色、体はぬるぬるしており、腹面は白い。背中に白い線の入る個体と入らない個体がいる。大村市では最も個体数が多く、普通に目撃できる種である。水田が主な生息場所で、小雨の降る夜間に道路上で交通事故に遭っているカエルの大半が本種である。田植えが始まる頃、水田の鳴き声のほとんどがヌマガエルで、「ピーピー」と遠くからでも聞くことができる。カエルとしては乾燥にも強く、畑や河川敷でもよく見かける。

シユレーゲルアオガエル(アオガエル科・写真3-142)

春先に「コッココッコ」と大きな声で鳴く、アマガエルに似た緑色のカエルである。初夏水田の畦に白い泡状の卵塊を生み付けるので農家の人にはよく知られている。石の下や草の中など人目に触れない場所で鳴いているため、声はすれども姿は見えない状態が多い。町中の水田地帯を除くとほとんどの水田地帯で鳴いており、大村市における分布域も広い。

カジカガエル(アオガエル科・写真3-143)

美しい鳴き声で有名で、郡川の中流域より上流側で鳴いており、萱瀬ダムより上の黒木では特に多い。ゲンジボタルの出現時期と繁殖期が重なっているため、ゲンジボタルの光の乱舞の中でカジカガエルの美しい鳴き声を聴くのは一興である。姿は平べったく見た目はそれほど美しくはないが、鳴き声の美しさでは、カエルの中のカエルであろう。幼生は流れのある河川内で生育するため、口を吸盤のように使用し流されないようにしている。八月後半には変態して上陸する。『長崎県レッドデータブック2011』では準絶滅危惧種に指定されている。

(松尾公則)



写真3-142 シユレーゲルアオガエル



写真3-143 カジカガエル

## 五 魚類

### ■ 1. 概要

沖積平野が少なく河川が発達していない長崎県の淡水魚類相は他県に比べ貧弱といわれている（『長崎県の生物』編集委員会（一九八九）『長崎県の生物』長崎県生物学会）。多良山系の扇状地として発達しているが、大規模な河川がない大村市にある諸河川もまた同様である。この中において、郡川水系は、川棚川水系、本明川水系、佐々川水系と並び、県内においては比較的豊かな淡水魚類相となっている。

市内の河川では、流れの速い上中流にカワムツ、ドンコが多く、流れの緩やかになる中下流にはフナ属の一種、オイカワ、トウヨシノボリ、シマヨシノボリ、ゴクラクハゼ、ウキゴリ、スミウキゴリ、チチブが見られる。河口域では、ウナギ、メダカ、ボラ、マハゼ、ヒナハゼ、アベハゼが一般的に見られる。ときどきスズキやクロダイ、ゴンズイなどが入り込んでくることもある。

大村湾西岸に流入するいくつかの河川で見られるシロウオは、大村市に流れる河川には見られない（深川元太郎・小原良典（二〇〇四）「大村湾流入河川のシロウオ遡上確認」）。

### ■ 2. 河川と歴史

大村市に流れる河川は主に多良山系を水源とするものが多く、他にも今村川のように日岳を発する河川もある。

#### 1 郡川

大村市に流れる河川の中でも最大の二級河川である。多良山系西側斜面を水源とし、黒木付近で細流が合流し大きな流れとなる。黒木には萱瀬ダム（重力式コンクリートダム）がある。ダムより下流、荒瀬付近までは南西方向に勢いよく流れている。そして、荒瀬一帯からは北西向きを変え、流れが緩やかになる。その後、寿古町付近で再び南西方向に流れ、沖田町にて大村湾に注ぐ、延長約一万五九〇〇メートルの県内四番目に長い河川である。

郡川には支流がたくさん流れ込んでいるが、主なものとして、田下町で南川内川と、今富町で佐奈川内川と合流する。河口付近は流れもかなり緩やかになり、ウナギ塚も多く見られる。左岸に大きな湿地があり、独特な生物相を形成



図3-10 大村市の河川

している。

魚類相については、ダムより上流では、カジカやカワムツ、タカハヤ、ドンコが生息する。ダムより下流の荒瀬付近までは、カワムツ、ムギツク、カマツカ、ヤマトシマドジョウ、アリアケギバチ、オオヨシノボリ、ドンコが生息する。平野部に移行してから、タイリクバラタナゴ、フナ科、コイ、ナマズ、トウヨシノボリ、シマヨシノボリなどが見られる。下流部では、ハゼなどの底生魚類相が豊富である。マハゼ、チチブ、ヌマチチブなどが流心に多く、ヒナハゼは細流や岸沿いに、アベハゼは細流や溜まりに多い。

県内でも珍しく、『長崎県レッドデータブック2011』に記載されているムギツクやアリアケギバチ、ヤマトシマドジョウなどが生息していることは、本河川の大きな特長となっている。

昭和二十六年（一九五二）郡川漁業協同組合が組織された。組合員数は設立時当初は九九名、淡水魚増殖保護事業を目的としていた。同組合は、これまでに魚道整備や菖瀬ダムを中心に、シマス、アユ、ワカサギ、コイ、フナ、ウナギの流事業を盛んに行っていた。特に昭和三十年頃、郡川産のアユは質が良かったらしく、球磨川に稚魚を出荷していたこともあるようだ。しかし、河川改修や菖瀬ダム建設、取水堰の設置等で、主要資源となるアユが激減するなど環境悪化の影響は深刻であった。なお、平成十六年度の組合員数は一五二名であったが、経営困難のため、平成十八年（二〇〇六）に解散している（写真3-144）。

放流した魚種についての調査では、平成十二年（二〇〇〇）に東・他が、ワカサギを榎茶屋付近で確認しているが、平成二十一～二十三年に行った調査では確認できていない。山陰以北に生息するワカサギが繁殖拡大することは難しい上、定着していたとしても、ダム湖内にとどまっている可能性が高く、河川内で確認することは非常に困難である。



写真3-144 アユ

## 2 鈴田川

大村市に流れる河川では二番目に大きな河川である。多良山系南側斜面、平町付近を水源とし、南の方に傾斜を下り、三反田付近で西に向きを変え、中里町を流れ、岩松町付近で大村湾に注ぐ。小川内川、稲川内川、針尾川などいくつかの支流を持つ。鈴田峠付近の丘陵を隔てて本明川・富川溪谷と接する。鈴田川上流や小川内川には、溪流性のタカハヤが生息する。鈴田小付近には河川公園が整備されており、地域の人の憩いの場となっている。ここでは、ナマズを見かけることがある。河口付近は干拓地となっており、水田やゴルフ練習場利用されている。用水路にはニシキゴイやタイリクバブタナゴが放流されており、地域の方からも手厚く保護されている。また、右岸には塩性湿地（河口付近に見られる汽水性の湿地・葦原）があり様々な生物が生息している。

鈴田水系の生物相については、貝類をはじめ外来種が非常に多く含まれていることから、人為的に形成されたものと示唆される。

## 3 大上戸川

昔、「大村川」と呼ばれていた河川である。延長は約三五〇〇㍎、市内で二番目に長い二級河川である。多良山系の南西側斜面を水源として、南西に蛇行しながら進み、水主町付近で大村湾に注ぐ。上流にある山田の滝は有名である。

## 4 内田川

延長は約二六〇〇㍎、大村市の中心街を流れる河川である。多良山系南西斜面（東大村付近）を水源に南西方向に下り、西本町と幸町の間を流れ、大村湾に注ぐ二級河川である。徳泉川内橋付近ではニシキゴイが放流されている。

## 5 今村川

日岳と風観岳に囲まれた地域を発し、大村湾最奥部の津水湾に注ぐ、流程延長約三二〇〇㍎の東大川水系最大の支流である。河口付近で諫早市を流れる真崎川・東大川と合流する。河口右岸に広がる干潟は、現在埋め立てで規模が縮小している。



福重町から弥勒寺付近を発し、松原で大村湾に注ぐ流程延長約二〇〇〇メートルの小河川である。本流は高低差があまりないので、流れは緩やかである。河口付近の公園には本河川に見られる魚類が看板で紹介されている。カマツカ、ナマズといった種が生息することが注目をひく。アリアケギバチも生息するとあるが、ここ数年間、生息は確認できなかった。

■ 3. 種の説明

アユ

重要食用魚の一つであり、初夏の代表的な味覚である。本市においては那川内水面漁業協同組合がこれまで生産量を増やすために稚魚を放流する事業（種苗放流）を継続的に行っていたようだが、魚影はあまり濃くないようである。

カワムツ

いわゆる「ハヤ」と呼ばれている魚である。体側中央に明瞭な暗色縦条があり、その上はやや黄色がかった色を呈している。成熟した雄は尻びれが大きく成長し、頭部及び腹部が朱色に染まる。また、頭部

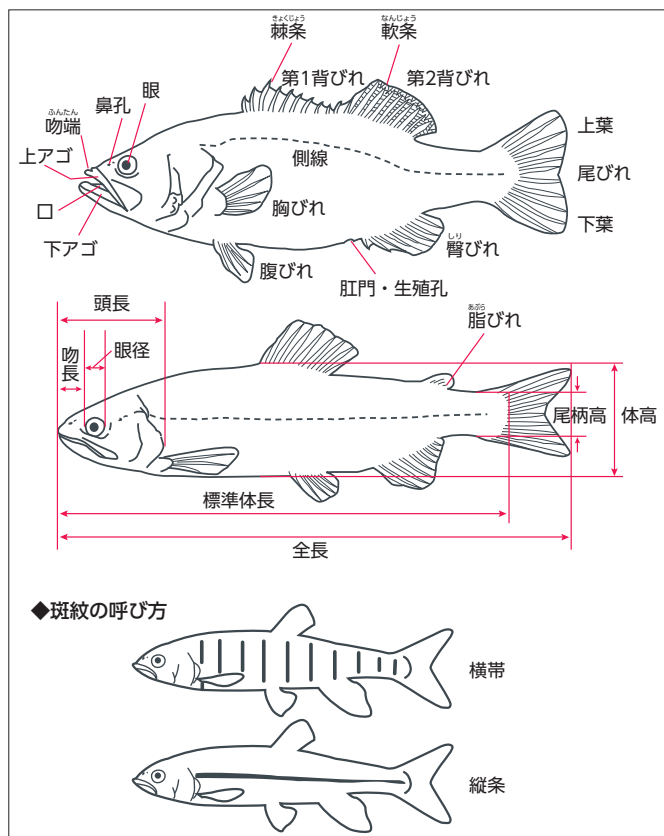


図3-11 魚の各部の名前

に顆粒状の突起(追星)が現れるのが特徴である。長崎県内のほとんどの河川の上中流に生息している。

## オイカワ

カワムツと並び「ハヤ」と呼ばれるコイ科の一種である。幼魚期の頃はカワムツに似るが、体側は銀白色でやや赤みのある横長の黄斑が見られ、体幅が短くやや細長い印象であることから区別できる。成熟した雄は雌に比べ大型化し、尻びれが伸長し、体色は鮮やかな赤や青緑色を呈し、非常に美しくなる。

## タカハヤ

比較的高い場所を水源とする河川上流部や山間の池などに生息するコイ科の一種である。体色は背面が濃いオリーブ色で、体側は褐色又は黄褐色である。表面は粘液でぬめぬめとしていることから、「アブラメ」と呼ばれることがある。ムギツク

体は細長く、口は上から見るとやや扁平しており、一对のひげが見られる。吻端(口先)から尾びれ付け根(尾びれ基底部)までの体側に明瞭な暗色縦条が見られるが、大型の個体はやや不明瞭になる。県内では本明川や川棚川など大きな河川の中流域や支流で確認することができる。郡川では榎茶屋から佐奈川内川合流点付近の、瀬から淵へ移行する区間で目にするところがある。

## カマツカ

体が細長く、目が頭上部にあり、口ひげは一对ある。口が吻端の下の方に開き、底砂の中にいる餌を探し食べるのに適している形となっている。体側は褐色で暗色斑が入り、腹面は淡い黄色である。河川中流域の緩やかな流れがあり、砂底又は砂礫底に生息する。本市では郡川とよし川のみ確認できた。

## フナ属の一種

一般的に県内においてフナと言えば、ギンブナを指すことが多いが、近年、コイやアユ等の放流に伴い、ゲンゴロウブナなどの稚魚が入っているようである。実際、体高が高いもの等、ギンブナの形状とは異なる個体を目にするところがある。外

見的に区別することが困難であるため、本報告では「フナ属の一種」とした。  
**タイリクバラタナゴ**

体は扁平し体高が高く、体側面は菱形のように見える。雄の婚姻色は名前の由来ともなっているバラ色をしており非常に美しい種である。県内でよく見られるバラタナゴは外来種のタイリクバラタナゴかニッポンバラタナゴとの交雑個体の可能性が高く、純粋なニッポンバラタナゴは佐世保市の一部のみで生息する。大村市において見られる個体群はタイリクバラタナゴとされている(三宅琢也・中島淳・鬼倉徳雄・古丸明・河村功一(二〇〇八)「ミトコンドリアDNAと形態から見た九州地方におけるニッポンバラタナゴの分布の現状」)。

### ドジョウ

水田や湿地、それらにつながる細流を好む。以前は水田脇の水路などでよく見られた魚であったが、ほじょうせいび圃場整備が進み、水路のコンクリート化で生息域を奪われ、本市をはじめ県内でも少なくなっている。



写真3-145 カワムツ



写真3-146 タカハヤ



写真3-147 ムギツク



写真3-148 カマツカ

## ヤマトシマドジョウ

体側に二〜三列にわたり横斑が点列に見られ、尾びれ基部に二個の暗色斑紋がある。また、目から吻端くはなたんにかけて暗色の線が入る。全体的にやや青みがかった色調をしている。河川中流部の流れのある砂底・砂礫底に生息する。本市では郡川のみで確認している。ちなみにドジョウの研究者である池田兵司が昭和十四年（一九三九）に発表した論文では、郡川の個体を検体として用い、本種がタイリクシマドジョウとは別種であることを証明している。

## アリアケギバチ

「ぎぎ」や「ちゅちゅ」の名で知られるナマズに近い仲間である。ナマズは顔がへらのようになっているのに対し、本種は丸みを帯びており猫のような顔をしている。全長二五センチほどで、オリブ色をしている。背びれや胸びれに尖った棘をもち、刺されると痛い。夜行性で甲殻類や水生昆虫を主に食べている。本明川をはじめ、主に多良山系の有明海沿岸の河川で見られる。大村湾に流れ込む河川では、以前、佐世保市の小森川・本市のよし川に生息していたとされているが、

現在は郡川水系のみで確認されている。県内の生息域はダムの建設予定地になっていたり、コンクリート三面張りになったりして、本種の健全な産地は失われつつある。

## ナマズ

オリブ色がかかった斑紋が散らばって見られるが、色彩変異は非常に多様である。下あごが上あごより突出し、それぞれに二対ずつひげがあるナマズだが、稚魚の頃は下あごには更にもう一対のひげがある。成長と共に消失してしまうようである。一般



写真3-149 ヤマトシマドジョウ



写真3-150 アリアケギバチ

的に河川の中下流域に生息する。本市では郡川・鈴田川・よし川に生息している。郡川では荒瀬よりも下流域で見られる。鈴田川では鈴田小付近や干拓地内の水路で見られる。よし川では流域の自治会が環境保護の取組みを行っているところではあるが、河川規模が非常に小さいため、ちょっとした環境の変化で生息地が奪われてしまう可能性がある。

### ドンコ

頭部と胴体は太く、体高はあまり高くなく、ずんぐりした印象である。体色は黄土色で第一背びれの付け根（基底部）から太い暗色横帯が三本入る。河川上中流部の淵で見られる。動物食で口に入る大きさで、生きているものなら貪欲に襲うことがある。

### ヒナハゼ

体長二センチメートル程度の小型のハゼである。体長が短いわりに体高が高い。体側は淡褐色で、小班型の黒い斑紋が規則的に入る。河川下流や河口付近に生息し、主に岸沿いの水生植物の茂みや流木の陰、転石の辺りで見かけることが多い。

### アベハゼ

体長約四センチメートル程度の小型のハゼである。頭部が丸みを帯び、上から見ると左右に目が離れている。体側の前半には数本の暗色横帯が、後半から尾びれ基部にかけて、二本の縦条が見られる。更に、尾びれには黒色線が放射状に並んでいる。河口付近に生息し、やや臭気臭い泥底を好むことから汚染にはかなり強いことが分かる。市内全ての河川で確認した。



写真3-151 ナマズ



写真3-152 ドンコ



## ゴクラクハゼ

ヨシノボリ属の中で、唯一ヨシノボリの和名が付いていない種である。体長は八センチ程で、ヨシノボリ属の中ではやや体幹が大きい。色は灰色に近い色をして地味であるが、婚姻期に入ると、雄の背びれや尻びれは黄色と赤紫色の縞模様が入り美しい。目の後ろまで鱗があり、他のヨシノボリ属とは大きく異なる。主に河口付近から河川下流域に生息する。

## シマヨシノボリ

体長は七センチほどの中型のハゼである。頬に赤いミミズ状の模様が入り、尾びれには放射状に点が羅列している。また、胸びれ基部に三日月状の暗色斑が二〜三本表れる。婚姻期に入ると雌の腹部は青く発色し、非常に美しくなる。

## トウヨシノボリ

体長は七センチほどの中型のハゼである。名前のとおり、尾びれが燈色とうしきに彩られるヨシノボリである。トウヨシノボリには模様の違いや色彩など様々なタイプがあり、本市では燈色型を確認している。河川中流域に生息し、ダムや湖沼にも生息することもある。県内においては、大村湾・有明海沿岸に流入する河川で普通に見られ、西海市以南では、角力灘に面した河川での生息はほとんど確認できない。

## オオヨシノボリ

体長一〇センチを超える中型のハゼであり、県内において生息するヨシノボリ属の中で最大種である。胸びれ付け根（基部）に大きな暗色斑があり、尾びれ基部にも一本の暗色横帯が見られる。河川中流部の流れが速い瀬に生息する。大村湾東岸に流入するいくつかの河川で生息が確認されている。

## チチブ

体長一〇センチほどの中型のハゼである。体色はオリーブ色から黒褐色で、第一背びれの棘状の部分（棘条）が糸状に著しく伸び、背びれ付け根（基部）からひれ膜までの長さの約二倍になる。胸びれの基部が黄色味がかかり、頬に明るい斑点が密に見られることも本種の特徴である。河川下流部や河口域の転石帯に生息し、大村湾沿岸ではどの河川でも見かけ

ることができると。

近縁種のヌマチチブも郡川で確認されているが、非常によく似ており、一見して本種と断定するのはなかなか難しい。第一背びれの棘条が糸状に伸長するが、チチブほど長くはならない点と、頭部から体側にかけて青白い斑点の羅列がチチブのそれと比べるとやや小さい点で区別がつく。

### ウキゴリ

体長一〇センチほどの中型のハゼである。頭部がやや扁平するが、体は細長くスマートな印象を受ける。第一背びれの後端部に大きな黒色斑を一つ持つ。体側に暗色斑が並び、背側にも暗色斑が並び、交互に並んでいるようにも見える。県内でもあまり確認例は多くはないが、大村湾沿岸でしばしば見られる。

### スミウキゴリ

体長一〇センチほど、ウキゴリによく似たハゼである。ウキゴリとの決定的な違いは第一背びれ後端部に黒色斑を持たな



写真3-153 シマヨシノボリ



写真3-154 トウヨシノボリ



写真3-155 オオヨシノボリ



写真3-156 ウキゴリ



写真3-157 スミウキゴリ

い点である。体側に六〜七本の暗色横帯が表れるが、肛門から後ろ三本は明瞭なものに対し、それより前は不明瞭である。長崎県各地で生息が確認されており、本市でも下流域でよく見られる。

## メダカ

最も身近な魚の一つである。塩分に対する耐性が強く、干拓地の水路や塩性湿地、河口付近の水生植物の茂みでも見かけることがある。以前は様々な場所で見られていた種であるが、水田の圃場整備事業や河川改修等により、本種の生息環境が厳しくなってきた。また、改良品種など異なる遺伝子を持つメダカの無差別放流により、本来生息していたものとは遺伝的に異なるものとなってしまうことも懸念されている。飼えなくなったとかメダカを増やしたいからといった安易な気持ちで放流することは厳に慎むべきである。

## カジカ

河川上流部に生息するハゼに似た魚である。県内では多良山系の有明海側のいくつかの河川に生息しているが、本市においては郡川のみで確認されている。郡川でも上流部のごく一部の区間にのみ生息しており、それ以外は本来の生息環境と大きく異なっているため、全く確認することができなかった。国内移入の可能性も考えられる。

## タウナギ

東ほか(二〇〇二)によると、郡川河口付近沖田の側溝で平成八年(一九九六)に五個体、平成十一年(一九九九)に一個体捕獲されているが、平成二十三年(二〇二一)の調査では確認することができなかった。本種は中国大陸・朝鮮半島・台湾島・沖縄県に生息するとされるが、よく分かっていることも多い。県内では本市以外での確認例はないので、恐らく種苗放流で紛れ込んだか、養殖場から逃げ出したものであろう。

(小原良典)

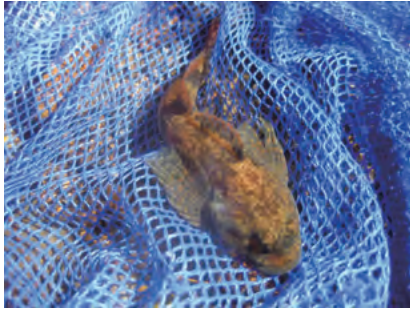


写真3-158 カジカ

## 六 昆虫類

### ■ 1. 大村市の昆虫の調査・研究

大村市内で昆虫類を調査・研究する機関はない。専らアマチュアの昆虫愛好家が趣味的に調査し、研究発表しただけでその成果は、チョウやコウチュウ類を対象にしたものが主で、昆虫類全体の調査資料はほとんどない。大村駅近くの東本町にある大村市子ども科学館には、後藤安一郎によつて採集されたチョウ類、カメムシ類の標本が寄贈展示され、子どもたちの参考にされている。

これまで大村市内在住者で昆虫類の調査研究をした人は、山口鉄男（長崎大学教授昆虫全般）、後藤安一郎（中学校理科教諭チョウ・カメムシ類）、今里健（中学校理科教諭・チョウ・ガ類）、柴原克己（県立高校生物教諭・チョウ・ガ類）など。

### ■ 2. 昆虫と植物との関係

#### 昆虫が棲む環境

昆虫の多くは草食で葉、茎、実を食べたり、汁を吸ったり、花の蜜や花粉を

食べたりするものが多い。偏食する昆虫が多く、特定の植物しか食べないものが多い。雑木林のように植物の種類が多く多様な環境ではそれだけに昆虫も多種になる。植林地ではスギやヒノキといった数種の植物が植林され、多様性が低くなるので、昆虫相も貧弱になる。昆虫は野鳥の餌としても重要で、野鳥を増やすには昆虫が多い自然林を大切にしなければならぬ。

### ■ 3. チョウ類 大村市内には五〇種以上が生息している。

#### 1 アゲハチョウの仲間

大村の代表的なアゲハチョウはナミアゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、アオスジアゲハ、ミカ



写真3-159 大村市子ども科学館

ドアゲハ、ジャコウアゲハ、ナガサキアゲハ、オナガアゲハ、モンキアゲハなど。

## 2 シロチヨウの仲間

モンシロチヨウ、スシグロシロチヨウ(黒木)、キチヨウ、ツماغロキチヨウ、モンキチヨウなど。

## 3 タテハチヨウの仲間

テングチヨウ(近年増加)、サカハチ(翅の斑紋が逆さの八の形の意)チヨウ、ツماغロヒヨウモン、ウラギンスジヒヨウモン、ウラギンヒヨウモン、ミドリヒヨウモン、メスグロヒヨウモン、キタテハ、アカタテハ、ヒメアカタテハ、ルリタテハ、スミナガシ、イシガケチヨウ(岳の木場、大村市内に近年増加)、コムラサキ、ゴマダラチヨウ、コミスジなど。

## 4 マダラチヨウの仲間

アサギマダラ。日本と台湾付近の間で渡りをすることで有名。

長崎県で確認されたアサギマダラもマークをして本州から放たれた個体があったことが確認されている。

大村市黒木の御用林のスギの林床に生えたキジヨランというつる草から幼虫が発見されたことがある。ここで羽化した成虫の中には、その後、日本南部や台湾方面まで飛んでいった可能性がある。なかなか美しく、そして生態も面白いチヨウである。

## 5 シジミチヨウの仲間

ヤマトシジミ、ルリシジミ、スギタニルリシジミ(黒木)、ムラサキシジミ、ムラサキツバメシジミ、ゴイシシジミ(大村公園)、トラフシジミ(山田の滝)、ベニシジミ、ツバメシジミ、ミスイロオナガシジミ(東大村、ほか)など。

## 6 ジャノメチヨウの仲間

ヒメウラナミジャノメ、ウラナミジャノメ、クロヒカゲ、クロコノマチヨウなど。

## 7 セセリチヨウの仲間

イチモンジセセリ、アオバセセリ、クロセセリ、コチャバネセセリ、ミヤマ(深山の意)セセリ。



## 8 迷蝶

東南アジアに生息地の中心を持つ南方系のチョウが飛来したものの、まれに大村市付近で偶然発生する場合がある。ホシボシキチョウ（野岳で大発生したことがある）、メスアカムラサキ、タテハモドキなど。

### ■ 4. ガ類 大村市内には五から六〇〇種が生息している。

#### チャドクガ（茶毒蛾の意）

体を覆うリン粉の中に毒針を持ち、卵をサザンカ、ツバキ、チャの木々の葉裏に産み付け、ふ化した幼虫は葉裏に集団で並び、その葉を食べて育つ。庭木の剪定などの時に幼虫から飛び散った毒針が皮膚に付着して刺さり、赤くはれることが多いので嫌われている。保育園、幼稚園など小さい子どもが遊ぶところにはサザンカは植えないほうが良い。



写真3-160 大村市子ども科学館に展示の標本  
(標本作製者：後藤安一郎氏)



写真3-164 オオミズアオ 大きく、美しい蛾



写真3-161 ナガサキアゲハ



写真3-165 シンジュサン サンは蚕を指す



写真3-162 アサギマダラ



写真3-163 チャドクガ (交尾中)

## ■5. コウチュウ類 前翅が硬い昆虫

### 1 ホタル

発光が著しいホタルはゲンジボタルとヘイケボタルの二種で、ホタルの鑑賞といえはだいたいゲンジボタルを指す。ゲンジの由来は源氏物語の登場人物である「光源氏」にちなんでホタルは光る↓源氏と連想し、ゲンジボタルの名がついたという。源氏が出たから↓平家を連想し、ヘイケボタルの名がついたとされる。これは昔の長崎県出身の有名なホタル研究家の説である。

大村市内でゲンジボタルが多いのは郡川や南川内川みなまのかわのような清流周辺が有名である。ゲンジボタルの幼虫は水生で生きたカワニナやイシマキガイの生肉を食べて育ち、成虫になる前にさなぎになるために川ぎわの土手へ上がって土中でさなぎになり、やがて成虫となって地上へ出る。ヘイケボタルの幼虫は放棄水田や湿地にいてモノアラガイという五、六ミリの貝を捕食して育つ。これに対し幼虫が陸生でカタツムリなどを餌としているのはヒメボタルである。ヒメボタルは体長が五、六ミリ程度の小さなホタルで、一般にはあまり有名ではなく、鑑賞の対象にならない。ヒメボタルは川でなく林や森の林床を飛びまわり、季節的にはゲンジボタルやヘイケボタルと同じころに発生するが、点滅はゲンジボタルやヘイケボタルよりも早く「パツパツ、パツ」と線香花火のように点滅する。ホタル類の点滅が種類とか雌雄で異なるのは、ホタルは夜行性であるから暗がりでお互いを判別できないので、光で識別するのである。ホタルは成虫になってからは幼虫のときに蓄えた養分で生きていて、水以外には餌を食べない。

大村市内では萱瀬ダム付近の田下町たじまには養殖場も整備され五、六月の発生期には家族連れでホタル鑑賞に集まる人でにぎわっている。ホタルの光は神秘的で、また熱を出さない発光である。



写真3-166 ミカン木の害虫ゴマダラカミキリ

## 2 クワガタムシ類

コクワガタ、ミヤマクワガタ（ミヤマは深い山の意）、ヒラタクワガタ、ノコギリクワガタ、ネプトクワガタなどが大村の代表種である。幼虫は枯れ木の中で育つ。花壇や畑の土から出てくる白い幼虫はクワガタ類の幼虫ではなく、コガネムシの幼虫である。大村市内でオオクワガタを採集したという話もあるが、まだ確認されていない。

## 3 カブトムシ類

カブトムシにはコカブトムシという小型の種類もいる。カブトムシはコガネムシの仲間で、触覚の形がクワガタムシ類とは異なる。クワガタムシの幼虫はクワガタムシよりもつと木が腐つてぼろぼろの枯れ木の中や堆肥たいひの中で育つ。飼育は容易である。カブトムシの成虫は生まれた年の夏の終わりには死んでしまい短命であるが、クワガタムシの中には翌年まで越冬するものもいる。

カブトムシやクワガタムシの成虫の餌は樹液や果実に含まれるブドウ糖やシヨ糖で、市販の餌は黒砂糖で甘くしたゼリーである。自然で樹液をよく出す木はタブノキ、クヌギなどが有名である。

## ■ 6. トンボ類

トンボ類は水辺の代表的な昆虫であるが、流れがある河川で幼虫（やこ）が育つ種類と流れのない池、水田や湿地で育つトンボとの二種類に大別できる。流れのトンボの代表格は川の源流部に棲むアサヒナカワトンボ、ミヤマカワトンボ。もう少し下流の水田付近などでは翅が真っ黒なハゲロトンボ。郡川上流や南川内の川では水量も多く、そういう環境ではヒメクロサナエ、オジロサナエ、ムカシトンボ、ミルシヤンマ、コオニヤンマ、コシボソヤンマが生息する。流れのない池や湿地で育つトンボにはシオカラトンボ、オオシオカラトンボ、シオヤトンボ、シヨウシヨウトンボなど。ギンヤンマ、クロスジギンヤンマ、チヨウトンボ、ヨツボシトンボ、クロイトトンボ、オオイトトンボ、キイトトンボなど。ウスバキトンボはお盆前後に空き地の広場や水田の上を群れて飛び、長崎県内では「シヨウロウトンボ」と呼ぶ地方が多い。亡くなった人の魂がこのトンボの背に乗ってお盆の里帰りをされるといって「シヨウロウトンボ」と呼ばれる。ウスバキトンボは幼虫も成虫も日本国内では越冬できず、成虫が



写真3-167 シオヤトンボ



写真3-168 チョウトンボ

## ■ 7. カマキリ類

前あしが鎌状に変化し他の昆虫を捕まえるようにできています。目玉をくるくる動かして愛嬌があるので子どもたちにも人気があります。

普通に見かけるのはチョウセンカマキリ、オオカマキリ、コカマキリ、ハラビロカマキリ、ヒナカマキリ。ウスバカマキリは長崎県下では非常に稀で長崎空港付近でただ二頭発見されたことがある。カマキリの卵は発泡スチロールのような固まった泡に囲まれ冬を越す。

## ■ 8. ナナフシムシ類

翅がなく飛べないのはエダナナフシ、トゲナナフシ。植物の緑色の枝や枯れ枝に似て身を隠す。翅があり飛ぶことができるのはタイワントビナナフシ。



写真3-169 アブラゼミを捕らえたハラビロカマキリ

毎年沖縄付近から北上して大村に達したら池、水田あたりに産卵し、ちようどお盆の頃、二世が多数発生してくる。ウスバキトンボを赤トンボとかアキアカネと呼ぶのは誤りである。赤トンボは大村付近ではマユタテアカネ、ナツアカネ、コノシメトンボなどで、日本のアキアカネは北国のトンボなので大村ではほとんど見られない。チョウトンボは大村市内の溜池などで見かける美しいトンボである。



## ■ 9. バッタ・コオロギ類

バッタは翅と脚をこすり合わせて発音する。コオロギ類やキリギリス類は二枚の翅をすばやくこすり合わせて美しい声(音)を出すので秋の虫を代表する昆虫類である。代表的な「鳴く虫」はスズムシ、マツムシ、クサヒバリ、カネタタキ、エンマコオロギ、タイワンエンマコオロギなど。近年はアオマツムシという緑色の帰化昆虫でマツムシに似た虫が、市内の街路樹の上で甲高い声で「リーリーリー」と鳴いており、大村市内にも広がってきた。バッタやコオロギ類は草原や地上に棲むものが多いのでスキが多い草原が重要になる。大きなバッタはトノサマバッタ、クルマバッタ、シヨウリヨウバッタ。この仲間は雌は大きく、雄は小さい。庭先にも多く青ジソの葉に群がる害虫はオンブバッタで、背負われているのは子どもではなく雄である。

### ■ 10. ハチ類

#### 1 スズメバチ類・アシナガバチ類

スズメバチ類で刺すのは雌の産卵管が変化したものであり、一方雄のハチには産卵管がなく、当然刺さない。雄は九月頃出現するが、それまでは女王バチとその娘ばかりでどの個体も刺す能力はある。大村のスズメバチ類には四種いて、最も大きく恐れられているのはオオスズメバチ、やや小さく、個体数も多いのはコガタスズメバチとキイロスズメバチ。分類上はスズメバチでもほとんど刺すことがないのはヒメスズメバチ。ヒメスズメバチは腹部のお尻が黒く、他の三種は黄色いので慣れるとすぐ識別できる。ヒメスズメバチはアシナガバチの巣を襲ってその幼虫を奪い去って食べるのでアシナガバチ類には恐るべき天敵である。

スズメバチ類・アシナガバチ類は枯れ木、枯れた竹の表面を歯でこさぎ取って巣の材料とする。人家の御簾をかじっている個体もある。アシナガバチ類の巣は人家の屋根のひさしなど雨がかからない場所に作られ、「じょうろ」の先端のあたりにしている。オオスズメバチは土の中に巣を作ることが多いが、キイロスズメバチやコガタスズメバチは車庫や民家の軒下など、雨が当たらないところに作る。壁は二重、三重になっていて断熱効果がある。出入口は一口所で、そこには見張りがいて、怪しい敵が近づくと音を出して仲間知らせる。スズメバチ類・アシナガバチ類はミツバチのような蜂蜜は貯めない。巣の中



写真3-170 アシナガバチ雄の腹端(針はない)

ら、病院に行くほうがよい。

## 2 ミツバチ類

ミツバチ類は人に蜂蜜を提供するばかりでなく、植物の花を訪問し、花粉媒介を行うので自然界では重要な任務を持っている。ミツバチ類には日本に昔から棲んでいたニホンミツバチとヨーロッパから移入されたセイヨウミツバチの二種がいる。蜂蜜も近年は外国産の安価なものが輸入し販売されているので、日本では養蜂業が少なくなっている。セイヨウミツバチは巣箱ごとイチゴ業者に貸し出され、イチゴハウスの中でイチゴの花の受粉に貢献している。

## 11. セミ類

大村の代表的なセミはクマゼミ、アブラゼミ、ニイイゼミ、ツクツクボウシ、ヒメハルゼミ。クマゼミは黒びかりして、声も大きく、夏の代表的な昆虫で、午前中によく鳴き、クマゼミの声を聞くと汗がどっと吹き出るほどである。クマゼミの雌は庭木や街路樹の細い枯れ枝に腹端の産卵管で穴をあけて産卵する。翌年の夏にふ化し、地面に落下した幼虫は土にもぐって木の根



写真3-171 トックリバチの子育て用の育房

では越冬せず、巣は毎年新築され、ミツバチのように居すわることはないから、十一月頃まで待てばハチたちは越冬場所を求めてどこかへ去って行く。スズメバチ類・アシナガバチ類もガやチョウ類の幼虫を見つけて、その肉を持ち帰り幼虫に与えるので、ある意味では益虫である。スズメバチ類の幼虫を趣味で食用にする人もいる。ハチ類の巣を発見してもハチがむやみに刺すことはないから、見つけたらそっとしておくほうがよい。もしスズメバチ類に刺された

から汁を吸って二、三年後に地上へ出て、鳥が寝ている日没から木や塀に登って羽化する。卵から成虫になるまでに足掛け四、五年かかる。アブラゼミは足掛け六、七年かかることは有名である。しかし、何年で成虫になるのか分かっていないゼミも多い。ヒメハルゼミは梅雨の時期から七月末までシイ林に発生し、早朝から、日没までひっきりなしに集団で合唱し、鳴き止む時も一斉に止む。

ハルゼミはほかのゼミがまだ発生しない六月、マツ林に発生し、大村市ではマツが多い野岳に多産する。ヒグラシは別名カナカナとも呼ばれ、早朝や日没時によく鳴く、鳴き声には風情がある。ゼミ類の幼虫は土中において、夏が来たこと、日没になったことなどのようにしてわかるのであろうか。ゼミ一つでも謎が多い昆虫たちである。

## ■ 12. カメムシ類

大村には七〇種くらい生息し、カメムシ類はおどろかすと胸の穴から臭いをだすので、「ヘーフリムシ」などと呼ばれることが多い。チャバネアオカメムシ（幼虫はスギヤヒノキの実で育つ）、ツヤアオカメムシ、オオクモヘリカメムシ、ブチヒゲカメムシ、ベニツチカメムシ（赤く、集団で葉に群がる、幼虫はボロボロノキの実から汁を吸って育つ）、ホオズキカメムシ（ナスやピーマンに群がる黒褐色のカメムシ）、キマダラカメムシは東南アジア原産で江戸時代にオランダ船で長崎出島に侵入し、日本に帰化したもの。大村市内の街路樹などにも普通にいる。体長は一・五センチくらい。秋の終わりには人家に侵入してそのまま越冬し、翌春には屋外へ勝手に出て行くというチャッカリしたカメムシである。

## ■ 13. ハエ類

大村の名前をつけた昆虫に「オオムラヤブカ」がある。大正十年（一九二二）大村公園で最初に発見された熱帯系の蚊で、この名前がついたが、大村公園の森も当時とは変



写真3-173 キマダラカメムシ



写真3-172 枯れ枝から取り出した  
クマゼミの卵

化し、今では大村公園では再発見されておらず、絶滅したようだ。

#### ■14: 昆虫の大村の方言

代表的な名称はへんぼ（標準和名トンボ類）、おがみたろう（カマキリ）、へつぷりむし・ふう虫（カメムシ類）、しよろろうへんぼ（ウスバキトンボ）、あぶらむし（室内のクロゴキブリ）、じゃぐま（クマゼミ）などがある。

（池崎善博）

### 七 水生生物（エビ・カニ類）

#### ■1. 十脚目甲殻類の概要

大村湾は閉鎖性海域であり、対馬暖流の影響を受けにくい。こうしたことから五島灘に面した河川で普通に見られる両側回遊種（孵化した幼生が海に下り、成長し、川を上っていく種類）とりわけ亜熱帯性の種はほとんど見られない。

エビ類では、ため池や堤などにミナミヌマエビやスジエビなどが見つかっている。しかし、大村湾に流入する河川の大部分にこれらの種が確認されているわけではないので、自然分布かどうかは疑わしい。また、同じ場所でサカマキガイやスクミリンゴガイなどが見つかっていることから、外来種の可能性も否定できない。

河川下流部から河口部にかけては、ミズレヌマエビやミナミテナガエビ、ユビナガスジエビが見られ、河口干潟では、スジエビ、モドキやテッポウエビ、セジロムラサキエビが見られる。

カニ類は、河川上流部ではサワガニが見られる。中下流部になると、アカテガニやベンケイガニが見られる。河口付近になるとクロベンケイガニやフタバカクガニ、カクベンケイガニ、ケフサイソガニ、ヒライソモドキの仲間が見られる。干潟や塩性湿地のある場所では、アシハラガニ、ウモレベンケイガニが見られる。

#### ■2. 種の説明

#### ミズレヌマエビ

ヒメヌマエビ属の一種である。額角<sup>がっかく</sup>が長く伸び、ややそり上がる。腹部には名前の由来ともなっている小さな暗色点が羅列している。両側回遊種であり、河口から下流域の水草が繁茂する場所に多い。本種はヒメヌマエビ属の中で、県内において最も広範囲に生息している。本種に極似するツノナガヌマエビと思われる個体も県内で見つかっているようであるが、本市に生息するのはミヅレヌマエビの特徴を有している。

### ミナミヌマエビ

釣り餌用として各地のダム湖に放流されているようである。一生を淡水の中で生活する種類（陸封種）であり、県内で見られる他のヌマエビ科の種とは性質が異なる。なお、観賞魚ルートや餌用の種苗放流などで、ミナミヌマエビの近縁種も持ち込まれている可能性も非常に高い。こうした近縁種は外見でミナミヌマエビと異なると断定するのは難しいようだ。今回、本市で見られるカワリヌマエビ属の個体は、「ミナミヌマエビ」として報告する。

### ミナミテナガエビ（写真3-174）

大村湾沿岸で見られるテナガエビは本種の場合が多い。河口から中・下流に生息する。頭部の側面に二本の暗色横帯があり、足の爪が比較的短いので、テナガエビと区別することができる。暖流の影響を受ける河川に多く生息するので、本市で見かけることはあまり多くない。

### スジエビ

腹節に沿って黒い筋がたくさん入ることから名付けられたエビである。陸封するA型と両側回遊するB型に分かれるが、本市においては野岳湖や変配川に生息するA型である。

### ユビチナガスジエビ

河川汽水域や塩性湿地に多く見られるスジエビの仲間である。スジエビモドキと同



写真3-174 ミナミテナガエビ



じ場所で見られることもあるが、より上流側の塩分濃度の薄い場所で見かけることが多い。個体によっては黒っぽくなるものや、頭部から尾びれの付け根(基底部)にかけて中央に白線が入る個体も見られる。

### スジエビモドキ

河口干潟で見られるスジエビの仲間である。ユビナガスジエビに似ているが、腹部に黒い線が入ることと、腹節に明瞭な黒い筋があるので区別がつく。また、ユビナガスジエビよりは海に近い所で見られることが多いが、イソスジエビやアシナガスジエビよりは淡水の影響を受ける場所で見られる。

### セジロムラサキエビ

河口域に生息する一センチほど小型のテッポウエビである。体色は赤紫色をしているが、頭部から尾びれの付け根(基底部)にかけて中央に白線が入る。普段は腕を折りたたんで行動する。岩をめくると見つかることもある。

### ケフサイソガニ

下流域から河口付近、淡水の影響を受ける海岸など、広い範囲で見かけるモクズガニ科の一種である。雄の腕脚には、はさみに毛が生えているが、タカノケフサイソガニに比べて量は少ない。腹面には黒い点が多数見られる。

### ハマガニ(写真3-175)

甲幅五〇ミリのほどの中型のモクズガニ科の一種である。アシハラガニに似るが、甲が丸く、紫色を呈することなどで区別できる。また、大型になるので本種だと分かる。

河口付近の干潟の土手などに穴を掘って生息している。

### アシハラガニ(写真3-176)

甲幅三〇ミリのほどの中型のカニである。青味のある薄緑色をしており、鋏脚は淡黄色になる。眼後棘が発達している。河口付近の泥干潟や水田の畦に巣穴をつくつ



写真3-175 ハマガニ

て生息しており、よく巣穴から外に出て餌を探している姿を見かける。

## モクスガニ

中華料理で有名な上海ガニと同属のカニである。本県では「つがね」や「つがに」と呼ばれる。カニ汁などの食材となることから、昔は本種を獲る漁師もおり、漁業権もかけられていたようである。

## クロベンケイガニ(写真3-17)

甲幅三五ミリのほど、眼後棘の下には切れ込みがない。甲はごつごつとしており、灰褐色をしている。

鋏脚の二の腕は淡い紫色で、外縁部に顆粒状の点列が見られる。河口付近の土手や塩性湿地に穴をあけて生息している。河川汽水域・河口付近において最もよく見かけるカニの一種である。

## ウモレベンケイガニ(写真3-178)

河口干潟のよし原や塩性湿地に生息する。甲はでこぼこしており、土色を呈しており鋏脚は淡燈色を帯びる。動きは活発ではなく、比較的乾燥している干潟の転石下でじっとしていることが多く、見つかりにくい。岩などをめくると本種を発見することがあるが、捕まると擬死状態になり、安全と認められるまでは動かないことが多い。

## フタバカクガニ(写真3-179)



写真3-176 アシハラガニ



写真3-177 クロベンケイガニ



写真3-178 ウモレベンケイガニ

甲幅四〇ミリほど、緑がかった黄褐色で、眼後棘の下には切れ込みがあり、腕脚が黄色みを帯びる。軟泥質の干潟や泥のたまった港などに多い。一方、同じ場所で見られるカクベンケイガニは眼後棘の下に切れ込みはなく、腕脚が赤褐色を帯びるので容易に区別がつく。また、石垣の隙間や岩礁、コンクリート化された堤防などで見られる。

### ベンケイガニ

甲幅三五ミリ程度、眼後棘の下に更に一对の切れ込みがある。甲背面は溝ではっきりと区切られており、色彩のよく似たアカテガニとの区別がつく。

### ハクセンシオマネキ(写真3-180)

蹠脚を振っている(ウェイピング)姿が潮を招いているように見えることから名が付いたスナガニ科の一種である。オスの左の腕脚が著しく成長しているのに対し、雌の腕脚は両腕とも小さいので雌雄の判別は容易である。本市における生息地は、大村公園横の竜神社前干潟のみである。『レッドデータブック7(クモ形類・甲殻類等)』にも記載されている絶滅危惧種である。健全な環境の干潟には必ず生息する指標的なカニであることから、ここを保全する必要があるだろう。

### チゴガニ(写真3-181)

甲幅一センチ以下以下の小型のスナガニの仲間である。



写真3-180 ハクセンシオマネキ

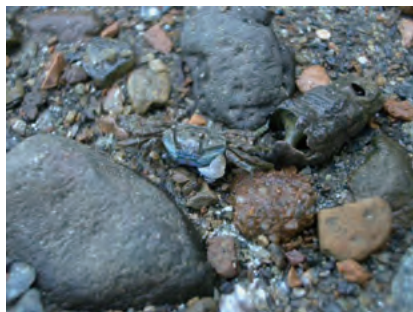


写真3-181 チゴガニ



写真3-179 フタバカクガニ

礫混じりの干潟に生息しており、同じ場所ではハクセンシオマネキが見られることがある。両腕でウエイピングする姿は愛らしい。本市においては溝陸干潟に多い。

### ヒメヤマトオサガニ(写真3-182)

軟泥質の干潟に生息するオサガニ科の一種である。同科のヤマトオサガニによく似ているが、雄の第三步脚に毛が密生しているのが本種の特徴の一つである。また、ウエイピングの方法が両鉄脚を万歳するように突き上げることも本種ならではの特徴である。更に、ヤマトオサガニは有明海側の河川にのみ生息する強内湾性なものに対し、本種は有明海には生息しない。本市では溝陸の干潟、鈴田川、郡川などで見られる。



写真3-182 ヒメヤマトオサガニ

### カワスナガニ(写真3-183)

ムツハリアケガニ科の一種である。汽水域上端の流れが緩やかな砂泥底でタケノコカワニナと共に見られることが多い。全国的に見ると生息状況は厳しいものがあり、「絶滅寸前」とされている。大村湾では比較的に見る機会が多く、郡川は県下最大級の生息地となっている。

### 3. 淡水・汽水性貝類の概要

本市は扇状地に開けた地形で、河川があまり発達しておらず、淡水性貝類の生息地になり得るわんどや水田・用水路はあまり多くはない。よって、在来種で確認できた種は少ない。野岳湖では、幼貝期に殻頂から縦に筋(縦肋)が顕著に表れるチリメンカワニナと思われる個体も見つかっており、更に精査が必要と思われる。



写真3-183 カワスナガニ

一方、スクミリンゴガイやサカマキガイなど人為的に運ばれてきた外来種が広範囲で確認されていることから、生物相は攪乱されていると考えられる。

汽水域では、大村湾という特殊な環境からも、その貝類相は非常に興味深い。特に『レッドデータブック7(クモ形類・甲殻類等)』の上位に記載されているオカミミガイ科数種も見られる。また、河口干潟付近では、全国的に減少傾向とされるウミニナ、フトヘナタリは多産する。また、ミヤコドリ、トウガタガイ科、リソツボ科、カワザンシヨウガイ科などの小型の貝類も多い。軟泥質のある河口干潟にはコゲツノブエが決まって見つかる。アサリが属するマルスタレガイ科では、ケマンガイ、ウチムラサキなども多産する。更に県の絶滅危惧種として上位に挙げられているイボウミニナやヒロクチカノコも見つかる。岩礁帯に移行する場所ではオニツツノガイ科のカヤノミカニモリ、コベルトカニモリも見られ、カニモリガイの貝殻もよく見られる。大村公園のそばを流れる玖島川河口では、シオヤガイ、イオウハマグリも見つかっている。

#### ■ 4. 種の説明

##### モノアラガイ

殻高が一五〜二〇ミリと、在来モノアラガイの仲間では圧倒的に大きい。また、触覚が三角形のような形になり、螺旋が非常に低く、殻口が非常に発達していることから本種と分かる。池や沼、水田、川の淀みの水草などに付着していることが多い。最近減少傾向で、『長崎県レッドデータブック2011』にも記載されている。本市においては鈴田川水系に多い。

##### ヒメモノアラガイ(写真3-184)

最も多くの場所で生息が確認されているモノアラガイの仲間である。殻高が一五ミリ以下で、殻口が大きく成長するが、モノアラガイほど大きくはならない。用水路・水田に多く、比較的汚れた場所でも見られ、サカマキガイと同じ場所で生息するこ



写真3-184 ヒメモノアラガイ



とも多い。稲苗に付着して、生息を拡大させているようである。

### ハブタエモノアラガイ

殻高が高く二〇<sup>ミリメートル</sup>にも達する北米原産の外来種である。スマートな体形をしている。殻表には模様がある。殻が薄く、ちよつとした力で潰れてしまうことがある。鈴田川水系で見られた。

### サカマキガイ (写真3-185)

外来種の淡水性巻き貝としては、スクミリンゴガイと共に有名である。巻き方が逆になっており、殻口が向かって左側に開いているのが特徴である。軟体部はやや黒ずんでおり、目の突起は細長い。水田や汚れた水域でよく見られ、一般的に生息地を拡大させている傾向が認められる。

### ヒラマキミズマイマイ

平巻き状円盤形をしており、県内において確認されているヒラマキガイ科三種の中で、最も平べったい印象である。体層の周辺には角がある個体も見られる。池、水田、流れの弱い細流に生息し、水草の繁茂する場所を好む。

### クルマヒラマキガイ (写真3-186)

「レンズヒラマキガイ」とも呼ばれる。殻は平巻き状円盤形で、下面は平らになっている。上面は凸レンズのように膨らんでいるものの、螺層部分は僅かに凹んでいる。河川の流れの緩やかな場所や水田・用水路などに生息する。『長崎県レッドデータブック2011』では危惧Ⅱ類となっている。本市では、鈴田川水系でよく見られる。苗や水生植物の移植に伴って移動する可能性もあり、本種が自然分布かどうかは分か



写真3-186 クルマヒラマキガイ



写真3-185 サカマキガイ

ていない。

### マルタニシ(写真3-187)

殻高六〇ミリのにもなる大型の巻き貝である。螺層は丸く膨らみ、各層の継ぎ目は深く入り組んでいる。殻高外唇に向けて、小孔列が見られる個体もある。県内でもあまり生息地は多くなく、長崎県レッドデータブックでは危惧Ⅱ類となっている。本市では溝陸湿地横の水田で確認することができる。

### ヒメタニシ(写真3-188)

殻高三五ミリのほどの中型の巻き貝である。殻は黄土色をしており、厚く固い。河川、池、用水路に生息し、水質が多少悪い所を好むようだ。本市では野岳湖に多く生息している。

### スクミリンゴガイ

稲の新芽を食べる大害虫として、農家の方に嫌われている巻き貝である。和名よりも「ジャンボタニシ」という名の方が有名である。産卵期になると、用水路横の壁面等にピンク色で葡萄状の卵塊を産む。戦後日本に持ち込まれ、生息域を爆発的に拡大させている。

### タケノコカワニナ(写真3-189)

カワニナよりも殻高が高く、大型になると八センチメートルを超える個体もある。若貝の貝殻は黄土色であるが、成長と共に茶褐色となっていく。汽水域上端部の砂泥地に生息する。全国的に減少傾向であり、『長崎県レッドデータブック2011』では危惧ⅠB類となっているが、大村湾東岸の河川には生息地は多い。本市では郡川水系・溝



写真3-188 ヒメタニシ



写真3-187 マルタニシ

陸湿地など非常に大きな産地となっている。特に郡川水系は県内最大級である。

### ウスイロオカチグサ(写真3-190)

殻高<sup>二〇ミリのほど</sup>のカワザンシヨウガイ科の一種である。湧水がにじみ出てくるような場所に集まって生息するが、水に浸かることは好まないようである。

### ヒロクチカノコ(写真3-191)

成貝は殻長<sup>二〇ミリのほど</sup>で、殻後方が尖った半卵形をしている。殻は黄褐色やオリーブ色で、殻口は黒褐色である。また、殻口がDの字の形になっており、大村湾で見られるアマオブネガイ科三種と比べても違いが明らかである。河川河口付近に生息する。

### ドブガイ

殻長約一〇〇<sup>ミリのほど</sup>の卵形の二枚貝である。殻色は、幼貝までは黄緑色をしているが、成長すると淡褐色から黒褐色になっていく。湖や池、河川、用水路などの泥底や砂泥底に生息する。ドブガイなどイシガイ科の二枚貝の幼生は「クロキティウム」と呼ばれている。ヨシノボリなどの底生魚の鰓<sup>えら</sup>やひれなどに一時的に寄生し、離れた後、着底生活に入る。また、バラタナゴの仲間<sup>なまこ</sup>は、生きたドブガイの内部に産卵を行い、仔魚<sup>しご</sup>になると、貝の外に出て行く。それぞれに共生を行っているといえる。郡川水系、鈴田川水系、よし川で見られる。

### マシジミ科の一種

河川、池、用水路などの砂泥底、砂礫底に生息する。小型のものは黄土色であるが、大型になると茶褐色から黒褐色になる。純淡水域で見られ、色彩的にはマシジ



写真3-190 ウスイロオカチグサ



写真3-189 タケノコカワニナ

ミと思われるが、極似する外国産シジミ（特にタイワンシジミ）が持ち込まれ、生息域が拡大している傾向から、本市で見つかっている個体もマシジミと断定はできない。

### フトヘナタリ

河川河口部や塩性湿地などに生息するキバウミミナ科の巻き貝である。

### コゲツノブエ（写真3-192）

『長崎県レッドデータブック2011』では危惧IB類となっているが、大村湾流入河川の河口部では決まって本種が見つかると。オニツノガイ科の特徴である、仏の螺髪（はら）のような突起が見られる。やや臭気が強いの内湾性の干潟にも見られる。本市においては、特に溝陸湿地でおびただしい数が見られる。長崎県では本種の採取を禁止しているが、干潟で網を使えば普通に入ってくることから、別の種を捕獲する場合も県自然環境課に申請をしなければならぬので、注意が必要である。

（小原良典）



写真3-192 コゲツノブエ



写真3-191 ヒロクチカノコ

## 第三節 海洋環境と生物

### ① 大村湾の珍しい生物

大村湾に棲息する生物の全容が十分に把握されているとは考えられないが、今までの調査研究による成果を分類群別に整理し章末の表にまとめた。その結果現時点では五三八属七六四種以上の生物の出現記録がある。恐らく今後の調査・研究の進展によって大村湾の生物種多様性は増加するに違いない。研究が進展するにつれ、大村湾にも注目すべき生物が棲息していることが明らかになってきた。それらはやはり絶滅や消滅に瀕している生物であり、大村湾の環境変化との関わりで関心を呼んでいる。最近になって衆目を集めている生物は軟体動物のオキヒラシイノミガイ、節足動物のカブトガニ、魚類のイドミニミズハゼやトラフグ、トビハゼ、海産ほ乳類のスナメリなどである。また、湾奥部の湿地にはアオイ科・ハマボウの生育も注目されている。

#### イドミニミズハゼ (*Luciogobius pallidus* Regon, 1940)

大村湾北部の大崎半島付近で採取された。全長が6センチほどのハゼであり、内湾河口部の砂泥底に生息するとされる。『長崎県レッドデータブック2011』によると本種の生息域が容易に開発されやすい場所にあり、その環境保全が懸念されるとの判断から準絶滅危惧種として取り扱われている。

#### 冬の魚トラフグ (*Takifugu rubripes* (Temminck et Schlegel)) (図3-12)

冬場の食卓に上ることもあるトラフグも、長崎県のレッドデータブックによると絶滅の恐れがある地域個体群として登録されている。この種は日本沿岸や沖合域に広く生息し、かつてはグラバー図譜にもあるように長崎県周辺でも捕獲されていた。しかし、最近では養殖による生産が増加しているものの、天然物の漁獲高が極端に減少してきており、絶滅が懸念されて



図3-12 トラフグ (『グラバー図譜』より 長崎大学附属図書館所蔵)



いる。大村湾へは温暖期に來遊が確認されている。

### 干潟の魚トビハゼ (*Periphatthalmus modestus* Cantor, 1842)

トビハゼはムツゴロウと並んで干潟の代表的な魚である。諫早湾干拓事業により潮受け堤防完成以前に存在していた諫早湾干潟にはムツゴロウとともに多数のトビハゼが生息していたことは記憶に新しい。トビハゼは東京湾から有明海にかけての各地の干潟に生息するとともに、朝鮮半島南部や中国沿岸域の干潟にも広く分布している。かつては大村湾北部の小規模な干潟にも生息していたことが知られていたが、現在は大村湾から消滅したようである。『長崎県レッドデータブック 2011』では諫早湾での生息地の激減から、絶滅の恐れのある地域個体群とされている。

### 小型のクジラースナメリ (*Neophocaena phocaenoides* (Cuvier, 1829)) (写真3-193)

大村湾にクジラが生息するというと本当かと疑う人も多いと思う。

沖縄や小笠原の海で注目を浴びているサトウクジラやゴンドウクジラほど大きくはなく、また海水面から飛び上がるような行動も見せないが、分類学的に述べるとなるとやはりクジラの仲間になる。このような海産大型ほ乳類が大村湾に棲み着いているのである。それはクジラ目ネズミイルカ科のスナメリである。ハンドウイルカのような背びれはなく、また突き出た吻部もなく、したがって、全体としてずんぐりとした体型で、皮膚は薄い灰色か淡褐色、体長は一・六〜一・七メートルほどの歯を持った人間とほぼ同じ大きさのミニクジラである。スナメリは沿岸性が強く、五〇メートルも浅い海域に生息し、砂泥質の底質にいるシャコやエビ類をほじくり出して食べるほか、遊泳性の魚やイカ・タコなども餌としている。インド洋からボルネオ沿岸、南シナ海、東シナ海を経て日本沿岸域に出現し、



写真3-193 時津港に水上げされたスナメリ

日本沿岸が北限になる。この分布から見ると★テチス海要素の生き物と思われ、その起源は古第三紀にまで遡るのかもしれない。日本沿岸ではこれまでに東京湾をはじめ三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海に多く生息しているとされてきたが、一九七〇年代からのこれら海域での浅海域の埋め立ての進行や、陸域からの汚濁物質の増加に伴う水質悪化とともにその生息数が減少している。更には船舶の高速航行が盛んになるにつれ、それとの衝突事故も後を絶たないようである。西九州では有明海や大村湾のほか、橘湾にも生息している。環境省が二〇〇〇年に行った調査によると大村湾には三〇〇頭足らずのスナメリが生息するとしている。以前は魚網などに引っかかることもまれではなかったというが、昨今はその姿を見る機会が減ったという。環境省によるとスナメリは全国規模で見ても絶滅が危惧される種と認定されている。

#### ★テチス海要素

ヒマラヤ山脈が形成される以前、すなわちインド大陸がユーラシア大陸に衝突する以前（およそ二億年前から四五〇〇万年頃）に存在した古代の海をテチス海と呼ぶ。テチス海は東西方向に延び、ヨーロッパからアジアにまで広がっていた暖海性の地中海であった。現在の海洋生物の分布を見ると、近縁種がインド洋と太平洋に別れて生息している事例が知られ、それらのはかつてのテチス海に生息していた種が、地理的隔離を受けて種分化したと考えられる。そのような生物群をテチス海要素と総称する。

#### 生きた化石—カブトガニ (*Tachypleus tridentatus* (Leach, 1819)) (図4-13)

節足動物門節口綱劍尾目カブトガニ科に属し、世界では二属四種が確認されている。日本では瀬戸内海、九州北部沿岸にカブトガニが生息し、同じ種が台湾、中国大陸東岸、フィリピン、ベトナム、ボルネオ島、ジャワ島、スマトラ島に分布する。ミナミカブトガニやマルオカブトガニはベンガル湾、シヤム湾、マレー半島、ボルネオ島、ジャワ島、スマトラ島に生息する。そのほか、アメリカカブトガニが北アメリカ大陸の東岸とユカタン半島東岸に広く分布する。

カブトガニは成体で大きき五〇〜六〇センチ、頭には触角がなく、頭胸部には六対の胸肢がある。胸肢の第一対は鋏角

(はさみ状) になっている。呼吸は鰓書さいしょで行い、クモの呼吸器である肺書はいしょと類似する。血清もクモ類に近い。これらのことからカプトガニは外形が一見似ているカニ類ではなくクモ類に近縁であるとされる。現在のカプトガニは中生代ジュラ紀(およそ二億年前)に産する化石カプトガニとその形態はほとんど変わらない。二億年以上も基本的にその形態を変えていないのである。このことから「生きている化石」とも呼ばれる。かつては西日本沿岸域に多数生息しており、乾燥・破碎した後に肥料としても利用されたともいわれるが、その後、沿岸域の開発に伴う生息環境の悪化によって各地から急速に姿を消した。国際自然保護連合が平成六年(一九九四)版レッドデータブックで「絶滅危惧種」に、日本でも平成十二年(二〇〇〇)、絶滅危惧I類に指定した。

カプトガニは取り立てて特異な環境で成育するのではない。その生活史を通して一連の砂浜―泥干潟―アマモ場を必要とするようである。産卵は砂浜で行われる。砂の中へ生みつけられた卵は太陽熱によって孵化する。孵化直後の形態は古生代に繁栄した三葉虫に類似していることから三葉虫型幼生と呼ばれる。カプトガニの餌はアサリやゴカイなどであり、したがって、成長にはこのような餌生物が生息する干潟がなくてはならない。その後、硬い殻を脱ぎ捨てる脱皮を繰り返し、一〇〜一五年を経て成体になる。成体の生息場所はやや深いアマモ場であるとされる。各地でカプトガニが絶滅に瀕している背景には、砂浜―泥干潟―アマモ場と連続した環境が沿岸域の開発により急速に消滅していることが挙げられる。

西日本では伊万里湾多々良でのカプトガニ産卵場は有名であるが、そのほかに対馬・浅茅湾、杵岐東海岸、平戸西岸、佐世保湾にも生息が確認されている。この生きた化石とも呼ばれるカプトガニが大村湾に生息していることを知る人は少ない。その分布は湾口部特に早岐瀬戸と中央部東岸の松原付近である。今でも早岐瀬戸の周辺には相当数のカプトガニが生息しているようで、しばしば漁師の網にかかるという。このような場では良好な水質を保った砂質海浜がある。



図3-13 カプトガニ  
(['クラバー図譜']より 長崎大学附属図書館所蔵)

## 大陸系の遺存種オキヒラシイノミガイ (*Pythia cecillae*(Philippi, 1947))

オカミミガイ科に分類される巻貝の一種。東アジアの一部区域だけに分布し、汽水域周辺のヨシ原に生息する。殻表は褐色で光沢のない殻皮を被るが、明るい黄褐色から黒に近いものまで変異が大きく、色帯や横長の斑点が出るものもある。磨耗すると殻皮が失われ、灰白色や淡紫色を呈した個体も多い。成貝は小型で、長さ二五<sup>ミリ</sup>・径一五<sup>ミリ</sup>程度である。貝殻はやや細長いドングリ形で、背腹に平たく、左右はやや角張る。現在の分布からして大陸系の遺存種である可能性が高い。

## 環境変化を反映しているイセシラガイ (*Anadonia stearnsiana*(Oyama, 1954))

大村湾中央部で行われたボーリング調査の結果、海底面下六〇―一七〇<sup>センチ</sup>にかけて現在は大村湾に生息していない大型二枚貝が発見された。その貝はイセシラガイである。本種は潮下帯水深五―一〇<sup>メートル</sup>以深の砂泥質環境に生息するが、汚濁に弱く、全国的に多くの内湾域で消滅しており、絶滅危惧種とされている。大村湾では約五〇〇年前頃までは生息していたが、それ以降の堆積物からは産出せず、代わってやや汚濁に強いイヨスタレ (*Paphia undulata* (Born, 1778)) が産出するようになっていた。また、現在は貧酸素に強い<sup>と</sup>されるズクガイ (*Theora fragilis* (A. Adams, 1855)) が津水湾などに生息している。このことは大村湾の環境も定常的ではなく、常に周囲の影響を受けて変化していることを示している。

## 浜辺を彩る黄色い花―ハマボウ (*Hibiscus hamabo* Seibolt et Zuccarini, 1870)

樹高一―二<sup>メートル</sup>の落葉低木で、波の穏やかな入り江や河口の塩湿地に生育する。梅雨明け頃に直径五<sup>センチ</sup>ほどの黄色の花をつけるが、他のアオイ科の植物と同様に一日でしほむ。奄美大島から九州、四国、本州太平洋岸に生育し、神奈川県三浦半島付近と対馬が分布限界になっている。大村湾では津水湾や形上湾、大崎半島に生育しているほか、田島や瀬戸の島などにも分布していることが確認されている。しかし、大村湾のみならず昨今の沿岸域の開発に伴って、ハマボウの生育地が極端に減少していることから、長崎県では独自に準絶滅危惧種とされている。

## 二 大村湾の水環境と赤潮

「赤潮」とは動植物プランクトンが異常に増殖をしてそれらの体色により海水が着色する現象である。植物性プランクトンは十分な栄養塩と適当な温度、光環境が整えば、無性生殖すなわち細胞を二分裂させること一を繰り返すことによって、時間の経過とともにネズミ算式に細胞数を増やす。プランクトンの大きさにもよるが、大きさが三〇ミクロン程度の種ならば海水一リットル当たり数千細胞になると、海色が顕著に変わる。一〇ミクロン程度の種ならば海水一リットル当たり一〇。細胞も含まれることもある。これが「赤潮」である。赤潮は突然に発生するように見えるが、人間が目視できる状態になる前に、既に大規模に増殖する体勢に入っている。赤潮といっても総てのプランクトン増殖が海を赤色に変えるのではない。濃茶褐色の醬油色や黄緑色、時には白濁色でも赤潮と表される。今のところ数値として赤潮を表現する統一の見解はないが、一般的な目安として★クロロフィルa量で海水一リットルあたり五〇ミクロンと考えられ、これは大きさ三〇ミクロン程度のプランクトンならば一〇〇〇細胞／リットルに相当する。ところで「海水の着色現象」が確認されなければ赤潮発生件数には入ってこない。したがって、沿岸環境に関心を寄せる人が多くなると被害を伴わない小規模な海水着色現象も赤潮として計数されることが多くなる。水質悪化を議論する場合には赤潮発生件数のみならず原因種や継続期間、発生規模も考慮すべきである(写真3-194)。

★クロロフィルaとは、植物細胞の細胞器である葉緑体に含まれる主要な同化色素の一つ。光合成において光エネルギーを吸収・伝達することによって光合成反応に関与する。クロロフィルにはa、b、cがあり、ラン藻類、藻類、緑色植物はクロロフィルaを主体とし、b若しくはcを持つ。光合成バクテリアはバクテリオクロロフィルaを持つ。これによって、海水中のクロロフィルa濃度を測定することによって植物プランクトン全体の存在量を推定することができる。

### ■大村湾での赤潮

大村湾で養殖産業に甚大な被害を与えた赤潮原因種



一九一七 デイノフィシス (*Dinophysis* sp.) \* (ほかに珪藻やカイアシ類などの記述があるが、現時点ではこれらはすべて従属栄養生物なので、これらが赤潮原因生物であったとは考えにくい。)

一九四七 デイクチオカ・フィブラ (*Dicthocha fibra*) #

一九六一 ゴニオラックス・ポリグララム (*Gonyaulax polygramma*) \*

一九六五 カレニア・シキモトイ (*Karenia mikimotoi*) \*

一九六六 アカシオ・サンゲイネア (*Akashiwo sanguinea*) \*

一九六八 カレニア・シキモトイ \*

一九七〇年代 プロロセントルム・ニカンス (*Prorocentrum nicans*) \*

セラチウム・フス (*Ceratium fusus*) \* セラチウム・フルカ (*Ceratium furca*) \*

ギムノデイニウム・インプディウム (*Gymnodinium impudicum*) \* アカシオ・サンゲイネア \*

プロロセントルム・シコクエ

ンセ (*Prorocentrum shikokuense*) \* プロロセントルム・コンプレッサ

ム (*Prorocentrum compressum*) \* ハテロシグマ・アカシオ (*Heterosigma akashiwo*) ②

一九八〇年代 プロロセントルム・シグモイデス (*Prorocentrum sigmoides* 写真3-194a) \* ミリオネクタ・ルブラ (*Myrionecta rubra*) #

一九九〇年代 コクロデイニウム・ポリクリコイデス (*Cochlodinium polykrikooides* 写真3-194b) \* ヘテロカプサ・サーキニリス

カ (*Heterocapsa circulariscuama*) \*

二〇〇〇年代 シヤットネラ・グロボーサ (*Chattonella globosa*) # シヤットネラ・アンティカ (*Chattonella antiqua*) ②

#珪質鞭毛藻、##絨毛虫 \*渦鞭毛藻 @ラフィド藻

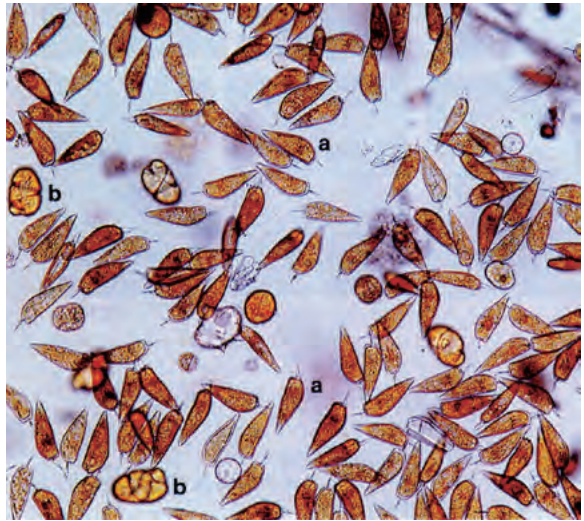


写真3-194

大村湾は長崎県で最も早く赤潮発生が記録されたところで、それは大正六年（一九一七）に遡る。原因プランクトンとしてダイノフィス（*Dinophysis*）属の種が挙げられているが、この種類は従属栄養性渦鞭毛藻であることから原因種と考えにくい。恐らくこの種にエサとして捕食された微小植物プランクトンの大量発生が推察される。その後、昭和二十二年（一九四七）には珪質鞭毛藻ダイクチオカ・フィブラを原因種とした赤潮発生記録がある。昭和二十（一九五〇）年代には断片的に数年に一件程度の発生記録が残されている。昭和四十年（一九六五）にカレリア・ミキモトイによる大規模赤潮が発生し、真珠養殖や沿岸漁業に大打撃を与えた。その後、ほぼ年一件程度の比較的大規模な赤潮が発生しており、昭和四十年代後半以降には年二〜四件の渦鞭毛藻を原因種とした赤潮が記録されている。昭和四十年代後半〜五十年代前半にはやや多発し五〜一件を数える。

その後は最高で年四件程度の発生状況であるが、平成年代に入っては年五〜八件の記録が残されている。真珠養殖や漁業は今も続けられているが昭和四十年の大規模赤潮発生以降に極端に減少し、現在は形上湾等で行われているに過ぎない。大村湾で発生する赤潮の原因生物は渦鞭毛藻が圧倒的に多く、次いで珪藻類、ダイクチオカ藻類、ラフィド藻類である。昭和四十年に大規模な被害を与えた生物は渦鞭毛藻のカレリア・ミキモトイ（現在はカレリア・ミキモトイの生物名を持つが、後述するように以前はギムノディニウム・ミキモトイ *Gymnodinium mikimotoi* やギムノディニウム・ナガサキエンセ *Gymnodinium nagasakiense* とも呼ばれた）である。このミキモトイという名称は、三重県志摩半島で、日本で最初の真珠養殖を成功させた御木本幸吉翁を記念して付けられた。志摩半島のその場所で昭和九年（一九三四）にこの種による赤潮が発生して養殖アコヤ貝に被害を与えた。それと同じプランクトンが昭和四十年（一九六五）に大村湾で出現し、大きな被害を与えたのである。長崎県下でこの時の赤潮による漁業被害金額は約七億円で、平成十一年（一九九九）に伊万里湾で発生した赤潮被害額の約八億円に次いで、ほぼ半世紀を過ぎた今でも県下第二位の記録になっている。

このように昭和三十年代前半から昭和四十年代後半にかけて日本各地で水産被害を伴う大型赤潮が発生したことを受けて、赤潮の科学的調査研究が日本では世界に先駆けて本格的に開始された。その中でも大村湾は日本の赤潮研究発祥の地

である。

### ディクチオカと*Chattonella globosa* (写真3-195)

前述のように大村湾では昭和二十二年(一九四七)にディクチオカ藻*Dityocha fibula* Ehrenbergの大規模な赤潮が発生し、それ以降も本種が赤潮を形成することが知られている(松岡數充(二〇〇四)『大村湾』超閉鎖性海域「琴の海」の自然と環境)。最近でもこの種類による赤潮がしばしば発生している。平成二十二年七月中旬から八月上旬にかけて大村湾南部を中心に約二週間にわたって球形*Chattonella*とディクチオカ藻の混合赤潮が発生した。球形*Chattonella*は有害種とある*Chattonella marina* (Subramanyan) Y. Hara et Chihara var. *antiqua* (Hada) Demura et Kawachiや*Chattonella marina* (Subramanyan) var. *marina*との関連とその出現が注目されてきており、これまでに国内外でいくつかの産出報告がある(保坂三継ほか(一九九二)「東京湾におけるラフィド藻*Chattonella* sp.(球形シャットネラ)の出現」)。しかし、これまでのところ赤潮状態にもかかわらず大村湾を含め明瞭な漁業被害が発生した事例はなかった。が、平成二十三年(二〇一一)には瀬戸内海沿岸域でも球形*Chattonella*とディクチオカ藻の混合赤潮が発生し、畜養されていた魚類に被害が出た。本種赤潮は水産資源保全の観点から注意を要する。

その一方で、最近、互いに形態が著しく異なっており、異なった分類群に区分されてきた植物プランクトン*Chattonella globosa* Y. Hara et Chihara 球形*Chattonella*と*Dityocha fibula* Ehrenberg var. *stapeida* (Haeckel) Lemmermannが



写真3-195 平成22年に発生した球形シャットネラとディクチオカ藻の混合赤潮

同一生物の生活環における異なった形態型であることが分子系統学手法を用いて証明された(高野義人ほか(二〇〇六)「*Chattonella globosa*は*Dictyocha*属だった—*C. globosa*, *Dictyocha*属の分子系統学的研究」, Chang et al. 二〇一二)。  
大村湾で平成二十二年に発生した球形*Chattonella*とディクチャオカ藻の混合赤潮はこのような新たな分類学的見解を野外で証明した事例となる。最近、この問題に新たな新展があつた。Chang et al.(二〇一二)は*Chattonella globosa*をラフィド藻から独立させ、新たに*Viccius*属を創設し、そこに所属せしめた。

(松岡敷充)